第 10 巻第 3 号　平成 16 年 1 月 31 日発行

MHC

日本組織適合性学会誌

Major Histocompatibility Complex

Vol. 10 No. 3, 2004

Contents

Major Histocompatibility Complex
Official Journal of Japanese Society for Histocompatibility and Immunogenetics

日本組織適合性学会誌 MHC 編集委員会

（別記様式第１）

平成１６年度認定ＨＬＡ検査技術者認定試験受験申請書

※受験番号

□ 認定ＨＬＡ検査技術者認定試験の受験を申請します。

平成　年　月　日申請

フリガナ		性別	写真を貼付 申請日前６ヵ月以内に撮影されたもので大きさは４×３cm 平成　年　月　日撮影
受験者氏名	㊞	男・女	
生年月日	（　　歳）		
本籍地（都道府県名）			
フリガナ			
現住所			
電話	（　　）		
フリガナ			
勤務先名			
フリガナ			
勤務先住所			
電話	（　　）	ファックス	（　　）
電子メール	@		

※受付日	※書類の不備
※受験の出欠	※合否判定

切り取り線

平成１６年度認定ＨＬＡ検査技術者認定試験受験票

※受験番号

フリガナ		性別	写真を貼付 申請日前６ヵ月以内に撮影されたもので大きさは４×３cm 平成　年　月　日撮影
受験者氏名		男・女	
生年月日	（　　歳）		
本籍地（都道府県名）			
フリガナ			
現住所			

注　太枠内の必要事項を楷書で記入すること。※欄は記入しないこと。

● Contents ●

日本組織適合性学会誌　第10巻第3号　平成16年1月31日発行

Major Histocompatibility Complex
Official Journal of Japanese Society for Histocompatibility and Immunogenetics
JSHI

相沢　幹先生のご逝去を悼む

日本組織適合性学会の生みの親である相沢　幹先生は，平成15年10月31日急逝されました。ここに慎んでお悔やみ申し上げます。

相沢　幹先生は，昭和22年北海道帝国大学医学部を卒業し，その後北海道大学医学部第一病理学教室で研究，教育に従事され，昭和40年北海道大学教授に任ぜられました。23年間の長きにわたり病理学第一講座を主宰し，研究に専念するとともに，多数の病理，移植並びに免疫を専門とする医学者，医師を育成されました。昭和63年同大学を定年退官されてからは，北海道公安委員会委員長の要職につかれるとともに，北海道組織病理学センター会長を勤められました。

相沢　幹先生の研究活動は，病理学・免疫学全般にわたりますが，最も力を注いだ領域は「移植の免疫遺伝学」と「主要組織適合遺伝子複合体」の研究です。

ラットを用いた心臓移植，腎臓移植などを広範にすすめ，移植の成否を左右する主要及びマイナーな組織適合抗原を解析し，拒絶の免疫学機構を明らかにしました。その後，ヒトの主要組織適合複合体（HLA）の研究に着手し，HLA抗原Sa1（現在のB54，サッポロ1番と呼んでいた)の発見，HLA-Dw15ホモ接合体細胞（LD-Wa）の開発，各種疾患とHLA抗原との相関を明らかにしました。

日本のHLA研究の歴史を話されるとき，いつも口にされていたことは昭和47年（1972年)サンタバーバラで開催された「HLAと疾患感受性」に関する第1回日米科学会議(稲生綱政先生，D. B. Amos先生が主催)に参加され，日本におけるHLA研究の遅れを痛感し，研究の推進を決意されたことです(サンタバーバラの誓いといわれてました)。この時期を境に，ラットMHCからHLA研究に力を注がれ，そして日本組織適合性研究会を推進すると同時に，文部省科学研究費による研究班「MHCの構造と機能」を組織してMHC研究の向上につとめられました。

昭和61年に第3回アジア・オセアニア組織適合性ワークショップ，平成3年に第11回国際組織適合性ワークショップを主催されました。平成4年に20年あまり続いた研究会を現在の日本組織適合性学会へ発展させ初代学会長を勤められました。

相沢　幹先生は，卓越した教育・研究者であるとともに，音楽活動を続けられ，多岐にわたり人を魅了するお

話をされ，文化人として多くの人々から尊敬されておりました。北海道大学教授就任と同時に同大学の交響楽団の団長をされ，自らチェロを演奏して団員を指導しておりました。平成15年11月6日の故相沢幹先生の葬儀は，北海道大学交響楽団が奏でるヴェートーヴェン交響曲第7番の荘厳な追悼の調べにのりすすめられ，校歌「都ぞ弥生」の曲で送られ，旅立たれました。享年78歳でした。

これ迄の相沢　幹先生の御研究を讃え，日本組織適合性学会の発展への多大な御貢献に感謝申し上げ，相沢幹先生の御冥福をお祈り申し上げます。

日本組織適合性学会　監事
片桐　一

第13回日本組織適合性学会大会のご案内

第13回日本組織適合性学会大会
大会長　佐田　正晴

早春の候，皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

第13回日本組織適合性学会大会を下記の要領にて開催いたします。本大会では臨床家との相互理解を深めると共に接点を求めるために，「MHC: 基礎と臨床のバリアフリーと協調を目指して」をメインテーマにいたしました。多くの皆様の御参加をお待ちいたしております。

会　期: 2004年9月23日(木・祭)～9月25日(土)

会　場: 千里ライフサイエンスセンター
〒560–0082　大阪府豊中市新千里東町1–4–2
TEL. 06–6873–2010
FAX. 06–6873–2011
HP. http://www1.senri-lc.co.jp

大会内容

以下の学術プログラムを予定しています。

1. 特別講演・教育講演(仮題)
   - 「Organ transplantation and HLA: a history and future」
     Paul. I. Terasaki (Terasaki Foundation Laboratory, USA)
   - 「移植における免疫寛容導入: 同種移植から異種移植へ」
     山田 和彦 (Transplantation Biology Research Center, Massachusetts General Hospital, USA)
   - 「再生医療の将来: 臨床応用を目指して」
     中畑 龍俊(京都大学医学部発生発達医学)
   - 「造血幹細胞移植におけるNK細胞受容体適合性の意義」
     屋部 登志雄(東京都赤十字血液センター技術部研究一課)
2. シンポジウム・ワークショップ(予定)
   - 「造血幹細胞移植」
   - 「移植医療におけるHLAタイピングの標準化」
   - 「医用ミニブタの医学・生物学的応用」
3. 一般演題
4. 市民公開講座(予定)
   「白血病・リンパ腫と，いかに闘うか?」
5. ランチョンセミナー，イブニングセミナー，その他

一般演題募集要項

1. 発表形式
   発表形式は口演またはポスターにより行います。演者は本学会員であることが必要です。発表形式(口演またはポスター)に関しましてはプログラム委員会に一任いただきたく存じます。

2. 申し込み方法

1）抄録形式

- 抄録は Microsoft Office Word のテキストファイルを用い作成下さい。
- 演題名，演者(発表者に○印)，所属(正式名称が長い場合には省略所属名)，本文の順で作成下さい。
- 本文は 800 字以内を厳守し，目的，方法，結果，考察などに分類し記載下さい。英数字は半角文字を使用し，2 文字で 1 字とします。

2）演題申し込み票ファイルの作成

- 抄録とは異なるファイルを作成下さい。
- 演題名，演者，所属，代表者の連絡先住所，電話番号，FAX，e-mail アドレスを必ず記載下さい。

3）e-mail による演題申し込み

- 演題受付は原則として e-mail 受付のみといたします。
- 件名は「13JSHI 演題」とし，① 抄録，② 演題申し込み票ファイルの 2 つのファイルを，添付書類にて第 13 回大会事務局アドレスに送って下さい。

3. 演題申し込み締め切り

2004 年 5 月 31 日(月)必着

4. 演題受理通知および採択通知

演題受付後 7 日以内に，e-mail または FAX にて演題受理を通知いたします。

演題発表形式(口演またはポスター)および発表日時につきましては，2004 年 7 月下旬頃までに，e-mail または FAX にて通知いたします。

2004 年度 TFB 学術奨励賞の募集

2004 年度も，TFB 学術奨励賞として，若手学会員への研究助成が予定されています。今大会においては，152 頁の「2004 年度 TFB 学術奨励賞の募集要項」の要領で助成金の授与を行いますので奮って御応募下さい。

参加登録費

下記，事前登録を行います。

参加費

	理事・評議員	会　員
事前登録 (2004 年 8 月 31 日迄)	¥8,000	¥6,000
当日参加 (2004 年 9 月 1 日以降)	¥10,000	¥8,000

事前登録参加費は下記の銀行口座に振り込みお願いいたします。参加証(領収書兼用)は，学会当日に受付にてお渡しします。尚，振込の際に氏名の後に会員番号を必ずご記入下さい。

〈振込先〉

りそな銀行　千里北支店

(普通)　6219903

第 13 回日本組織適合性学会大会　大会長　佐田正晴(さだ まさはる)

懇親会

2004年9月24日(金)19時頃より千里阪急ホテルプールサイド(雨天の場合は屋内)にて懇親会を開催いたします。

宿泊・交通の御案内

本大会に御参加の皆様には，近畿日本ツーリストが宿泊の手配をいたします。下記アドレスにアクセスいただきお早めにお申し込み下さい。

- 第13回日本組織適合性学会宿泊・近畿日本ツーリストアドレス
  http://www.lhweb.jp/knt/soshiki/sanka.html
  尚，交通に関しましては各自お手配下さい。

会場までの交通案内

会場の最寄り駅は，地下鉄御堂筋線・千里中央駅，大阪モノレール・千里中央駅です。

- 大阪伊丹空港から大阪モノレールで約13分
- 新大阪駅から地下鉄御堂筋線で約13分
- 大阪梅田から地下鉄御堂筋線で約19分

大会事務局

本大会に関するお問い合わせ，一般演題，2004年度TFB学術奨励賞の応募は，下記大会事務局にお願いいたします。

〒565–8565　大阪府吹田市藤白台5–7–1
国立循環器病センター研究所　再生医療部内
第13回日本組織適合性学会大会事務局
事務担当：鳥山　恵，坂田　奈緒美
TEL. 06–6833–5012内線2516，2362　FAX. 06–6835–5496
E-mail. megutori@ri.ncvc.go.jp

その他

- QCワークショップ，認定制度講習会につきましては本号別項を参照下さい。
- 大会情報は今後刊行されますMHC誌上および日本組織適合性学会ホームページで更新いたします。

2004年度 TFB 学術奨励賞の募集要項

1. 助成内容

今大会に応募された一般演題抄録の中から，特に優秀と認められた演題の筆頭演者に授与されます。授与件数は数件で，1件につき10万円程度の助成金授与を予定しております。

2. 応募資格

助成金応募にあたっては，以下の条件のすべてを満たしていることが必要です。

1）筆頭演者は本学会の正会員であり，かつ2003年度までの会費を納入済であること
2）筆頭演者は2004年9月23日時点で満45才未満であること
3）応募しようとする演題の内容において，筆頭演者が中心的な役割を果たしていること
4）応募しようとする演題の内容が，本学会にふさわしく，かつ未発表であること

3. 応募方法

大会の演題抄録募集とは別途の手続きで行いますので，以下の書類一式を簡易書留にて，大会事務局まで郵送願います。

必要書類

1）抄録30部
　一般演題に応募した抄録をA4用紙にプリントアウトしたもの(コピー可)
2）申し込み用紙
　A4用紙に，演題名，演者(全員)，所属(全員)と，応募者(筆頭演者)の連絡先住所，電話番号，FAX, e-mailアドレス，生年月日，年令を記入したもの
3）返信用定型封筒1通（80円切手を貼付のこと）

4. 応募締め切り

2004年5月31日(必着)

5. 審査および採択通知について

応募された演題については，MHC編集委員および編集協力者等が審査を行い，その結果を総合して採択を判断します。採択結果は7月中旬頃までに郵送にて通知致します。

6. 助成金の使途と会計報告

使途については特に制限はありませんが，学術奨励賞であることの趣旨を御理解の上，適切に使用ください。会計報告は特に必要ありません。

7. 受賞者にかかる義務について

1）助成金受賞者は，第13回日本組織適合性学会大会において，受賞講演のセッションにおいて発表を行って頂きます。
2）助成金受賞者は，受賞後1年以内に，助成が行われた研究課題についての報告書(様式は別途通知します)を学会宛に提出して頂きます。

8. 助成が行われた課題の研究成果発表について

該当研究課題の研究成果については，原著論文，もしくは総説等の形式にて，学会誌 MHC への積極的な発表をお願い致します。

日本組織適合性学会からのおしらせ
日本組織適合性学会 2003 年度 TFB 学術奨励賞選考結果について

日本組織適合性学会
会長　猪子英俊
TFB 学術奨励賞選考担当理事　木村彰方

1. 2003 年度 TFB 学術奨励賞の設立経緯と公募

TFB 社より本学会における学術奨励を目的として寄付いただいた助成金を活用して，2003 年度 TFB 学術奨励賞を設立し，以下の通り選考した。学術奨励賞は，第 12 回日本組織適合性学会大会に応募された一般演題の中から，特に優秀と認められた演題の筆頭演者に与えるものとした。応募資格は，(1) 共同演者を含めた全演者が本学会の正会員であり 2002 年度までの会費を納入済であること，(2) 筆頭演者は 2003 年 9 月 15 日時点で満 45 歳未満であること，(3) 応募しようとする演題の内容において，筆頭演者が中心的な役割を果たしたこと (4) 応募しようとする演題の内容が本学会にふさわしく，かつ未発表であることとした。

2. 選考経緯

TFB 学術奨励賞応募演題を含む第 12 回日本組織適合性学会大会一般演題の全演題抄録 (15 題) について，MHC 編集委員および編集協力者に 5 段階評価での採点を依頼した。返送された採点結果を集計し，最優秀賞 1 件，優秀賞 3 件を選出した。最優秀賞演題の得点は全一般演題中第 1 位であり，優秀賞演題の得点はいずれも上位 3 分の 1 に入っていた。

3. 選考結果

最優秀賞

氏名(所属)：柴田宏樹(東京医科歯科大学難治疾患研究所分子病態分野)
演　　題：Functional analysis of the NFKBIL1 gene product, I kappa B-like (IKBL) protein

優秀賞(順不同)

氏名(所属)：重成敦子(東海大学医学部分子生命科学)
演　　題：SLA クラス I 遺伝子領域のゲノム構造解析—TRIM15-UBD 遺伝子間の解析—

氏名(所属)：高橋(田中)弓子(東京医科歯科大学難治疾患研究所分子病態分野)
演　　題：Analysis of polymorphisms in the MHC class I genes from rhesus macaques

氏名(所属)：大久保光夫(埼玉医大医療センター輸血細胞治療部)
演　　題：Analysis of HLA-DRB1*0901-binding HPV-16 E7 helper T cell epitope for therapeutic usage of cervical carcinoma

4. 受賞講演

最優秀賞演題は，第 12 回組織適合性学会大会に引き続いて開催された第 7 回アジアオセアニア・ワークショップ期間中に，TFB 学術奨励賞最優秀受賞口演として発表された。また，優秀賞演題は，第 12 回組織適合性学会大会中に TFB 学術奨励賞優秀受賞口演として発表された。

第８回　HLA-DNA タイピング QC ワークショップのご案内

日本組織適合性学会
認定制度委員会
委員長　佐田正晴
QC ワークショップ部会長　木村彰方

前回に引き続き認定制度委員会主催の QC ワークショップ（QCWS）を開催致しますので，下記の通り案内致します。第７回 QCWS の日程と比較して，参加申し込み，サンプル配布，結果提出などの締めきりを一か月ほど早く設定していますので，ご注意ください。

記

1. スケジュール
   平成 16 年４月上旬　サンプル配布（原則として，ラボ単位で配布します）
   平成 16 年５月下旬　結果提出締切り（原則として，電子媒体によるものとします）

2. QC ワークショップ集会
   平成 16 年９月 23 日（木，祝日）午後　第 13 回日本組織適合性学会（大阪）にて

3. 参加費（QC ワークショップ集会のみの参加も同様）
   認定制度との関連で，参加は原則として個人を対象とします。
   QC ワークショップにかかる資料代等の実費として，一名 2,000 円を申し受けます。

4. 参加申し込み（QC ワークショップ集会のみ参加する場合も同様に申し込んでください）
   学会ホームページ QC ワークショップ部会の URL（http://jshi.umin.ac.jp/QCWS/）より申し込んでください。あるいは，前記 URL より申し込み様式をダウンロードし，必要事項を記入後，メール添付にて QC ワークショップ部会まで送付ください。必要事項をメール本文に直接記入して送られても結構です。なお，電子媒体の使用が困難な場合は，別紙用紙に必要事項を記入し，ファックスまたは郵送にてお送りください。
   参加費の払い込みをもって参加申し込みの完了と致しますので，参加費は以下の口座に振込んでください。
   原則として，振込の控えをもって領収書とさせていただきます。
   参加申し込み（参加費払い込み）の締切りは，平成 16 年３月５日（金）とします。

5. 振込口座
   みずほ銀行厚木支店
   普通預金　8037067
   JSHI 認定制度委員会事務局　猪子英俊

第８回　HLA-DNA タイピング QC ワークショップ参加申し込み書

（QC ワークショップ集会のみ参加する場合も，同様に申し込んでください）

参加申し込み締め切り（参加費払い込みを含む）は平成 16 年 3 月 5 日（金）です。

申込書の送付先
電子メール使用の場合
Email アドレス：jshiqcws@ri.ndmc.ac.jp

郵送または Fax の場合
101–0062 千代田区神田駿河台 2–3–10
東京医科歯科大学難治疾患研究所分子病態分野　木村彰方
Fax：03–5280–8055

＊　　＊　　＊

以下の通り，第 8 回 HLA-DNA タイピング QC ワークショップに参加致します

代表*	参加者氏名	所属施設・部署	E メールアドレス#

*；参加者の代表（結果の問い合わせなどに対応される方に ◎ をつけてください）
#；問い合わせや案内に用いますので，代表者のみの記入で結構です。

サンプル送付先（実際にサンプルを受取る方）
QC ワークショップ集会のみの参加の場合は記入不要です

住所（郵便番号）：（　　）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
施 設 名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
所属部署：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
氏　　名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
E-mail：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿，電話：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

結果の記入方法や返送方法の詳細等を今後検討し，学会ホームページに掲載するとともに，代表者宛に連絡します。

組織適合性検査技術者認定制度
平成16年度・認定HLA検査技術者講習会のご案内

組織適合性検査技術者認定制度委員会
委員長　佐田　正晴
組織適合性検査技術者認定制度委員会教育部会
部会長　西村　泰治

日　時：平成16年9月23日(木曜日：祭日) 16時から19時(予定)
場　所：千里ライフサイエンスセンター
参加費：2,000円程度を予定(テキスト代を含む)

内　容：各講習とも質疑応答時間を含めて，40分ほどを予定しています。なお講習のタイトルは今後，若干変更される可能性があります。

(1) HLAの検査法：　タイピングとクロスマッチについて
　　中島　文明　先生(神奈川県赤十字血液センター)
(2) HLAの遺伝学：　木村　彰方　先生(東京医歯大・難研・分子病態分野)
　　ブレーク(15～20分)
(3) HLAの構造と機能：　移植免疫との関連
　　千住　覚　先生(熊本大学・院医薬・免疫識別学分野)
(4) 移植臨床におけるHLA：　造血幹細胞移植を中心に
　　一戸　辰夫　先生(京都大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科)

この講習会は，今後HLA検査技術者認定を取得しようとする者を対象に実施されますが，それ以外の者であっても自由に参加することができます。受講希望者には，以下の申込書に必要事項を記入し，認定制度委員会事務局宛にFAX (0463–94–8884) で平成16年6月25日(金)までに送付してください。あるいは，Eメールで件名を「認定講習会」とし，申込書の必要事項を書き込んで「jshijimu@m.med.u-tokai.ac.jp」宛に，上記締め切り日までに送信してください。テキストは，申込数に応じて作成し，申込者に優先して配布します。そのため当日の申し込み者については，テキストの配布を受けられない場合がありますことを，あらかじめご了承ください。なお参加費は平成16年8月25日(水)までに，指定の銀行口座(みずほ銀行厚木支店 普通預金 8037067 JSHI認定制度委員会事務局 猪子英俊)に振込んでください。なお参加費前納者には，事前に講習会資料を送付させて頂きます。また受講申し込みをされ参加費を振り込まれた方で，当日欠席された方には返金できませんことを御了承ください。

平成16年度認定HLA検査技術者講習会　受講申込書

氏　　名：
所　　属：
住　　所：〒
電話番号：
FAX番号：
Eメール：
HLA検査技術者認定取得予定　□なし　□あり → 平成　　年度を予定

平成16年度　認定HLA検査技術者試験実施要領

日本組織適合性学会
会　長　猪子　英俊
組織適合性技術者認定制度委員会
委員長　佐田　正晴

認定HLA検査技術者及び認定組織適合性指導者認定制度規則(以下「規則」という。)に基づき認定HLA検査技術者資格認定試験を下記のごとく実施する。なお，研修場所・日時に関しては後日申請者に文書で通知する。

平成17年度に受験を予定している者は，講習会のみ今年度に受講しておくこと。平成18年度以降に受験を予定している者も講習会の受講は可能である。なお，講習会の詳細については157頁の「講習会開催のご案内」をご覧いただきたい。

1　申　請　資　格: 認定HLA検査技術者の認定試験受験資格基準は，申請の前年度までに次の各項のすべてを備えていなければならない。(1) 日本組織適合性学会(以下「学会」という。)の会員歴が通算して3年以上あること。(2) 組織適合性検査に関する業務経験が3年以上あること。(3) 5年間で技術者履修課程に定められた講習の受講歴があること。(4) 5年間で資格審査基準が30単位以上あること。但し，当学会の大会への参加が5単位以上含まれていなければならない。なお，(2) の業務とは，組織適合性に関する検査，研究及び教育をいう。

2　申請書提出期限: 平成16年4月23日(金)までに到着するよう簡易書留で下記の事務局へ送付すること。

3　申請書送付先: 〒259–1193　神奈川県伊勢原市望星台
東海大学医学部分子生命科学系遺伝情報部門内
組織適合性技術者認定制度委員会事務局
電話 0463–93–1121 内線 2653

4　提　出　書　類: (1) 認定HLA検査技術者認定申請書と別記様式第1から5
(2) 申請料振り込み用紙の写し
(3) 80円切手を貼った返信用封筒(申請者へ送れるように住所・氏名などを記載しておくこと。但しメールで連絡できるものについては返信用封筒は不用である)
必要な申請書類は本誌に綴じ込められている。なお，別記様式第2の5の貼付用台紙には学会参加証等のコピーおよび講習会修了証を貼り付けること。資格審査基準証明書(別記様式2の1)の所属長署名・捺印はなくてもよい。

5　申　　請　　料: 15,000円
振込先
みずほ銀行厚木支店
普通預金 8037067
JSHI認定制度委員会事務局　猪子英俊

6 実技研修会: 日時，場所等は申請者にメールまたは文書で通知する。
7月から8月中の2ないし3日間(施設によって異なる)を予定している。開催都市は，東京，神奈川，京都，大阪，福岡を予定している。

7 実技・筆記試験: **筆　記:** 平成16年9月23日(木) 17時00分から18時00分
会　場: 千里ライフサイエンスセンター(大阪府豊中市)
実　技: QCワークショップの参加歴がある場合には免除される。
QCワークショップの参加歴がない場合には実技研修評価をもって実技試験に換える。

検査結果(ワークシート)記載法と結果報告書表記法 およびアンビギュイティ(ambiguity)の取扱いの原則(2003年度版)

日本組織適合性学会HLA標準化委員会
(2003年12月12日)

Ⅰ. 検査結果(ワークシート)の表記法について

1. 2桁レベル(粗分別, low resolution)でタイピングを実施した場合は, 2桁でアリルを表記するものとし, 4桁レベルでアリルを表記してはならない。また, アンビギュイティ(ambiguity)のある結果を記載する場合は, 下記の「**Ⅱ. アンビギュイティ(ambiguity)の取扱いについて**」に従う。2桁レベルで区別できないアリルが存在する場合は, 区別のできる別な試薬キットまたは方法を用いてアリルを区別することが望ましい。

2. 4桁レベル(細分別, high resolution)でタイピングを実施した場合は, 4桁でアリルを表記するものとする。ただし, 5桁以上の細分化が知られているアリルで, 5桁以上でアリルが特定できた場合にのみ, その桁数でアリルを記載する。また, 4桁レベル以上のタイピングでアンビギュイティのある結果が得られた場合は, それらのアリルが区別できる別な試薬キットまたは方法を使用してアリルを判別することが望ましい。

3. ひとつのカラム(セル)に2種類のアリルを記載する場合は, それぞれを「,(カンマ)」で区切る。
   例1 「HLA-DRB1*04, HLA-DRB1*13」(2種類のアリルがヘテロ接合で検出された場合)
   例2 「HLA-DRB1*11, -」(アリルが一つしか検出されなかった場合は, 検出されたアリルを最初に書き,「,」を付した後に「-」を書く)

4. ふたつのカラム(セル)に2種類のアリルを記載する場合は, それぞれのアリルをそれぞれのカラムに記載する。アリルがひとつしか検出されなかった場合は, 後ろのカラムに「-」を記載する。家系調査によりホモ接合と判定された場合は同じアリルをそれぞれのカラムに記載することが従来おこなわれていたが, この場合についても, アリルが一つしか検出されていないため「-」で記載することが望ましい。これは, 次の5. の場合と区別するためである。

5. 同じアリル群に属していても明らかに異なるアリルが二つ検出された場合には, それぞれのカラムにアリルを記載する。
   例1 「HLA-DRB1*11, HLA-DRB1*11」は, 明らかに区別できるHLA-DRB1*11アリルがある場合(HLA-DRB1*11のヘテロ接合)に使用する。「HLA-DRB1*1101/04/06/+」と反応するプライマーセットと「HLA-DRB1*1102/14/16/+」に反応するプライマーセットの両方に反応しているような場合に使用する。
   参考1 「HLA-DRB1*11, -」は区別できないHLA-DRB1*11アリルがある場合(HLA-DRB1*11のホモ接合の場合を含む)
   参考2 判定されたアリル以外に明らかに異なるアリルの存在が疑われるが, そのアリルを特定できない場合は,「HLA-DRB1*11, nd」と判定できたアリルの後ろに「, nd」などと記載してもよい。ただし, このような表記はあまり望ましくないが, 他の検査キットや別の方法を用いても

アリルを特定できない場合など，やむ終えない場合にのみ使用すること。

Ⅱ．アンビギュイティ（ambiguity）の取扱いについて

区別できないアリルが2種類以上存在する場合には以下に従う。

1. 最も番号の若いアリルを4桁で最初に表記し，その後に「/(スラッシュ)」を入れ，2つ目以降のアリルは3桁目と4桁目の2桁の数字のみを記載する。
   a. 区別の付かない4桁アリルが2つ存在する場合は以下のように表記する。
      例 「HLA-DRB1*1501/03」(HLA-DRB1*1501 と HLA-DRB1*1503 が区別できない場合)
   b. 区別の付かない4桁アリルが3つ存在する場合は以下のように表記する。
      例 「HLA-DRB1*1301/02/16」(HLA-DRB1*1301，HLA-DRB1*1302 と HLA-DRB1*1316 が区別できない場合)
   c. 区別の付かない4桁アリルが4つ以上存在する場合には，番号の若い順に3アリルを記し，最後に「/+」をつける。
      例 HLA-DRB1*0401/03/04/+

2. 検査試薬キットに添付されている判定表には4桁と6桁のアリルが混在表記されている場合があるが，6桁アリルは使用しない。
   例 判定表に「HLA-DRB1*150101 - 13」と書かれている場合，「HLA-DRB1*150101/02/03/+」とは記載せず，「HLA-DRB1*1501/02/03/+」と記載する。

3. 上2桁レベルが異なる4桁アリルが複数存在する場合には，4桁表記を「/(スラッシュ)」でつなぐ。
   例 アリルが2つの場合，「HLA-DRB1*1501/1601」と記載する。
   3つの場合以上の場合，「HLA-DRB1*1501/1602/+」と記載する。

4. 上2桁レベルが異なる2桁アリルが複数存在する場合は，2桁表記を「/」でつなぐ。ただし，2桁レベルで区別できないアリルが存在するようなアンビギュイティタイピングは望ましくないため，このような表記は原則として採用しない。
   例 アリルが2つの場合，「HLA-DRB1*15/16」と表記する。
   3つの場合，「HLA-DRB1*08/11/12」と表記する。
   4つの場合以上の場合，「HLA-DRB1*08/11/12/+」と表記する。

Ⅲ．結果報告書の表記法について

1. 2桁レベル（粗分別，low resolution）でタイピングのみを実施した検査の場合
   a. 粗分別タイピングのみを実施した場合は，原則的に2桁レベルで報告するものとするが，「HLA 型」で結果を報告してもよい。4桁レベルでアリルを報告してはならない。報告書への記載については「**Ⅰ．検査結果(ワークシート)の記載法について**」の3と4に従う。従来使用していた「血清対応型」を今後は「HLA 型」とし，血清学で決めたものについては「HLA 抗原型」と標記することとする。
      例 HLA-DRB1*09 と判定場合は，HLA-DRB1*09 と報告する。HLA-DRB1*0901（あるいは HLA-DRB1*090102）としてはならない。あるいは，「HLA-DR9」と報告してもよい。
   b. HLA 型の推定は，WHO 命名委員会報告に従う。ただし，WHO 命名委員会で HLA 型が不明な場合でも，日本組織適合性学会 HLA 標準化委員会において「HLA 型」が確認されている場合(別表)

には，その「HLA 型」を記載する。

例　HLA-DRB1*0403/05/06/+ と判定された場合に，「HLA-DR4」と記載してもよい。

c. WHO 命名委員会と日本組織適合性学会 HLA 標準化委員会の何れでも HLA 型が不明な場合は，アリルを 2 桁で結果報告書に記載する。その場合，備考欄に「このアリルは対応する HLA 型がよく分かっていないためアリル名で記載してあります」などと説明を付記してもよい。

d. 抗原対応部分(アリル名の上 2 桁の数字)で異なるアリルが複数混在し，区別できない場合は，それらのアリルが区別のできる別な試薬キットまたは方法を用いてアリルを区別した後に結果を報告することが望ましい。

e. 判定されたアリルが一つで，それ以外に明らかに異なるアリルの存在が疑われるが，そのアリルを特定できない場合は，「nd」などと記載してもよい。ただし，このような表記はあまり望ましくないが，他の検査キットや別の方法論を用いてもアリルを特定できない場合など，やむ終えない場合にのみ使用する。その場合，備考欄に「HLA-DRB1*11 以外にアリルの存在が疑われますので，精査中です」などと説明を付記することが望ましい。

2. 4 桁レベル（細分別，high resolution）でタイピングで実施した検査の場合

a. 細分別度（high resolution）タイピングで実施した検査の結果報告書には，4 桁以上のアリルを記載する(例 1)。または，アリル名の後ろに括弧書きでそのアリルから推定される HLA 型のタイプを記載する(例 2)。この場合，備考欄に「(　) 内は，アリルに対応する HLA 型を記載してあります」などと説明を付記してもよい。

例 1　HLA-DRB1*1302

例 2　HLA-DRB1*1302 (HLA-DR13)

別　表

アリル名	対応する HLA 型
HLA-B*1529	HLA-B70
HLA-A*2420	HLA-A24
HLA-B*5603	HLA-B56 (22)

HLA アリルの命名規則の改正に関するお知らせ

日本組織適合性学会 HLA 標準化委員会

はじめに

1987 年に HLA 分子をコードする HLA アリルを識別するために 4 桁の数字を使用する命名の規則が施行され，その後 1990 年に，1 桁増やし 5 桁目を利用してエクソン内の同義置換を区別できるようにした。また，2000 年の改正で 6 桁目と 7 桁目の 2 桁の数字で非コード領域の塩基置換を表すようになった。2002 年に WHO HLA 命名委員会は，今までのルールでは新たに見いだされてくるアリルを収容できないなど不具合が生じてくると予測されることから HLA アリルの命名規則を改正した。この改正点のあらましについて解説する。

HLA アリルの命名に関する基本ルールは，(1)「そのアリルがどの HLA 分子をコードしているのか」である。それ以外に，(2)「同じアミノ酸配列をもった HLA 分子であっても塩基配列が違っている(同義置換)」，(3)「HLA 分子の発現がみられない」，(4)「HLA 分子をコードする領域以外の配列に差異がみられる」，(5)「発現量が低い」などということも命名のルールに加味されている。2002 年の WHO HLA 命名委員会では，基本ルールのうち，(2) と (4) について改正がなされた。また，HLA アリルの命名で 3 桁目と 4 桁目の 2 桁の数字が 99 を超えてしまった場合の対応が定められた。

HLA アリルの命名に関する基本ルール

各 HLA 遺伝子が HLA 座の遺伝子であることを明確にするために，先頭にシンボルである "*HLA*" を冠し，その後ろのハイフン "-" に続けて，HLA クラス I 遺伝子の HLA-A 分子を規定する遺伝子であれば，*HLA-A*，HLA-B 分子であれば *HLA-B* というように表わす。一方，HLA クラス II 遺伝子の場合，α 鎖分子をコードする遺伝子を "*A*" で，β 鎖分子を "*B*" で，それぞれ表す。また，それぞれの遺伝子座に構造が類似した複数の遺伝子が存在するような場合は，*A* または *B* の後に 1 桁のアラビア数字を付けて区別する。例えば，*HLA-DQ* 遺伝子座には，DQβ 鎖分子をコードする *HLA-DQB1* 遺伝子以外にも，タンパクをコードしない遺伝子(偽遺伝子)が 2 種存在し，それぞれ *HLA-DQB2* と *HLA-DQB3* と表記される。

HLA 抗原型と混同しないように，遺伝子シンボルの後にアスタリスク "*" を付けて，ここで示されているのがアリル名であることを明らかにしている。その後に，2 桁の数字を用いて HLA 抗原型との対応を表す。例えば，HLA-DR13 抗原をコードするアリルであれば，*HLA-DRB1*13* となる。ただし，例えば *HLA-DQA1* 遺伝子や *HLA-DPA1* 遺伝子ではアリル名と抗原型は対応していない。また，*HLA-DPB1* 遺伝子についても，*HLA-DPB1*01* から *HLA-DPB1*06* までは HLA-DP 抗原との対応がついていたが，*HLA-DPB1*07* 以降は対応していないなど，一部のアリルは HLA 抗原型に対応しない。次に，最初の 2 桁の数字の後に，さらに 2 桁の数字を付してアリル名を特定する。すなわち，合計 4 桁の数字でもって HLA アリルを特定することになるが，この 4 桁の数字で示されるアリル名は原則として(例外は null アリル)互いにアミノ酸配列が異なることを意味している。

塩基配列から推定されるアミノ酸配列がまったく同じであっても，塩基配列上にちがいがみられる同義置換がある場合は，アリル名を特定する 4 桁の数字のすぐ後の 5 桁目で識別していた。しかしながら，5 桁目の 1 桁の数字では 9 種類のアリルしか識別できず，*HLA-A*0201* (*HLA-A*02011* から *HLA-A*02016* と 6 種類のアリルが命名されている) や *HLA-G*0101* (*HLA-G*01011* から *HLA-G*01018* の 8 種類のアリルが命名されている) のように，今後 9 種類を超えてしまう可能性が想定されるアリル群も存在する。そこで今回の改正では，5 桁目と 6 桁目の 2 桁の数字を用いて 99 種類まで識別可能とした。実際の表記は，*HLA-DRB1*1301* を例にすると，*HLA-DRB1*1301* にはコドン 73 番目が "GCC" と "GCT" の 2 種類の塩基配列が存在するが，いずれもアラ

ニンを意味している。そのため，アリル名を前者は *HLA-DRB1*130101*，後者は *HLA-DRB1*130102* と区別する。この同義置換による違いは，アミノ酸配列には違いがないため，移植医療における HLA 型検査などの日常の検査業務においては，あまり大きな意義をもたない。一方，このような 5 桁と 6 桁目が表す塩基配列の違いを識別できる検査を行わなかった場合には，単に *HLA-DRB1*1301* と記載することになる。

HLA 分子をコードしている領域(コード領域)以外に塩基置換がみられるような場合については，7 桁目と 8 桁目の 2 桁を利用して区別する。例えば，*HLA-DRB3*010102* にはイントロン 1 の終わりから 13 番目の塩基がシトシン（C）であるアリル以外にグアニン（G）に置換しているアリルの存在が明らかとなったので，前者を *HLA-DRB3*01010201*，後者を *HLA-DRB3*01010202* と 7 桁と 8 桁目に 2 桁の数字を付記して区別している。これについても前述したように日常の検査業務においてあまり大きな意義はない。ただし，これと似たような命名で *HLA-B*15010101* と *HLA-B*15010102N* とがあるが，この場合の後者はイントロン 1 に 10 塩基対の欠失があり，その結果スプライスング異常をひき起こして HLA 分子を発現できなくなっているので，両者の区別は検査上重要な意義がある。このように，何らかの異常により HLA 分子が発現できない塩基配列をもつアリルは，末尾に “null” の頭文字である “*N*” を付記して発現していないアリルであることを表す。HLA アリルに関する基本ルールをまとめて表したのが**表 1** と**図 1** である。

これ以外にも *HLA-A*24020102L* と末尾に “*L*” が付記されたアリルが存在する。HLA 分子の発現量に影響を及ぼすような塩基置換をもつ場合に，末尾に “low” の頭文字である“L”を付記する。2002 年の命名法の改正

表 1　HLA アリル命名に関する基本ルール

命　名	概　略
HLA-DRB1	HLA遺伝子をシンボルで表す。
*HLA-DRB1*13*	アスタリスク"*"の後の2桁の数字は、HLA抗原型との対応を表す。また、"*"はアリル名であることを表している。
*HLA-DRB1*1301*	3桁と4桁目の2桁の数字は、アリル名を特定するのに使用される。一般的には命名された順番を表す。また、数字が違うことはアミノ酸が違うことを意
*HLA-DRB1*130101* *HLA-DRB1*130102*	5桁と6桁目の2桁の数字は、アミノ酸置換をともなわない塩基置換（同義置換）を表す。
*HLA-DRB1*13010101* *HLA-DRB1*13010102*	コード領域以外で塩基配列に差異が認められるアリルを、7桁と8桁目の2桁の数字で表す。
*HLA-DRB1*13010102N*	コード領域外の変異によって生じたヌル・アリルを表す。
*HLA-A*0215N*	コード領域内の変異によって生じたヌル・アリルを表す。
*HLA-A*24020102L*	コード領域外で塩基配列に異常をきたし、HLA分子の発現量が少なくなってしまった場合に、"low"の頭文字をとって"L"を末尾に付記する。

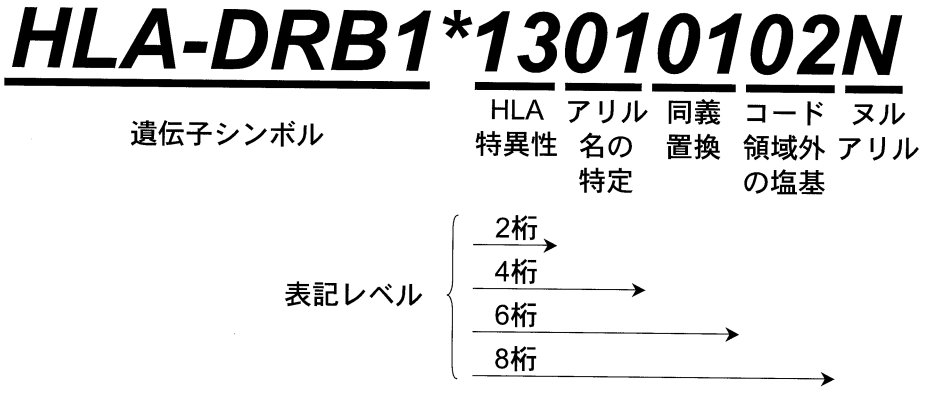


図 1

において，新たにS (secreted)，C (cytoplasm)，A (aberrant) がアリル名の末尾に付記する文字として提唱された。“*S*” はアレル特異性を示す発現分子が可溶性の分泌分子として存在していることを表し，“*C*” はアレル産物が細胞質内に存在し，細胞表面にないことを表す。また，“*A*” はHLA分子の発現が不明であることを表す。

3桁目と4桁目の2桁の数字が99を超えた場合の対応

HLAアリル名では1桁目と2桁目によって定義されるHLA抗原への対応特異性を細分化するために，3桁目と4桁目を使用して区別しており，最高で99種類のHLA抗原サブタイプの遺伝子を識別できるようになっている。しかし，*HLA-B*15*，*HLA-A*02* や *HLA-DRB1*13* などではすでに50種類以上のアリルが命名されており，また *HLA-B*15* についてはすでに70種類を超えていることから，3桁目と4桁目の2桁の数字では収容できなくなる可能性が出てきた。この問題を解決するために，WHO HLA命名委員会では，これらのアリルについて90番台を割り振ることとした。例えば，*HLA-A*02* は *HLA-A*0299* の次に命名するアリルを *HLA-A*9201* とすることになっている。一方，*HLA-DPB1* 遺伝子については1桁目と2桁目によって定義されるアリルがすでに90種類を超えていることから，*HLA-DPB1*9901* が割り当てられた後は，*HLA-DPB1*0102*，*HLA-DPB1*0203* そして *HLA-DPB1*0302* などとアリル名が割り振られることになった。つまり，最初の2桁がHLA-A抗原型と全く対応しないこととなる。上述したHLAアリルの命名規則の改正点を**表2**にまとめて示した。

表2 HLAアリルの命名に関する基本ルール改正のまとめ

旧		新
5桁目の1桁の数値で非同義置換を表していた 例：*HLA-DRB1*13011*	→	5桁目と6桁目の2桁の数字で同義置換を表すようになった *HLA-DRB1*130101*
6桁目と7桁目の2桁で非コード領域の塩基置換を表していた 例：*HLA-DRB3*0101201*	→	7桁目と8桁目の2桁で非コード領域の塩基置換を表すこととなった *HLA-DRB3*01010201*
3桁目と4桁目の2桁の数字は同義置換を表し、発見順に01から順番に割り振られていた 例：*HLA-A*02*	→	3桁目と4桁目の2桁の数字が99を超えた場合は、それ以降のアリルを1桁目と2桁目の2桁の数字を90番台の数字で表すこ *HLA-A*92*
HLA-DPB1 アリルは基本的にHLA-DP特異性が調べられていないので、新しく見つけられたアリルについては1桁目と2桁目の2桁の数字で割り振られていた		*HLA-DPB1* アリルについて、*HLA-DPB1*9901* が割り当てられた後は、*HLA-DPB1*0102* 、*HLA-DPB1*0203* そして*HLA-DPB1*0302* などとアリル名が割り振られることになった。

連絡先
防衛医科大学校検査部
小林 賢
〒359–8513 埼玉県所沢市並木3–2
電話 042–995–1511 内線3721
ファックス 042–996–5217
電子メール kobayasi@me.ndmc.ac.jp

● 原著論文 ●

PCR-MPH2 法を用いた日本人集団における HLA-A, -B, -C, -DRB1 および -DQB1 遺伝子型決定法の確立

松下 正毅[1)]、小川 貴裕[1)]，松見 達也[2)]，長門 正貴[1)]，岡 孝紀[1)]，川井 信太郎[1)]

1）湧永製薬株式会社，創薬研究所
2）湧永製薬株式会社，診断薬営業部

（平成 15 年 9 月 12 日受付）

要約： 我々は，マイクロタイタープレートを用いた新しい HLA タイピング法である PCR-MPH2 法を確立した。この方法では PCR から発色操作までの条件をすべて統一することにより HLA-A，-B，-C，-DRB1 および-DQB1 遺伝子のタイピングを同時に行うことが可能となった。各遺伝子座に対して，日本人に報告されている 2 桁のタイピングを行うために HLA-A 遺伝子用に 24 種類，HLA-B 遺伝子用に 24 種類，HLA-C 遺伝子用に 23 種類，HLA-DRB1 遺伝子用に 24 種類，および HLA-DQB1 遺伝子用に 17 種類の SSO プローブを用いた。各プローブの陽性および陰性シグナルの区別が明確となるようにプローブ配列の最適化を行った。従来のマイクロタイタープレートを用いた方法と比べ，ハイブリダイゼーション温度を 37°C にしたこと，TMAC での洗浄操作が不要となったことで，操作性が大きく向上した。本法は PCR 反応から判定の出力まで約 5 時間半で終了し，一人の検査者が一度の操作で 32 項目のタイピングが可能である。また，少数検体の多遺伝子座を同時にタイピングする必要がある場合にも有用な方法である。

キーワード： HLA 遺伝子タイピング，PCR-MPH

はじめに

PCR を利用した HLA の DNA タイピング法には PCR-sequence specific primers (SSP) 法 (1)，PCR-sequence-specific oligonucleotide probe (SSOP) 法 (2, 3)，PCR-RLFP 法 (4, 5)，PCR-single strand conformation polymorphism (SSCP) 法 (6, 7)，および sequence-based typing (SBT) 法 (8, 9) などがある。これらの方法は古典的な血清学的手法で使用する生きたリンパ球や抗血清を必要とせず，物質的に安定な染色体 DNA を試料として使用するため，タイピングの正確性，再現性の点で有利である。一方，DNA タイピング法は操作が煩雑であり，手技的な熟練を必要とする場合が多かった。また，陽性・陰性の判断が目視で行われることもあり，客観的な判定ができないためのミスタイピングを起こす危険性を秘めていた。これらを解決するために，以前，我々は HLA タイピングのルーチン検査に適した方法として PCR-MPH 法を開発した (10)。この方法は reverse-SSOP をマイクロタイタープレート上で行う方法である。操作は ELISA で用いる汎用機器を利用

代表者連絡先 〒739–1195 広島県高田郡甲田町下甲立 1624
湧永製薬株式会社創薬研究所
松下 正毅
電 話 0826–45–2331
F A X 0826–45–4351
E-mail matsushita_m@wakunaga.co.jp

することができ，熟練を必要とせず，また，陽性・陰性の判断は発色強度を吸光度により測定した値に基づくため，客観的に判定をすることができる。しかしながら，ハイブリダイゼーション時やTMAC洗浄時の温度が発色結果に大きく影響することがあり，アッセイ間差の原因のひとつとなっている。そこで，今回，我々は PCR-MPH 法の操作性を向上させた PCR-MPH-2 法を開発し，HLA-A，HLA-B，HLA-C，HLA-DRB1 および HLA-DQB1 遺伝子のタイピングへの応用を検討した。

材料と方法

1. ゲノム DNA の調製

材料はインフォームドコンセントを得た社内ボランティアより採血した血液より分離した末梢血単核球を使用した。DNA の抽出は塩析法（11）により行った。HLA-A，HLA-B，HLA-C，HLA-DRB1 および HLA-DQB1 遺伝子のタイピングは PCR-MPH 法（10）または血清学的方法で行った。

2. PCR プライマーとモチーフ配列

各遺伝子座を特異的に増幅するための PCR プライマーを設計した(表 1)。アニーリング効率を標準化し，すべての遺伝子座を同一条件で均等に増幅するために各プライマーの 5'側に 15 塩基の共通配列を追加した。HLA-A，HLA-B および HLA-C 遺伝子はエクソン 2 とエクソン 3 をそれぞれ増幅させ，HLA-DRB1 および HLA-DQB1 遺伝子はエクソン 2 を増幅させるように各々のプライマーを設定した。また，HLA-DR2 グループについて DRB1*15 と DRB1*1602 とを区別するために，イントロン 1 の一部を増幅するプライマーも加えた。すべてのプライマーは 5'末端にビオチン標識を導入したものを使用した。タイピングのために検出するモチーフ配列は HLA-A 遺伝子用に 24 種類，HLA-B 遺伝子用に 24 種類，HLA-C 遺伝子用に 23 種類，HLA-DRB1 遺伝子用に 24 種類，および HLA-DQB1 遺伝子用に 17 種類の配列をそれぞれ選択した。モチーフ配列とその位置を表 2 に示す。また，各遺伝子座において日本人で報告されているアリルのモチーフ配列への

表 1　プライマー配列

locus	プライマー名	配列(5'->3')	濃度(μM)	増幅物サイズ(bp)
HLA-A exon 2	U15t-5Aint1-S	CSGCCTCTGYGGGGAGAAGCAA	0.4	489
	U15t-3Aint2-72	TCGGACCCGGAGACTGTGG	0.8	
HLA-A exon 3	U15t-5Aint2-178T	CAGTTTAGGCCAAAAATTCCCC	0.8	407
	U15t-3Aint3-1	GCCCCGTGGCCCCTGGTAC	0.4	
HLA-B exon 2	U15t-5Bint1-46	AGGGGACCGCAGGCGGG	0.2	436
	U15t-3Bint2-33	TACGTGGGGGATGGGGAGT	0.4	
	U15t-3Bint2-46B73	GGAGACCCGGGCCGTACGTC	0.4	483
HLA-B exon 3	U15t-5Bint2-142	GGCGAGAGCCCCAGGCGCG	0.4	
	U15t-3Bint3(+1)	AGGCCATCCCCGGCGACCTAT	0.2	
HLA-C exon 2	U15t-5Cint1-4	GGGCCCGCCCGGCGA	0.2	438
	U15t-5Cint1-4T	GGGCCCTCCCGGCGA	0.2	
	U15t-3Cint2-36	GTCCGTGGGGGATGGGGAGG	0.4	
HLA-C exon 3	U15t-5Cint2-100C1	GAGTCTCCCCGTCTGAGATCC	0.2	518
	U15t-5Cint2-100G1	GAGTCTCCCGGTCTGAGATCC	0.2	
	U15t-3Cint3-3	GAGATGGGGAAGGCTCCCCACT	0.4	
HLA-DRB exon 2	tagDRBAMP-C	TCGTGTCCCCACAGCACGT	0.4	306
	tagDRBAMP-B	CCGCTGCACTGTGAAGCTCT	0.4	
HLA-DR2 intron 1	tag5DR2int1-90	GTGGGTGCTGTTGAAGGT	0.4	227/230
	tag3DR2int1-270	GCGGGAAAACCCCTTCTC	0.4	
HLA-DQB1 exon 2	tagDQB-A1	TGCTACTTCACCAACGGGAC	0.8	260
	tagDQB-B12	AGGATCCCGCGGTACGCCAC	0.8	
	tagDQB-B24	AAGGTCGTGCGGAGCTCCAAC	0.8	

反応パターンを表3から表7に示す。増幅産物内のモチーフ配列と相補的な配列をもつオリゴヌクレオチドをSSOプローブとして使用した。

3. PCRによるHLA遺伝子の増幅

HLA-A，HLA-BおよびHLA-C遺伝子の反応液は，クラスI用増幅試薬［80 mM Tris-HCl (pH9.0)，2 mM $MgCl_2$，20 mM $(NH_4)_2SO_4$，200 μM dNTP，5% DMSO，2.5U Taq DNA polymerase (TaKaRa)，各遺伝子座特異的プライマーセット］に200 ngのゲノムDNAを加えて全量100 μlとした。HLA-DRB1およびHAL-DQB1遺伝子の反応液は，クラスII用増幅試薬［10 mM Tris-HCl (pH8.3)，50 mM KCl，1.5 mM $MgCl_2$，200 μM dNTP，2.5U Taq DNA polymerase (TaKaRa)，遺伝子座特異的プライマーセット］に200 ngのゲノムDNAを加えて全量100 μlとした。各遺伝子座の使用プライマー濃度を表2に示した。PCR反応はGeneAmp PCR System 9600-R (Applied Biosystems) を用いて96°Cで3分間熱変性させた後，熱変性：96°C，30秒，アニーリング：62°C，1分，相補鎖合成：72°C，1分で40サイクル行った。

4. SSOプローブのマイクロタイターウエルへの固相化

SSOプローブのマイクロタイターウエルへの固相化はUVクロスリンク法 (13) により行った。SSOプローブを25 μlのTE溶液［10 mM Tris-HCl (pH7.5)，1 mM EDTA］に溶解し，25 μlの固定用緩衝液［1.5 M NaCl，300 mM Tris-HCl (pH7.5)］，300 mM $MgCl_2$］を混和し，マクロタイターウエルImmuno Module MaxSorp (Nunc) に分注し，37°Cで一晩保温した。溶液をアスピレーターで除去後，37°Cで30分間風乾した。紫外線を5×10^5 μ joules照射後，300 μlのプレート洗浄液［1 M NaCl，100 mM Tris-HCl (pH9.3)，2 mM $MgCl_2$，0.1% Tween 20］で3回洗浄し，再度37°Cで30分間風乾した。プローブが固相されたプレートは，密封したアルミ袋に乾燥剤とともにいれて4°Cで保存した。

5. ハイブリダイゼーションと発色

100 μlのPCR増幅物に325 μlの50 mM水酸化ナトリウム溶液を加え室温で5分間放置した後，825 μlのハイブリダイゼーション溶液［72.3 mM Tris-HCl (pH7.5)，18.7 mM HCl，14.9 mM EDTA，26.1 mM NaCl］を加えた。この溶液を50 μlずつ各マイクロタイターウエルに添加し，プレートシールで密封した後，37°Cで1時間ハイブリダイゼーションを行った。

次に，プレートウォッシャーを用いてハイブリダイゼーション溶液を除去後，300 μlの洗浄液（1 M NaCl，100 mM Tris-HCl (pH7.5)，2 mM $MgCl_2$，0.05% Triton X-100）で3回の洗浄を行った。50 μlのアビジン標識ペルオキシダーゼ (Vector) を含む酵素溶液を添加し，37°Cで15分間反応させた。酵素溶液を除去後，300 μlの洗浄液で3回の洗浄を行った。50 μlの発色液（1.5 mM 2,2'-azino-di (3-ethylbenzthiazoline-6-sulfanic acid，200 mM酒石酸 (pH4.4)，0.015% H_2O_2）を添加し，37°Cで15分間反応させた。50 μlの停止液（2% oxalic acid）で反応を停止させ，プレートリーダーで各ウエルの415 nmにおける吸光度を測定した。

結　果

PCR反応

PCR反応はクラスIとクラスIIとで増幅試薬組成が異なるが，温度サイクルの条件を共通とすることで一度のPCR操作ですべての遺伝子座を増幅し，目的とするサイズのバンドを確認した(図1)。

SSOプローブ配列の最適化

モチーフ配列を検出するためのSSOプローブは陽性シグナルと陰性シグナルの区別が明確にできるような配列を選択する必要があった。そこでプローブごとにモチーフ配列と相補的である部分の長さの最適化を行った。また，プローブの長さだけでは識別能が不十分であったものについてはプローブ配列内に人為的なミスマッチを導入することで，陰性シグナルの低下を試みた。プローブ最適化の一例を表8に示す。モチーフ配列 B#12を検出するためのプローブB#12–1では陽性となるアリルB*1501の発

表2 選択したモチーフ配列

HLA-A

ID	motif sequence (5'->3')	nucleotide position	location
A#1	aggtatttcttcacatccgtg	88-108	exon 2
A#2	aggtatttctacacctccgtg	88-108	exon 2
A#3	gagcaggagaggcctgagtat	229-249	exon 2
A#4	ggacggggagacacggaaagt	252-272	exon 2
A#5	ttgggaccggaacacacggaa	249-269	exon 2
A#6	tgggacgaggagacagggaaa	250-270	exon 2
A#7	tcacagattgaccgagtggac	283-303	exon 2
A#8	tcacagactcaccgagtggac	283-303	exon 2
A#9	actgaccgagcgaacctgggg	289-309	exon 2
A#10	actgaccgagagaacctgggg	289-309	exon 2
A#11	cacaccgtccagaggatgtat	349-369	exon 3
A#12	atccagatgatgtatggctgc	355-375	exon 3
A#13	cgcgggtatgaacagcacgcc	400-420	exon 3
A#14	taccaccagtacgcctacgac	403-423	exon 3
A#15	taccagcaggacgcctacgac	403-423	exon 3
A#16	gctcagatcaccaagcgcaag	490-510	exon 3
A#17	gagacggcccatgaggcggag	514-534	exon 3
A#18	gagcagtggagagcctacctg	532-552	exon 3
A#19	gagcagcagagagcctacctg	532-552	exon 3
A#20	gagcagttgagagcctacctg	532-552	exon 3
A#21	ctggagggccggtgcgtggac	550-570	exon 3
A#22	ctggatggcacgtgcgtggac	550-570	exon 3
A#23	tgcgtggacgggctccgcaga	562-582	exon 3
A#24	tgcgtggagtggctccgcaga	562-582	exon 3

HLA-B

ID	motif sequence (5'->3')	nucleotide position	location
B#1	tatttctacaccgccatgtcc	91-111	exon 2
B#2	agtccgaggaaggagccgcgg	196-216	exon 2
B#3	agtccgaggacggagccccgg	196-216	exon 2
B#4	agtccgagagaggagccgcgg	196-216	exon 2
B#5	gcgccgtgggtggagcaggag	217-237	exon 2
B#6	acacagatctccaagaccaac	262-282	exon 2
B#7	gaccggaacacacagatctac	253-273	exon 2
B#8	cagaagtacaagcgccaggca	265-285	exon 2
B#9	cagatctacaaggcccaggca	265-285	exon 2
B#10	acacagatctgcaagacccag	262-282	exon 2
B#11	acacagatcttcaagacccag	262-282	exon 2
B#12	gcacagacttaccgagagagc	283-303	exon 2
B#13	cggaacctgcgcggctactac	307-327	exon 2
B#14	ctgctccgctactacaaccag	313-333	exon 2
B#15	cacacttggcagacgatgtat	349-369	exon 3
B#16	ctccagaggatgtacggctgc	355-375	exon 3
B#17	cataaccagtacgcctacgac	409-429	exon 3
B#18	tataaccagttcgcctacgac	409-429	exon 3
B#19	gcggcccgtgtggcggagcag	517-537	exon 3
B#20	tacctggagggcacgtgcgtg	547-567	exon 3
B#21	ctggagggcctgtgcgtggag	550-570	exon 3
B#22	ctggagggcgagtgcgtggag	550-570	exon 3
B#23	tggctccgcagacacctggag	571-591	exon 3
B#24	ctccaggtgatgtatggctgc	355-375	exon 3

HLA-C

ID	motif sequence (5'->3')	nucleotide position	location
C#1	aagtatttcttcacatccgtg	88-108	exon 2
C#2	tacaaccagagcgaggcca	325-343	exon 2
C#3	tccacatccgtgtcctggccc	97-117	exon 2
C#4	gtgaacctgcggaaactgcgc	298-318	exon 2
C#5	agtccgagaggggagccccgg	196-216	exon 2
C#6	gagacgctgcagcgcgcag	601-619	exon 3
C#7	gcggagcaggacagagcctac	529-549	exon 3
C#8	gcggagcagctgagagcctac	529-549	exon 3
C#9	accgctgcggacacggcggct	472-492	exon 3
C#10	ctccagtggatgtttggctgc	355-375	exon 3
C#11	catgaccagttagcctacgac	409-429	exon 3
C#12	gggtatgaccagtacgcctac	406-426	exon 3
C#13	gggtataaccagttcgcctac	406-426	exon 3
C#14	tacaaccagagcgaggacg	325-343	exon 2
C#15	ggtctcacatcctccagagg	344-363	exon 3
C#16	aacgggaagaagacgctgcag	592-612	exon 3
C#17	ctggagaacaggaagaagacg	586-606	exon 3
C#18	gcggagcagtggagagcctac	529-549	exon 3
C#19	cgcttcatctcagtgggctac	133-153	exon 2
C#20	gccgcgagtccgagaggggag	193-213	exon 2
C#21	gccgcgagtccaagaggggag	193-213	exon 2
C#22	ctggagggcgagtgcgtggag	550-570	exon 3
C#23	ttctacaccgctgtgtcccgg	94-114	exon 2

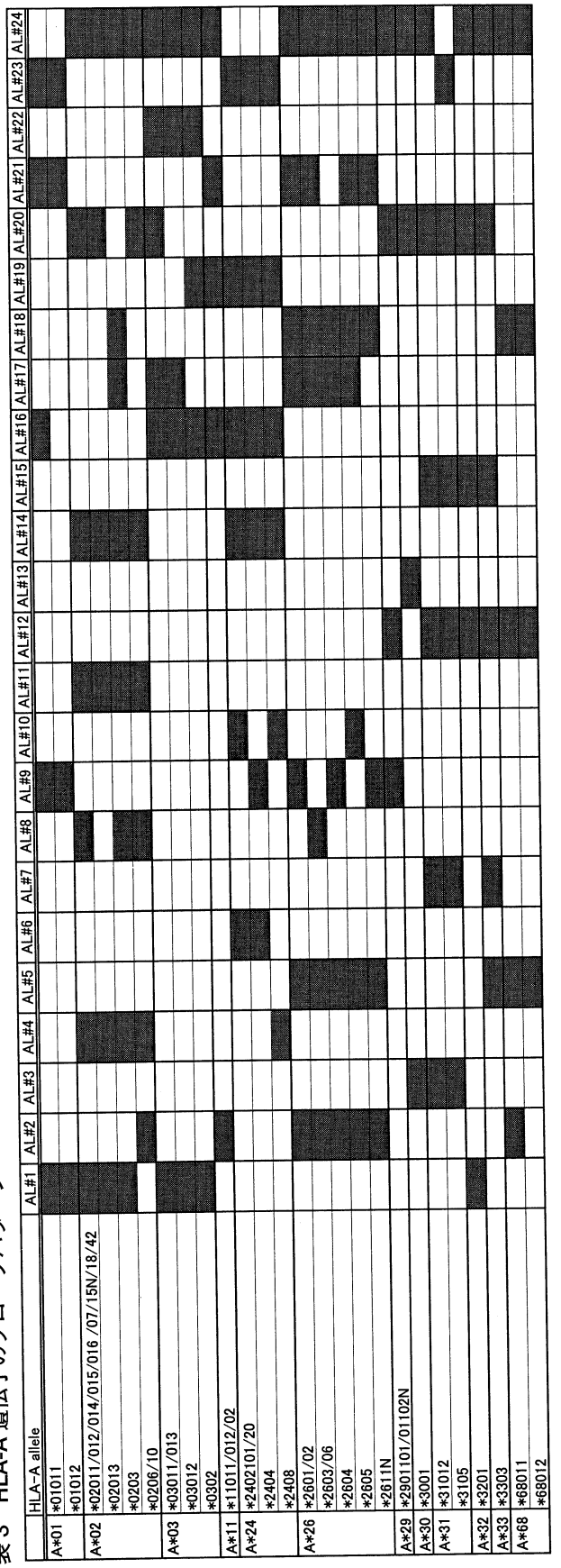
HLA-DRB1

ID	motif sequence (5'->3')	nucleotide position	location
DR#1	ttgctggaaagatgcatctat	163-183	exon 2
DR#2	tggcagcctaagagggagtgt	112-132	exon 2
DR#3	gagtactctacgtctgagtgt	112-132	exon 2
DR#4	ttggagcaggttaaacatgag	109-129	exon 2
DR#5	tctacgggtgagtgttatttc	118-138	exon 2
DR#6	tggcagggtaagtataagtgt	112-132	exon 2
DR#7	ttgaagcaggataagtttgaa	109-129	exon 2
DR#8	ttggaggaggttaagtttgag	109-129	exon 2
DR#9	cggttactggagagacacatc	160-180	exon 2
DR#10	cagagagtgtctttggggctc	130-150	intron 1
DR#11	cggcctgatgaggagtactgg	250-270	exon 2
DR#12	cggcctgctgcggagcactgg	250-270	exon 2
DR#13	cggggccgggtggacaactac	301-321	exon 2
DR#14	gacatcctggaagacgagcgg	283-303	exon 2
DR#15	aggcgggccctggtggacacc	298-318	exon 2
DR#16	acgtctgagtgtcaattcttc	121-141	exon 2
DR#17	gagcagaggcgggccgccggt	292-312	exon 2
DR#18	cggttgctggaaagatgcatc	160-180	exon 2
DR#19	tatcaccaagaggagtacgtg	181-201	exon 2
DR#20	accaagaggagtccgtgcgct	184-204	exon 2
DR#21	cgtttcttggagtactctacg	103-123	exon 2
DR#22	ggacctcctggaagacaggcg	282-302	exon 2
DR#23	gtgcggtatctgcacagaggc	157-177	exon 2
DR#24	caagaggagtacgtgcgcttc	187-207	exon 2

HLA-DQB1

ID	motif sequence (5'->3')	nucleotide position	location
DQ#1	gaggggcccgggcgtcggtg	301-321	exon 2
DQ#2	cgttatgtgaccagatacatc	169-189	exon 2
DQ#3	cgtcttgtaaccagacacatc	169-189	exon 2
DQ#4	cgtcttgtgaccagatacatc	169-189	exon 2
DQ#5	gggcggcctgttgccgagtac	256-276	exon 2
DQ#6	ccgctggggcggcttgacgcc	250-270	exon 2
DQ#7	agccagaaggacatcctggag	283-303	exon 2
DQ#8	ctggggccgcctgccgccgag	253-273	exon 2
DQ#9	cttgtgagcagaagcatctat	172-192	exon 2
DQ#10	gggcggcctgatgccgagtac	256-276	exon 2
DQ#11	gggaccgagctcgtgcggggt	154-174	exon 2
DQ#12	cttgtaaccagatacatctat	172-192	exon 2
DQ#13	ggggtgtatcgggcggtgacg	229-249	exon 2
DQ#14	gggaccgagcgcgtgcggggt	154-174	exon 2
DQ#15	ggggtgtaccgggcggtgacg	229-249	exon 2
DQ#16	gggcggcctagcgccgagtac	256-276	exon 2
DQ#17	ccgctggggccgcctgacgcc	250-270	exon 2

表3 HLA-A遺伝子のプローブパターン



	HLA-A allele	AL#1	AL#2	AL#3	AL#4	AL#5	AL#6	AL#7	AL#8	AL#9	AL#10	AL#11	AL#12	AL#13	AL#14	AL#15	AL#16	AL#17	AL#18	AL#19	AL#20	AL#21	AL#22	AL#23	AL#24
A*01	*01011	■	■																						
	*01012	■	■		■							■	■		■						■			■	
A*02	*02011/012/014/015/016 /07/15N/18/42	■	■		■				■			■	■		■						■			■	
	*02013	■	■		■								■					■	■		■			■	
	*0203	■	■		■				■			■	■		■			■			■			■	
	*0206/10		■														■	■			■	■	■		
A*03	*03011/013	■	■														■	■		■	■				
	*03012	■	■														■			■	■				
	*0302	■	■														■				■				
A*11	*11011/012/02		■								■														
A*24	*2402101/20				■		■	■		■	■				■										
	*2404				■		■	■		■					■										
	*2408																								
A*26	*2601/02		■			■				■									■						
	*2603/06		■			■			■	■									■						
	*2604		■			■				■	■								■						
	*2605		■			■				■									■						
	*2611N					■				■			■	■											
A*29	*2901101/01102N			■												■									
A*30	*3001			■				■					■			■									
A*31	*31012			■				■					■			■									
	*3105	■																							
A*32	*3201					■		■								■									
A*33	*3303					■																			
A*68	*68011		■			■																			
	*68012					■																			

色値3.66に対して，一塩基のミスマッチをもつ陰性アリルB*5201とB*5502の発色値がそれぞれ2.91と0.96であり，陽性と陰性の区別ができないプローブであった。そこで，プローブ配列内の5'末端から7塩基目のTをAに置換したプローブB#12–2を作製した。このプローブでは陽性となるアリルも一塩基のミスマッチとなるが，B#12–1で区別ができなかった陰性のアリルは二塩基のミスマッチとなる。このプローブを用いてハイブリダイゼーションおよび発色を行ったところ，陽性アリルB*1501の発色値が2.35とやや低下したものの，陰性アリルB*5201とB*5502の発色値がともに0.50と大幅に低下したことで陽性と陰性の区別が明確になった(表8)。このようにしてすべてのモチーフ配列に対するSSOプローブの最適化を行い，HLA-A遺伝子用に24種類，HLA-B遺伝子用に24種類，HLA-C遺伝子用に23種類，HLA-DRB1遺伝子用に24種類，およびHLA-DQB1遺伝子用に17種類のSSOプローブの配列を決定した。これらのプローブを用いて遺伝子型が既知である24種類のゲノムDNA増幅物を用いて発色を行った。一例として，各HLA-A遺伝子用プローブの発色値分布を図2に示す。すべての陽性値は1.0から4.0の範囲，また，陰性値は0.5以下であり，陽性と陰性の区別は明確であった。HLA-B，HLA-C，HLA-DRB1およびHLA-DQB1遺伝子用プローブの発色値分布も同様であった。

HLA遺伝子のタイピング

2種類のパネルDNAを用いてHLA-A，HLA-B，HLA-C，HLA-DRB1，およびHLA-DQB1遺伝子のタイピングを行った。操作条件を共通にすることでPCRから発色まですべて同時に行うことができた。その発色値を表9にそれぞれ示す。パネル1におけるHLA-DQB1遺伝子用SSOプローブDQ1–9，DQ10N-6，DQ12N-8およびパネル2におけるHLA-C遺伝子用SSOプローブC10–38，C22–8で0.5以上の発色値を示したが，陽性・陰性の区別は明確であった。各プローブの反応性からHLA型の検索を手動で行うことは時間を浪費するだけではなく，誤ったタイピング結果をだしてしまう危険性がある。そこで，発色値から自動的にHLA型を判定する独

表 4　HLA-B 遺伝子のプローブパターン

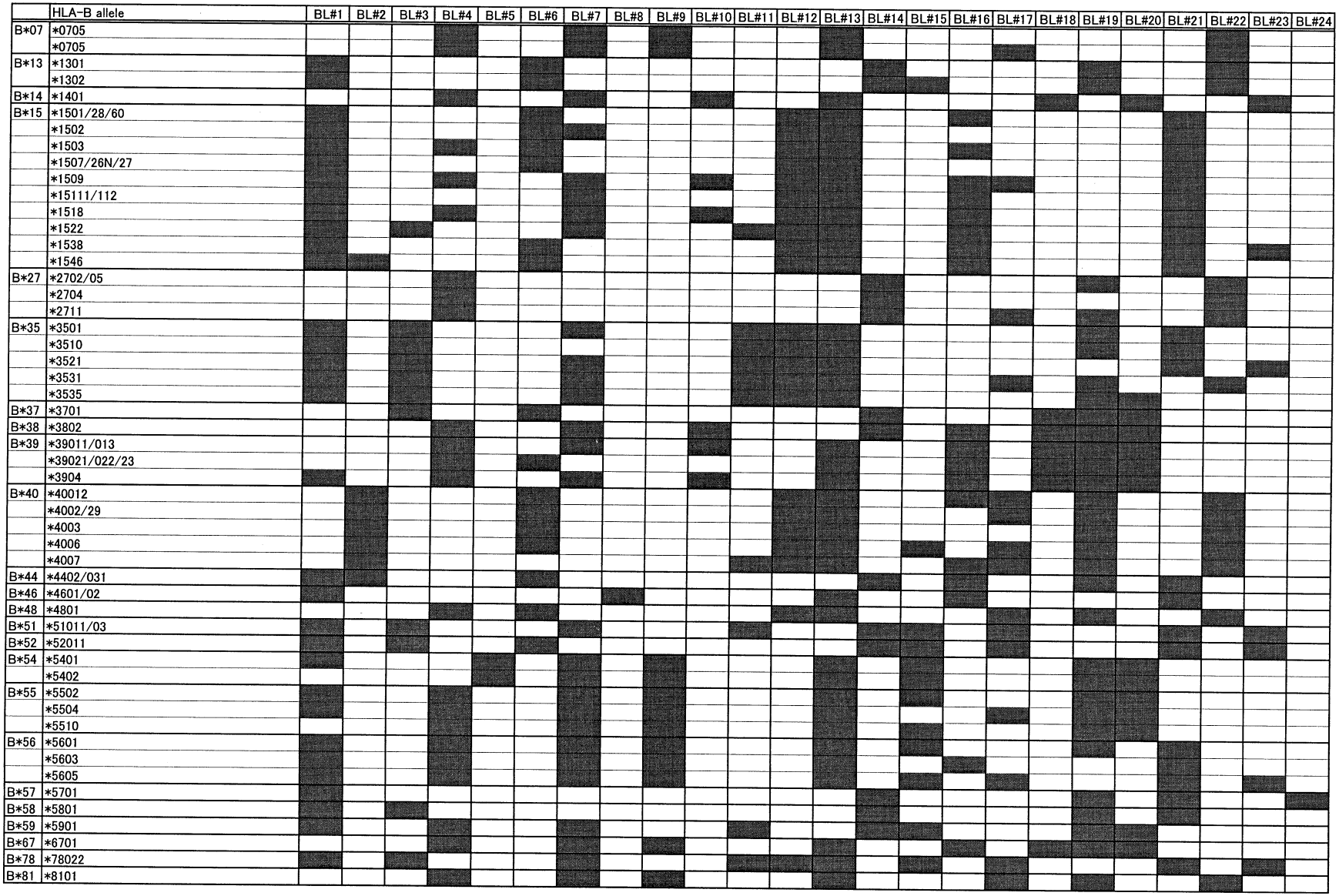


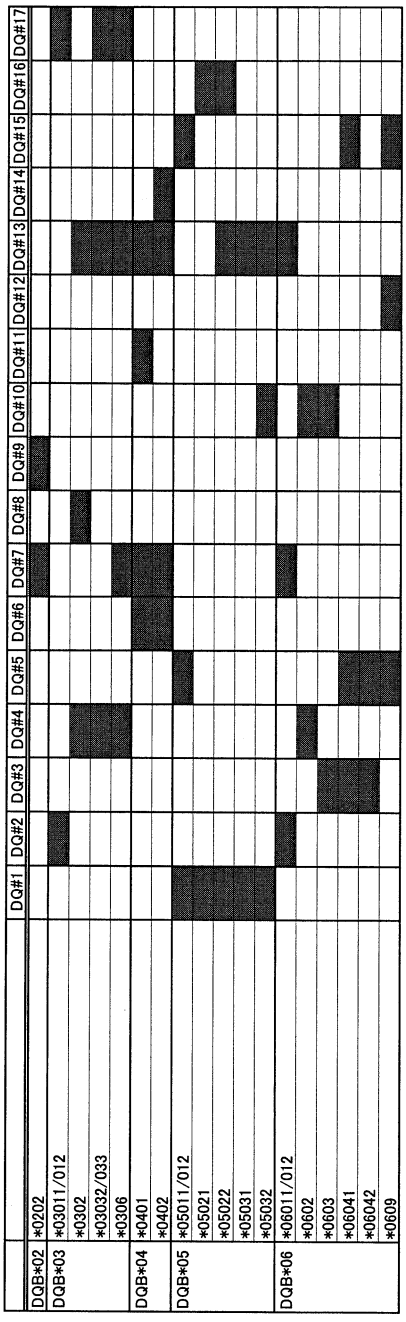
表 5　HLA-C 遺伝子のプローブパターン

		C#1	C#2	C#3	C#4	C#5	C#6	C#7	C#8	C#9	C#10	C#11	C#12	C#13	C#14	C#15	C#16	C#17	C#18	C#19	C#20	C#21	C#22	C#23
Cw*01	*0102	■											■		■					■	■			
	*0103													■	■					■	■			
Cw*03	*03021/022								■						■	■					■			■
	*03031/032/033		■						■				■								■			■
	*03041/042								■				■		■						■			
Cw*04	*0401101/01102/012			■	■									■	■							■		
Cw*05	*0501				■									■	■		■					■		
Cw*06	*0602				■	■									■				■	■	■			
Cw*07	*0702101/02102						■		■						■					■	■			
	*07041/042					■		■						■	■		■							
Cw*08	*08011/012								■					■	■		■	■				■		
	*0803									■				■	■			■	■			■		
Cw*12	*12022/021/022														■							■		
	*12031										■				■						■			
Cw*14	*14021/022/04										■				■							■		
	*1403											■			■							■		■
Cw*15	*15021/022/051/052				■				■			■			■							■		■

表 6　HLA-DRB1 遺伝子のプローブパターン

		DR#1	DR#2	DR#3	DR#4	DR#5	DR#6	DR#7	DR#8	DR#9	DR#10	DR#11	DR#12	DR#13	DR#14	DR#15	DR#16	DR#17	DR#18	DR#19	DR#20	DR#21	DR#22	DR#23	DR#24
DR1	*0101	■																■	■		■				
DR15	*15011/012/013/021/022/023		■								■												■		
DR16	*16021/022		■																			■			
DR3	*03011			■										■								■			
	*03012			■																					
DR4	*04011/031/032/071/072/09/11				■															■					■
	*04012				■													■		■					■
	*0404/051/052/10				■																■				■
	*0406																								■
DR11	*11011/012/013/014/06			■								■				■						■			■
	*1123			■								■										■			■
DR12	*12011/012/021/022/05					■				■												■			
DR13	*13011/012/021/022			■											■							■			■
	*13071/072			■																		■			
	*1329			■									■									■			
DR14	*14011/012/071/072			■														■				■			
	*1402/06/29			■												■						■			
	*1403/12			■													■					■			
	*1405			■																		■			
DR7	*07011						■																		■
	*07012																								■
DR8	*08021/022/023/032					■										■						■			
	*0809																								■
DR9	*09012							■																■	■
DR10	*10011/012								■										■						

表 7 HLA-DQB1 遺伝子のプローブパターン



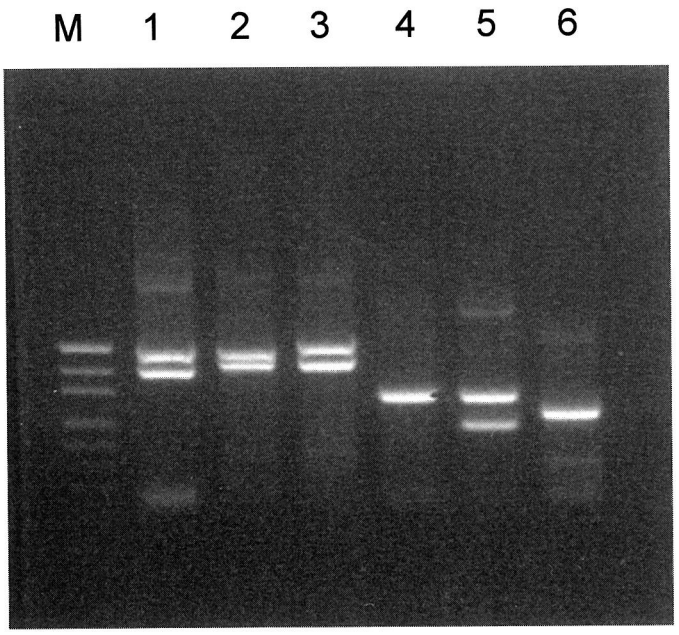
自の判定用ソフトウエアを開発した。このソフトウエアは発色値の手動による入力，あるいは CSV 形式のファイルを読み込ませ，あらかじめ設定された各プローブのカットオフ値を利用して陽性，陰性の判断を行い，HLA 型の候補を出力するものである。今回タイピングを行った 2 種類のパネルの発色値をソフトウエアを用いて判定を行ったところ，すべて自動判定可能であり，他の方法でタイピングした結果とすべて一致した。

考　察

今回，我々はマイクロタイタープレートを用いた MPH 法の改良を行い，新たな HLA タイピング法を確立した。この方法ではすべての遺伝子座のタイピングにおいて PCR から発色までの操作条件が同一であるので，同時にタイピングを行うことができた。さらに，ハイブリダイゼーション温度を 37°C とし，高温での TMAC 溶液での洗浄操作を省いたことで温度管理の緩和と操作性の大幅な向上を実現することができた。我々は今回報告した Low resolution-あるいは medium/high-resolution-タイピングができるプローブ以外にも日本人のアリルレベルタイピングが可能である HLA-A2，HLA-A26，HLA-B15，HLA-B16，HLA-B40，HLA-DR1，HLA-DR2，HLA-DR3/11/13/14，HLA-DR4，および HLA-DR12/8 High-resolution typing 用の SSO プローブセットも揃えており，いずれのタイピングも同一条件であるので，日本人に報告されているほとんどのアリルのタイピングを同時に行うことが可能となった。

参考文献

1. Bunce M, O'Nell CM, Barnardo MCNM, *et al.*: Phototyping: comprehensive DNA typing for HLA-A, B, C, DRB1, DRB3, DRB4, DRB5 & DQB1 by PCR with 144 primer mixes utilizing sequence-specific primers (PCR-SSP). *Tissue Antigens* **46**: 355–67, 1995
2. Fernandez-Vina M, Lazaro AM, Sun Y, Miller S, *et al.*: Population diversity of B-locus alleles observed by high-resolution DNA typing. *Tissue Antigens* **45**:153–68, 1995
3. Date Y, Kimura A, Kato H, *et al.*: DNA typing of the HLA-A gene: population study and identification of four new alleles in Japanese. *Tissue Antigens* **47**:93–101, 1996
4. Mitsunaga S, Tokunaga K, Kashiwase K, *et al.*: A nested PCR-RFLP method for high-resolution



M：分子量マーカー
（pUC19 HpaII 消化物）
1: HLA-A 遺伝子増幅物
2: HLA-B 遺伝子増幅物
3: HLA-C 遺伝子増幅物
4: HLA-DRB 遺伝子増幅物
5: HLA-DRB 遺伝子増幅物
（DR2 を持つ場合）
6: HLA-DQB1 遺伝子増幅物

（各増幅物 5 μL を用いた）

図 1　遺伝子座特異的プライマーによる PCR 結果

表 8　プローブ配列の最適化

A

	配列 (5'->3')
モチーフ配列B#12	GCACAGACTTACCGAGAGAGC
プローブB#12-1	GCTCTCTCGGTAAGTC
プローブB#12-2	GCTCTCACGGTAAGTC

B

		吸光度(OD_{414})	
評価に用いたアリル	配列 (5'->3')	B#12-1	B#12-2
B*1501	GCACAGACTTACCGAGAGAGC	3.66	2.35
B*5201	GCACAGACTTACCGAAAGAGC	2.91	0.50
B*5502	GCACAGACTGACCGAGAGAGC	0.96	0.50

typing of HLA-A allele. *Eur J Immunogenet* **25**:15–27, 1998

5. Mitsunaga S, Kuwata S, Tokunaga K, *et al.*: Family study on HLA-DPB1 polymorphism: Linkage analysis with HLA-DR/DQ and two 'new' alleles. *Hum Immunol* **34**:203–11, 1992
6. Bannnai M, Tokunaga K, Lin L, *et al.*: HLA-B40, B18, B27 and B37 allele discrimination using group-specific amplification and SSCP method. *Hum Immunol* **46**:107–13, 1996
7. Wang H, Tokunaga K, Akaza T, *et al.*: Identification of HLA-C alleles using PCR-single-strand

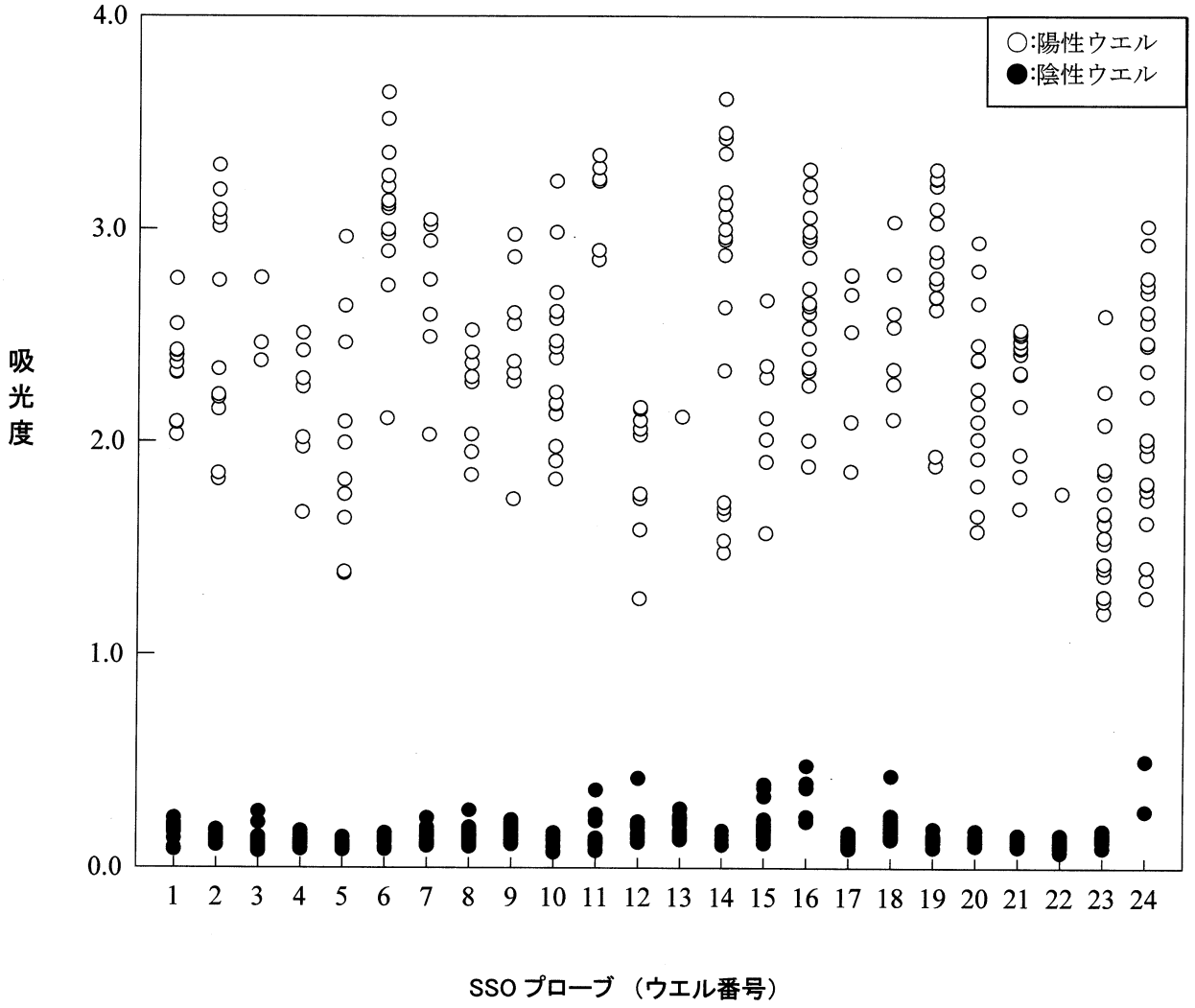


図 2　HLA-A 遺伝子用 SSO プローブのシグナル分布

conformation polymorphism and direct sequencing. *Tissue Antigens* **49**:134-, 1997

8. Santamaria P, Lindstrom AL, Boyce-Jacino MT, *et al.*: HLA class I sequence-based typing. *Hum Immunol* **37**:39-,1993
9. Kotsch K, Wehling J, Kohler S, *et al.*: Sequencing of HLA class I genes based on the conserved diversity of the noncoding regions: sequencing-based typing of HLA-A gene. *Tissue Antigens* **50**:178–1997
10. Kawai S, Maekawajiri S, Tokunaga K, *et al.*: Routine low and high resolution typing of the HLA-DRB gene using the PCR-MPH (microtitre plate hybridization) method. Eur J *Immunogenet* **23**:471–86, 1996
11. Sambrook J, Fritsch EF, Maniatis T.: Molecular Cloning: A Laboratory Manual. Cold Spring Harbor, NY, Cold Spring Harbor Laboratory Press, 1989
12. Kawai S, Maekawajiri S, Yamane A.: A simple method of detecting amplified DNA with immobilized probes on microtiter wells. *Anal Biochem* **209**:63–9, 1993

表9　HLA 遺伝子のタイピング

パネル1

ウエル番号	HLA-A プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-B プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-C プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-DRB1 プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-DQB1 プローブ名	cut-off値	absorbance	判定
1	A2-5	0.80	0.25	−	B3-20	0.90	3.43	+	C1-4	0.90	0.14	−	2801tm2	0.80	0.22	−	DQ1-9	0.90	0.80	−
2	A3-11	0.70	0.13	−	B5-15	0.80	0.16	−	C3-3	0.60	1.71	+	1002tm1R	0.80	4.00	+	DQ3-7	0.80	3.73	+
3	A4-0	0.90	0.95	+	B6-83	0.90	3.02	+	C4-43	0.90	0.21	−	DR3-1	0.70	0.14	−	DQ4-8	0.80	0.17	−
4	A5-26	0.70	0.20	−	B7-6	0.90	0.16	−	C5-1	0.70	0.15	−	1004tm1R	0.80	3.53	+	DQ20-6	0.70	0.14	−
5	A6-0	0.70	0.10	−	B9-22	0.80	0.15	−	C6-18	0.70	0.16	−	1005-1	0.70	0.15	−	DQ6-49	0.80	0.10	−
6	A2C2T	0.70	3.28	+	B10-21	0.70	3.37	+	C25-3	0.70	0.14	−	1006tm1R	0.70	0.16	−	DQ7-18	0.80	2.23	+
7	A12-20	0.80	2.80	+	B13-5	0.80	3.81	+	C8-8	0.80	0.20	−	1007-1	0.70	0.11	−	DQ8-1	0.80	3.77	+
8	A13-29L	0.80	0.10	−	B2J1W	0.70	0.11	−	C9-79	0.90	2.93	+	1008tm1R	0.70	0.13	−	DQ9-44	0.80	0.14	−
9	A15-13	0.70	0.18	−	B2I1W	0.90	0.10	−	C10-38	0.90	3.14	+	MHD17-4	0.90	0.15	−	DQ10N-6	0.90	0.54	−
10	A16-14	0.70	2.79	+	B2H3TRM	0.80	0.09	−	C11-18	1.10	0.22	−	15int1-1-2	1.00	2.93	+	DQ12N-8	1.40	0.71	−
11	A19-12L	1.00	0.10	−	B20-8	0.80	2.47	+	C12-2	1.10	0.21	−	5703Jtm7	0.70	0.21	−	DQ13-9	0.70	0.30	−
12	A20-35	0.70	2.06	+	B24-65	0.60	0.89	+	C13-5	0.90	3.58	+	DR22-4	0.80	0.29	−	DQ14-14	0.90	0.23	−
13	A22-1	0.80	0.20	−	B25-9	0.80	2.86	+	C14-3	1.30	0.17	−	7004-6	0.80	0.16	−	DQ15-9	0.80	3.21	+
14	A24-29	0.70	3.01	+	B27-5	1.20	3.45	+	C15-131	0.70	1.94	+	DR28-22	0.80	0.11	−	DQ16-8	1.00	1.54	+
15	A25-14	0.90	2.11	+	B29-3	0.70	2.89	+	C16-70	0.80	0.25	−	DR30-2	0.70	0.14	−	DQ17-13	1.20	0.16	−
16	A28-37	1.00	2.97	+	B30-21	0.80	0.26	−	C17-7	0.70	0.16	−	MHD14N-8	0.90	0.16	−	DQ18-12	0.80	0.30	−
17	A29-16	0.70	0.18	−	B38-23	1.00	2.87	+	C18-1	1.50	0.12	−	MHD6-210	0.70	1.58	+	DQ19-34	1.20	0.14	−
18	A33-14	1.00	0.28	−	B41-5	0.70	0.20	−	C19N-67	0.70	2.87	+	MHD9-4	0.70	0.14	−				
19	A34-36	0.70	3.20	+	B46-241	0.90	2.04	+	C20-7	0.70	0.22	−	MHD11-55	0.70	1.53	+				
20	A35-6	0.70	2.52	+	B51-46	0.80	0.21	−	C21-12	0.60	1.91	+	MHD12-25	0.90	0.31	−				
21	A36-0	0.70	0.18	−	B52-5	0.90	3.73	+	C22-8	0.80	2.99	+	10XYJ-3	0.70	0.12	−				
22	A38-29	0.70	0.16	−	B5B8T	1.00	0.17	−	C23-23	0.80	0.18	−	DR23-32	0.80	0.21	−				
23	A39-7	0.70	1.90	+	B55-5	0.80	2.67	+	C24-8	0.80	1.48	+	MHD13-18	0.70	0.16	−				
24	A40-8	0.90	2.02	+	B57-14	0.90	0.17	−					DR34-116	0.60	3.31	+				

パネル2

ウエル番号	HLA-A プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-B プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-C プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-DRB1 プローブ名	cut-off値	absorbance	判定	HLA-DQB1 プローブ名	cut-off値	absorbance	判定
1	A2-5	0.80	0.23	−	B3-20	0.90	0.15	−	C1-4	0.90	0.14	−	2801tm2	0.80	2.47	+	DQ1-9	0.90	3.46	+
2	A3-11	0.70	2.42	+	B5-15	0.80	3.37	+	C3-3	0.60	0.21	−	1002tm1R	0.80	0.15	−	DQ3-7	0.80	0.11	−
3	A4-0	0.90	0.13	−	B6-83	0.90	0.18	−	C4-43	0.90	0.16	−	DR3-1	0.70	0.10	−	DQ4-8	0.80	0.09	−
4	A5-26	0.70	0.16	−	B7-6	0.90	1.82	+	C5-1	0.70	0.15	−	1004tm1R	0.80	0.11	−	DQ20-6	0.70	2.99	+
5	A6-0	0.70	0.13	−	B9-22	0.80	0.17	−	C6-18	0.70	0.28	−	1005-1	0.70	0.14	−	DQ6-49	0.80	2.51	+
6	A2C2T	0.70	2.99	+	B10-21	0.70	3.00	+	C25-3	0.70	3.04	+	1006tm1R	0.70	0.13	−	DQ7-18	0.80	0.14	−
7	A12-20	0.80	0.22	−	B13-5	0.80	2.86	+	C8-8	0.80	0.26	−	1007-1	0.70	3.59	+	DQ8-1	0.80	0.13	−
8	A13-29L	0.80	0.23	−	B2J1W	0.70	0.15	−	C9-79	0.90	3.38	+	1008tm1R	0.70	0.12	−	DQ9-44	0.80	0.18	−
9	A15-13	0.70	0.21	−	B2I1W	0.90	3.50	+	C10-38	0.90	0.57	−	MHD17-4	0.90	0.22	−	DQ10N-6	0.90	0.14	−
10	A16-14	0.70	2.83	+	B2H3TRM	0.80	0.12	−	C11-18	1.10	0.16	−	15int1-1-2	1.00	0.16	−	DQ12N-8	1.40	0.27	−
11	A19-12L	1.00	0.13	−	B20-8	0.80	0.15	−	C12-2	1.10	0.22	−	5703Jtm7	0.70	0.11	−	DQ13-9	0.70	0.11	−
12	A20-35	0.70	0.25	−	B24-65	0.60	1.35	+	C13-5	0.90	3.35	+	DR22-4	0.80	0.11	−	DQ14-14	0.90	0.19	−
13	A22-1	0.80	0.17	−	B25-9	0.80	3.32	+	C14-3	1.30	0.31	−	7004-6	0.80	0.11	−	DQ15-9	0.80	2.10	+
14	A24-29	0.70	3.00	+	B27-5	1.20	0.46	−	C15-131	0.70	3.10	+	DR28-22	0.80	0.09	−	DQ16-8	1.00	0.10	−
15	A25-14	0.90	0.23	−	B29-3	0.70	0.10	−	C16-70	0.80	0.26	−	DR30-2	0.70	0.13	−	DQ17-13	1.20	1.28	+
16	A28-37	1.00	3.16	+	B30-21	0.80	0.29	−	C17-7	0.70	0.13	−	MHD14N-8	0.90	0.12	−	DQ18-12	0.80	0.13	−
17	A29-16	0.70	0.15	−	B38-23	1.00	2.06	+	C18-1	1.50	0.13	−	MHD6-210	0.70	2.14	+	DQ19-34	1.20	1.72	+
18	A33-14	1.00	0.19	−	B41-5	0.70	0.16	−	C19N-67	0.70	0.32	−	MHD9-4	0.70	1.12	+				
19	A34-36	0.70	3.39	+	B46-241	0.90	2.74	+	C20-7	0.70	3.30	+	MHD11-55	0.70	0.13	−				
20	A35-6	0.70	0.17	−	B51-46	0.80	0.18	−	C21-12	0.60	2.74	+	MHD12-25	0.90	2.66	+				
21	A36-0	0.70	2.66	+	B52-5	0.90	0.18	−	C22-8	0.80	0.53	−	10XYJ-3	0.70	0.12	−				
22	A38-29	0.70	0.15	−	B5B8T	1.00	3.24	+	C23-23	0.80	0.19	−	DR23-32	0.80	0.13	−				
23	A39-7	0.70	1.63	+	B55-5	0.80	0.23	−	C24-8	0.80	1.35	+	MHD13-18	0.70	2.04	+				
24	A40-8	0.90	2.51	+	B57-14	0.90	0.11	−					DR34-116	0.60	2.87	+				

陽性シグナルを下線で示した。

パネル 1: A*2402/20, A*31012, B*3501, B*5201, Cw*0303, Cw*1202, DRB1*1501/02, DRB1*0404/05/10, DQB1*0402, DQB1*0601

パネル 2: A*1101/02, A*2402/20, B*0702/05//+, B*4002/03, Cw*0301, Cw*0704, DRB1*0101, DRB1*0901, DQB1*0303, DQB1*0501

Simultaneous HLA genotyping using the microtiter plate hybridization-2 method in Japanese population.

Masaki Matsushita[1)], Takahiro Ogawa[1)], Tatsuya Matsumi[2)], Masaki Nagato[1)], Takanori Oka[1)], Shintaro Kawai[1)]

1) Institute for Medical Research, Wakunaga Pharmaceutical Co., Ltd., Hiroshima, Japan
2) Diagnositc Sales Department, Wakunaga Pharmaceutical Co., Ltd., Hirishima, Japan

Summary: We have established a simple and economical HLA genotyping method using the microtiter plate hybridization (MPH), which enables us to perform simultaneous DNA typing of HLA-A, -B, -C, -DRB1 and -DQB1 loci using the same PCR parameters and hybridization conditions. To discriminate HLA alleles at serological group existing in Japanese population, 24, 24, 23, 24, and 17 motif sequences were selected for HLA-A, -B, -C, -DRB1, and DQB1 genes, respectively. Using this method, 32 HLA loci can be typed within 5 h by one technologist.

2003

7th Asia-Oceania Histocompatibility Workshop and Conference Abstracts

Symposium

(S1-2) The evolution of the MICA and HLA-B polymorphisms

Z. Yao, D. Chandanayingyong[2], K. Witter, A. Volgger, D. Piancatelli_, T. Del Beato_, K. Oumhani_, D. Adorno_, M.L. Petzl-Erler_, L.T. Tsuneto_; L.A. Fan[4], M. Lau[5], E. Mickelson[6], W. Helmberg[7] & E. Albert
Immunogenetics Laboratory, LMU Munich/D; [2]Mahidol University, Siriraj Hospital, Bangkok/Thailand [3]CNR ITOI, L'Aquila/I; [4]Universidade do Parana, Curitiba/Br; [5]Department of Immunogenetics, Shanghai Institute of Immunology, Shanghai/China, [5]UCLA Immunogenetics Center, Los Angeles, CA/USA; [5]HIP, Fred Hutchinson Cancer Research Center, Seattle, WA/USA, [7]National Center For Biotechnology Information, Bldg 38A, NIH, Bethesda, MD 20894, USA

The MICA locus codes for a stress inducible surface glycoprotein which is expressed in gastrointestinal epithelium and some epithelial tumors. The MICA molecules are — in contrast to regular class I molecules — not associated with β_2-microglobuline and they do not appear to bind specific peptides. The MICA molecule binds with the natural killer receptor NKG2D and co-stimulates some γ–δ T-cells as well as antigen specific CD8 α–β T-cells. The restricted tissue distribution and the inducibility by cytomegalovirus has raised the speculation that MICA gene products could be involved in graft-versus-host disease. In addition it has become obvious that the interaction of MICA with NKG2D could provide stimulation of cytotoxicity superseding stimulation or inhibition of NK cells in the defense against neoplasia.

We have developed techniques for the detection of polymorphisms in exons 2, 3, 4 and 5 as well as in the introns. Exons 2, 3, 4 and 5 were separately sequenced. Using the sequence data base for MICA alleles assembled by Steven Marsh, we were able to include the MICA exons 2, 3, 4 and 5 polymorphism in the Helmberg Score Computer Analysis Program. We have investigated the relationship between the polymorphisms of MICA and HLA-B in a variety of samples from the International Workshop cell lines, from Thailand, from China, from Brazil, from North Africa and from the International Cell Exchange, UCLA as well as from our panel and families in our laboratory. The aim of the study is to correlate HLA-B alleles (sequenced for exon 2 and 3) with MICA alleles sequenced for exons 2, 3, 4 and 5 with a particular emphasis on the subtypes in the HLA-B allele groups as for example B*3501, *3503, *3504, *3505, *3511 and *3512. The combined sample size is greater than 350.

The following results became apparent:

1) There is very strong linkage disequilibrium between HLA-B and MICA as would be expected. This linkage disequilibrium extends over widely differing populations around the globe.
2) The most common MICA allele *008 is associated with a number of HLA-B alleles (B*07, *08, *4402).
3) Several groups of closely related B locus alleles are strongly (almost exclusively) associated with the same MICA allele: B*38, *39 with MICA*002; B*51, *52 with MICA*009; B*54, *55, *56 with MICA*012.
4) Many B locus subtypes of B*35 or of B*38, *39 share the same MICA association.

The fact that the various subgroups of HLA-B originating in widely differing populations share the same MICA allele indicates, that the MICA polymorphism is more ancient than HLA-B, or in other words HLA-B is evolving more rapidly than MICA.

(S1-3) Diversity of Immune Loci: Lessons from Genome Sequencing

Stephan Beck
Wellcome Trust Sanger Institute, Hinxton, Cambridge CB10 1SA, UK

The Human Genome Project is probably the most important project in modern biology with far-reaching implications for biomedical research including immunology. A free 'working draft' sequence has been publicly available since June 2000 and an essentially finished sequence since April 2003. The on-going analysis and annotation of the human genome have been particularly enhanced through recent 'working draft' sequences of the mouse and several fish genomes. The visualization of this great wealth of diverse genome data has been (and still is) a great challenge for bioinformatics and resulted in the development of the ENSEMBL genome database at http://www.ensembl.org/, the UCSC genome browser at http://genome.ucsc.edu/ and various other comparative analysis tools.

The lecture will include a brief history of these projects and review some of the key lessons learnt from the sequence so far. These will include excursions into comparative genomics and functional genomics and will be discussed in the context of diverse immune loci

including those of the major histocompatbility complex (MHC) and leukocyte receptor complex (LRC).

(S1-4) Genetic diversity and genomics of the immune response: identifying immune variation within the MHC and throughout the genome

Daniel E. Geraghty[1], Riza Daza[1], Luke M. Williams[1], Quyen Vu[1], and Akiko Ishitani[2]
[1]The Clinical Research Division, Fred Hutchinson Cancer Research Center, 1100 Fairview Ave. N. Seattle WA 98109–1024, [2]Nara Medical University, Kashihara, Nara 634 Japan.

With the advent of modern genomic sequencing technology the ability to obtain new sequence data and to acquire allelic polymorphism data from broad range of samples has become routine. In this regard, our investigations have started with the most polymorphic of genetic regions fundamental to the immune response in the MHC. Starting with the completed human MHC genomic sequence, we have developed a resource of methods and information that provide ready access to a large portion of human and nonhuman primate MHCs. This resource consists of a set of primer pairs or amplicons that can be used to isolate about 15% of the 4.0 Mb MHC. Essentially similar studies are now being carried out on a set of immune response loci to broaden the usefulness of the data and tools developed. A panel of 100 genes involved in the immune response have been targeted for SNP discovery efforts that will analyze 120 Mb of sequence data for the presence of immune-related SNPs. We have used this approach to analyze a large number of diverse human haplotypes and have extended analysis to non human primates represented by the gorilla, baboon, macaque, and marmoset. The SNP data provided from the MHC and from the immune response panel has been adapted for use in studies of evolution, MHC disease associations, and clinical transplantation.

(S1-5) From HLA to genome-wide scan: common disease gene mapping by association analysis using microsatellites

Hidetoshi Inoko
Department of Molecular Life Science Tokai University School of Medicine, Bohseidai, Isehara, Kanagawa-Pref., 259–1193, Japan TEL: 463–93–1121, FAX: 463–94–8884 E-mail: hinoko@is.icc.u-tokai.ac.jp

Now that human genome sequencing has been completed, it is an upcoming important subject to carry out identification of disease genes, especially for common diseases such as schizophrenia, atopy, diabetes, hypertension, cerebral infarction, cardiac failure etc) which have multifactorial genetical basis. This "human genome diversity project" is conducted by mapping and association analyses using polymorphic genetic markers. For this purpose, SNP (single nucleotide polymorphism) markers are now being extensively and world-widely collected, and applied to disease mapping in a lot of laboratories. However, SNP is generally bi-allelic, and so polymorphism is not considered to be extensive enough to localize disease genes on the human genome by genome-wide mapping.

Instead, we propose to use microsatellite which displays a high degree of polymorphism in repeat number of repetitious unit and so is expected to serve as a more useful genetic marker for genome-wide mapping. To test this hypothesis, we have focused on mapping of diseases in the HLA region on chromosome 6p21.3, which is divided into class I, class II and class III regions from centromere to telomere. The human MHC (HLA) encompasses a 3.6 Mb (3,600 kb) segment, which is characterized by high gene density (one gene/18 kb), extensive genetic polymorphism (more than 900 alleles at 12 HLA loci) and the presence of susceptible loci for more than 100 diseases (HLA-associated diseases). In these respects, the HLA region provides an excellent mini-genome model region for "human genome diversity project". This area has been determined for the complete genomic sequence by the international consortium groups (1). Among these efforts, our group (Tokai University) determined the nucleotide sequence of the 2.2 Mb continuous HLA region including the 1.8 Mb entire class I region as well as the 0.4 Mb class III region (2), in order to elucidate the detailed gene organization in the HLA class I region and identify susceptible genes for many HLA class I-associated diseases .

A total of 1502 microsatellite repeats were identified in the 3.6 Mb HLA genomic sequence. These consist of 409 di-, 266 tri-, 539 tetra- and 307 penta-nucleotide repeats, yielding an overall density of one microsatellite per 2.4 kb. Among the 1502 microsatellite identified here, 144 have been selected and subjected to polymorphism analysis within a Japanese population. As expected, 78 out of these 144 microsatellites are quite polymorphic with an average of 10.0 alleles and 62.9% heterozygosity. As these polymorphic microsatellites are evenly dispersed throughout the HLA region, they should serve as much needed genetic markers in linkage and association analyses, enabling investigators to precisely map HLA-associated disease susceptibility loci. In fact, by investigation of genetic polymorphisms in 78 microsatellite repeats, we could successfully reduce the critical regions for Behcet's disease (associated with B51) to a 100 kb segment around the HLA-B gene, for psoriasis vulgaris (with Cw6) to a 50 kb segment telomeric of HLA-C, and for rheumatoid arthritis (the second susceptible locus in the HLA region) to a 50 kb segment between IkBL and MICB. From these segments, susceptible genes for those three diseases, HLA-B51 for Behcet's disease, SEEK1 for psoriasis vulgaris and IkBL for rheumatoid arthritis were identified from these critical candidate regions by SNP association analysis.

Thus, refined microsatellites provide useful and valuable genetic markers for precise disease mapping. In contrast, SNP mapping are not

easy even for these HLA associated diseases at the Mb level mapping, mainly due to a few alleles (two alleles) and low heterozygosity of SNP. These results are validated by different lengths of linkage disequilibrium observed for SNP and microsatellite. Namely, the length of linkage disequilibrium observed for SNP is less than 5 kb, whereas it is as long as 100 kb for microsatellite. This suggests that one microsatellite per 100 kb is enough for genome-wide mapping. Collectively, the efficient method of genome-wide mapping is to first use microsatellites markers which enable to narrow down the critical region to approximately 100 kb and thereafter to employ SNP markers within thus determined critical region for fine mapping to identify a susceptible gene. Based on this conclusion, we have collected 30,000 polymorphic markers (one microsatellite per 100 kb) throughout the human genome which will be subjected to genome-wide mapping of complex diseases. Now we are conducting genome-wide association mapping of 20 common diseases using 30,000 microsatelittes.

References
(1) The MHC sequencing consortium: Complete sequence and gene map of a human major histocompatibility complex (MHC). Nature 401: 921–923, 1999.
(2) Shiina T, Tom G, Oka A, Takishima N, Yamagata T, Kikkawa E, Iwata K, Tomizawa M, Okuaki N, Kuwano Y, Watanabe K, Fukuzumi Y, Itakura S, Sugawara C, Ono A, Yamazaki M, Tashiro H, Ando A, Ikemura T, Soeda E, Kimura M, Bahram S, Inoko H : Molecular dynamics of MHC genesis unraveled by sequencing analysis of the 1,796,938 bp HLA class I region. Proc Natl Acad Sci USA 96 : 13282–13287, 1999.

(S1-6) Immunogenetics of non-conventional MHC class I genes.

Seiamak Bahram
Human Molecular Immunogenetics, INSERM-CReS, School of Medicine, 4 rue Kirschleger, 67085 Strasbourg Cedex, France.

The past century has witnessed the unfolding of perhaps the most formidable saga of human genetics and biology. First identified genetically and serologically, then characterized biochemically, and finally defined at the nucleotide and structural levels, the Major Histocompatibility Complex (MHC), approximately one-thousandth of the genome, encompasses its most polymorphic members. This diversity enables the MHC to counter-act the extraordinary diverse microbiological threats and, paradoxically, also engenders the not well understood susceptibility to a large number of pathologies. The MHC is defined by two gene classes, I and II, which are structurally related but functionally distinct, each displaying a different set of peptide antigens to $\alpha\beta$ T-cell receptor expressing killer and helper T cells respectively. Class II molecules are restricted to the MHC proper, located on the sixth chromosome in man, but the MHC-I molecules are dispersed throughout the genome and accomplish a variety of unrelated tasks (Figure 1). This lecture will review our current knowledge of the functional genomics of the MHC with special emphasis on the large number of MHC class I genes identified outside the MHC per se on chromosome 6p21.3. Wherever applicable, reference will be made to genetic diversity within these loci as well as to their functional relevance in disease susceptibility.

Further readings:
Bahram, S. 2000. MIC genes: from genetics to biology. Adv Immunol 76:1.
Bendelac, A., M. Bonneville, and J. F. Kearney. 2001. Autoreactivity by design: innate B and T lymphocytes. Nat Rev Immunol 1:177.
Garboczi, D. N., and W. E. Biddison. 1999. Shapes of MHC restriction. Immunity 10:1.
Hill, A. V. 1998. The immunogenetics of human infectious diseases. Annu Rev Immunol 16:593.
Kronenberg, M., Gapin, L. 2002. The unconventional lifestyle of NKT cells. Nat Rev Immunol. 2:557.
Porcelli, S. A., and R. L. Modlin. 1999. The CD1 system: antigen-presenting molecules for T cell recognition of lipids and glycolipids. Annu Rev Immunol 17:297.
Radosavljevic, M. and Bahram, S. 2003. *In vivo* immunogenetics: from *MIC* to *RAET1* loci. Immunogenetics 55: 1.
Wilson, I. A., and P. J. Bjorkman. 1998. Unusual MHC-like molecules: CD1, Fc receptor, the hemochromatosis gene product, and viral homologs. Curr Opin Immunol 10:67.

(S1-7) Genetic and functional relationships between MHC and NK receptor genes and their products.

John Trowsdale.
Immunology, Department of Pathology, Tennis Court Road, Cambridge CB2 1QP.

Over 5% of the genes in the human genome are involved in defence against infection. Some of these genes have features consistent with this role. For example, many of them are polygenic and polymorphic. They tend to be clustered in the genome. Some are evolving rapidly, by allele or gene conversion. We are studying some of these immune system genes to determine their role in disease resistance. Our main focus includes the MHC and NK complexes as the extensive variation in both MHC and NK receptor loci may reflect continuous selection for resistance to pathogens. And, since the genes are on different chromosomes it is expected that there may be epistatic interactions between products of alleles from class I and NK receptors. In collaboration with other groups, including Mary Carrington's laboratory at

Frederick, we are obtaining evidence for these interactions in MHC class I-associated diseases.

(S2-2) A structural basis for the selection of dominant alpha/beta T cell receptors in anti-viral immunity

Lars Kjer-Nielsen[1], Craig S. Clements[2], Anthony W. Purcell[1], Andrew G. Brooks[1], James C. Whisstock[2,3], Scott R. Burrows[4], Jamie Rossjohn[2*] & James McCluskey[1*]

[1]Department of Microbiology & Immunology, University of Melbourne, Parkville, Victoria 3010, Australia; [2]The Protein Crystallography Unit, Department of Biochemistry and Molecular BiologySchool of Biomedical Sciences and [3]Victorian Bioinformatics Consortium, Monash University, Clayton, Victoria 3168, Australia; [4]Queensland Institute of Medical Research, Herston 4029, Queensland, Australia. *conjoint senior authors.

We have examined the basis for immunodominant or "public" TcR usage in an antiviral CTL response. Residues encoded by each of the highly selected genetic elements of an immunodominant clonotype recognising Epstein-Barr virus were critical to the antigen specificity of the receptor. Upon recognising antigen, the immunodominant TcR undergoes extensive conformational changes in the complementarity determining regions (CDRs), including the disruption of the canonical structures of the germline-encoded CDR1α and CDR2α loops produce an enhanced fit with the HLA-peptide complex. TcR ligation induces conformational changes in the TcR α constant domain thought to form part of the docking site for CD3ε. The structure of a CD3εg dimer complexed with a Fab of OKT3 provides further evidence for this model. These findings indicate that TcR immunodominance is associated with structural properties conferring receptor specificity and suggest a novel structural link between TcR ligation intracellular signaling.

(S2-3) DOCK2, CED-5 human homologue, controls mobility and function of lymphocytes

Takehiko Sasazuki, MD. Director-General, Research Institute, International Medical Center of Japan, 2–1–1 Toyama, Shinjuku, Tokyo 162–8655 Japan

Cell migration is a fundamental biological process involving membrane polarization and cytoskeletal dynamics. Cell migration is crucial in embryogenesis, but it also plays an important role in physiological function of the adult organism. The typical example is seen in the immune system, where lymphocytes continually patrol the body for foreign antigens. T- and B- lymphocytes differentiated in the primary lymphoid organs, thymus and bone marrow, are released into peripheral blood and migrate to particular sites of the secondary lymphoid organs such as spleen, lymph nodes and Peyer's patches to elicit antigen-specific immune response. It is well established that lymphocyte migration is initiated and guided by chemokines. However, very little is known about the molecular mechanism that regulates lymphocyte motility itself.

The CDM family proteins, CED-5 in *Caenorhabditis elegans*, Myoblast City in *Drosophila melanogaster* and DOCK180 in humans, are known to mediate remodeling of actin cytoskeleton. We have identified a new member of the CDM family protein DOCK2 that is predominantly expressed in lymphocytes. DOCK2-deficient mice exhibited migration defects of T and B lymphocytes in response to chemokines, resulting in several abnormalities including T lymphocytepenia, atrophy of lymphoid follicles and loss of marginal zone B cells. In DOCK2$^{-/-}$ lymphocytes, chemokine-induced Rac activation and actin polymerization were totally abolished. These results indicate that DOCK2 plays a central role in lymphocyte migration by remodeling actin cytoskeleton though Rac activation. In addition, we recently found that DOCK2 also functions downstream of T cell receptor and regulated antigen-recognition. Therefore, DOCK2 might be a novel therapeutic target for graft rejection and autoimmune diseases.

(S2-4) HLA associated genetic predisposition to autoimmune diseases

Erik Thorsby

Institute of Immunology, Rikshospitalet University Hospital, Oslo, Norway

Autoimmune diseases are the result of an interplay between genetic predisposition and precipitating environmental factors. While the environmental factors are largely unknown, more are known about the predisposing genes. Genes in the HLA complex are by far the strongest predisposing genes, and account for approx. 50% (or more) of the genetic predisposition. A large body of evidence strongly suggests that genes encoding particular peptide-presenting HLA class I or II molecules are the strongest predisposing genes.

Recent studies have shown, however, that also other genes among the approx. 130 genes in the HLA complex play an important role. Using appropriate methods to control for the strong linkage disequilibrium between alleles in the HLA complex, we have been able to demonstrate that several additional HLA regions contain genes which independently contribute to the HLA associated genetic predisposition. This was further corroborated in the studies conducted by the Disease Component of the recently finished 13. International

Histocompatibility Workshop. The nature of these additional HLA complex genes are currently under investigation, and may be common predisposing genes for several autoimmune diseases.

The identification of genes predisposing to autoimmune diseases will lead to better methods to identify individuals at high risk to develop these diseases. When the function of these genes has also been unveiled, this may lead to better methods to treat and prevent these diseases from developing in those at high risk.

(S2-5) Manipulation of immune response by genetically modified dendritic cells derived from mouse ES-cells

Yasuharu Nishimura, Hidetake Matsuyoshi, Sinya Hirata and Satoru Senju
Dept. Immunogenetics, Grad. Sch. Med. Sci., Kumamoto Univ., Honjo 1–1–1, Kumamoto 860–8556, JAPAN.

Dendritic cell (DC)-based immunotherapy is regarded as a promising means for anti-cancer therapy. The efficiency of T cell-priming in vivo by transferred DCs should depend on their encounter with T cells. In the present study, we attempted to improve the capacity of DCs to prime T cells in vivo by genetic modification to express chemokine with T cell-attracting property. For genetic modification of DCs, we used a recently established *in vitro* method to generate dendritic cells from mouse embryonic stem (ES) cells (ES-DC). After stimulation of ES-DC with IL-4 plus TNF-α, combined with anti-CD40 mAb or LPS, ES-DCs expressed MHC class II, CD11c, CD80, and CD86, and completely became mature DCs, characterized by a typical morphology and higher capacity to stimulate primary MLR. Using an expression vector containing the internal ribosomal entry site (IRES)-puromycin N-acetyltransferase gene, we could efficiently generate ES cell transfectants expressing the products of introduced genes after their differentiation to DCs. ES-DCs expressing invariant chain-replaced by a PCC epitope at CLIP region presented the epitope efficiently in the context of E^k. We primed OVA-specific and MHC class I-restricted cytotoxic T lymphocytes *in vivo* by injecting mice with ES-DCs expressing OVA, thus demonstrating immunization with ES-DCs genetically engineered to express antigenic protein. Furthermore, we generated double-transfectant DCs expressing a chemokine along with a model antigen, OVA, by sequential transfection of ES cells then inducing differentiation to DCs. Immunization with DCs expressing OVA plus secondary lymphoid tissue chemokine (SLC) or monokine induced by IFN-γ(Mig) provided protection from OVA-expressing tumor cells more potently than that with OVA only, and SLC was more effective than Mig. The findings provide useful information for the development of a potent DC-based cellular immunotherapy for cancers. The attempt to inhibit antigen-specific response of autoreactive T cells by using ES-DCs expressing a specific autoantigen together with immunosuppressive molecules is also ongoing to prevent development *in vivo* of an experimental autoimmune disease in mice.

(S2-6) NK receptor genes are predictors of HIV progression

Frank Trevor Christiansen[1], Silvana Gaudieri[2], Dianne De Santis[3], Corey Moore[4], Campbell Witt[1], Ian James[4], Simon Mallal[4]
[1]Department of Clinical Immunology & Biochemical Genetics, Royal Perth Hospital, [2]University of Western Australia, [3]DCIBG, RPH & University of Western Australia, [4]CCIBS, Murdoch University & RPH

NK cell receptors and HLA molecules are intimately involved in the immune response against viral infections. The killer immunoglobulin-like receptors (KIRs) on NK cells regulate responses via the recognition of their particular HLA class I ligands. At the genomic level, both genetic systems are polymorphic and have recognised haplotypes, which adds complexity to their interaction. Previously, we and others have shown the association of HLA class I with HIV progression. More recently, the Carrington group observed a synergistic effect involving the activating KIR3DS1 gene and HLA-B Bw4–80Ile on the progression to depletion of CD4+ T cells.
To further investigate the relationship between the two genetic systems, we examined changes in viral load in 249 pre-treatment patients from the Western Australia HIV cohort. Genetic variants known to affect HIV progression but not KIR3DS1 were associated with changes in HIV-1 viral load. When we examined only those patients with known seroconversion dates, we found that the presence of the KIR3DS1 gene was associated with more rapid decline in the proportion of CD4+ T cells ($p = 0.01$) but were unable to show a KIR3DS1 and Bw4–80Ile interaction. The presence of other KIR genes (viz KIR2DS2, KIR2DL2 and KIR2DS1), all found on KIR B group haplotypes, were also associated with a more rapid progression.
We suggest that KIR genes influence outcome in HIV infection and that further analyses of haplotypes in both genetic systems is needed to understand their complex interactions in driving NK cell responses to HIV.

(S2-7) HIV-1 escape from HIV-1-specific CD8 T cells in individuals with HIV-1 infection

Masafumi Takiguchi
Center for AIDS Research, Kumamoto University, Kumamoto, Japan

HIV-1-specific $CD8^+$ T cells play a critical role in the control of human immunodeficiency virus type-1 (HIV-1) infection. $CD8^+$ T cells

inhibit the replication of HIV-1, not only by cytolytic mechanisms but also by the release of HIV-suppressive factors such as interferon-γ (IFN-γ) and chemokines. However, although HIV-1-infected individuals exhibit a strong HIV-1-specific cytolytic response, these individuals usually develop AIDS if they are not treated with anti-retrovirus therapy. These findings indicate that HIV-1 can escape from HIV-1-specific $CD8^+$ T cells. The HIV-1 escape may occur via different mechanisms such as mutations of immunodominant epitopes, apoptosis of HIV-1-specific $CD8^+$ T cells via Fas and TNF, impaired cytolytic function of HIV-1-specific CTLs and Nef-mediated HLA class I down-regulation.

To investigate the mechanism of HIV-1 escape from HIV-1-specific $CD8^+$ T cells, we studied recognition of HIV-1-specific $CD8^+$ T cells for wild type (Nef-positive; Nef^+) HIV-1- or Nef-defective HIV-1-infected CD4 T cells using HIV-1-specific CD8 T cell clones. Most CTL clones failed to kill Nef^+ HIV-1-infected CD4 T cells but partially inhibited Nef^+ HIV-1 replication. These CTL clones were capable of producing cytokines after recognizing Nef^+ HIV-1-infected CD4 T cells, implying that the cytokines secreted from HIV-1-specific CTL clones play an important role in inhibition of HIV-1 replication. These findings may account for the fact that HIV-1-specific $CD8^+$ T cells partially inhibit HIV-1 replication in chronically HIV-1-infected individuals. We further analyzed HIV-1-specific $CD8^+$ T cells in patients with acute and chronic HIV-1 infection using HLA class I tetramers which were generated using more than 20 HIV-1 epitopes. *Ex vivo* analysis of the peripheral blood demonstrated that $CD27^{low}CD28^-CD45RA^-$ memory/effector subset predominantly increased in HIV-1-specific $CD8^+$ T cells in patients with acute and chronic HIV-1 infection. This is in contrast to the fact that $CD27^-CD28^-CD45RA^-$ and $CD27^-CD28^-CD45RA^+$ effector subsets predominantly increased in HCMV-specific $CD8^+$ T cells in both HIV-1 infected and healthy individuals. Function of $CD27^{low}CD28^-CD45RA^-$ HIV-1-specific $CD8^+$ T cells will be discussed.

(S2-9) Immunobiology of natural killer cells mediated by activating and inhibiting receptors

Bo Dupont, MD., DSc.
Immunology Program, Memorial Sloan-Kettering Cancer Center

Natural Killer (NK) cells recognize abnormal cells such as transformed tumor cells, virus infected cells, and cells undergoing stress. Studies using tumor models have demonstrated that NK cells become activated upon interaction with target cells that have lost expression of "self" MHC class I antigens i.e. the missing "self" recognition. Malignant and virally transformed cells may, however, upregulate ligands for the activating receptor NKG2D and override inhibitory signals mediated by self-MHC. Alternatively, target cells may loose MHC class I expression and thereby induce NK activation. It is therefore currently not known how concomitant inhibitory and activating signals are coordinated to regulate NK effector function. The inhibitory KIRs, 2DL2 (CD158b1) and 2DL3 (CD158b2) have ligand specificity for HLA-Cw antigens of the Cw3 group and 2DL1 (CD158a) has ligand specificity for the Cw4 group. Accordingly, KIR2DL receptors cover the complete spectrum of HLA-Cw antigens in the human population and constitute one receptor-ligand system for tolerance to "self" and protection against auto-aggression. Other inhibitory receptors for HLA class I molecules include 3DL1 (ligand specificity for Bw4), ILT2 (ligand specificity for multiple HLA class I) and CD94/NKG2A (ligand specificity for HLA-E). All inhibitory NK receptors mediate their inhibitory function by recruitment and activation of cytoplasmic tyrosine phosphatases to the immunoreceptor tyrosine-based inhibitory motif (ITIM) within the cytoplasmic domain of the receptor. In the absence of inhibitory signals, NK cells are activated by ligand interactions with activating receptors such as natural cytotoxicity receptors (NCR), activating KIRs, NKG2D, CD94/NKG2C, 2B4 and others.

We will present data on mechanistic aspects on NK cell inhibition obtained from analysis of the Natural Killer Cell Immune Synapse (NKIS). It is demonstrated that inhibitory KIR provides a scaffold for ligand-induced translocation of inhibitory signals into the central supramolecular inhibitory cluster resulting in interruption of activation pathways.

Secondly, we will demonstrate how the KIR genotype for inhibitory receptors influences the outcome of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation (HCT). This effect is observed also in HCT with HLA genotypically identical sibling donors. The effect of KIR mismatching is observed in patients with acute myelogenous leukemia (AML) and is demonstrated by reduced rate of leukemia relapse.

Finally, we will demonstrate an example of tumor evasion from NK cell mediated immune responses. NK cells from patients with colorectal cancer frequently lack expression of activating NKG2D and chemokine CXCR1 receptors, both of which are internalized. Serum levels of NKG2D ligands, MHC-class-I-chain-related (MIC) molecules are elevated and are responsible for downmodulation of NKG2D and CXCR1. Our studies indicate that MIC-expressing tumor cells evade NK cell immunity by deactivating NK cells via the soluble MIC-NKG2D interaction.

These studies provide examples of NK cell biology and effector functions in health and diseases. The studies illustrate that NK cells play important roles in immune responses and are key effector cells in immunosurveillance of malignant cells.

(S3-1) Origin & implications of genomic diversity in disesase susceptibility, in Southern India.

Pitchappan RAMASAMY
Centre for Excellence in Genomic Sciences, Madurai Kamaraj University, Madurai 625021 INDIA

Some of the grandest experiments of Nature has been conducted in the name of Caste system in southern India (Dobzhansky 1973). Modern man migrated to India and farther, since the first coastal migration 50,000 years ago. A large-scale expansion in Middle East and Central Asia and search of new pastures resulted in emigration to India: Many of these populations formed ancient settlers in India. Ten thousand years ago, Fertile Crescent, Middle East, Baluchi-Harappan tradition, (7000BC to 2000BC), and the whole of India were occupied by people speaking Dravidian language in addition to other tribal and other languages. As on date, Southern India is characterized by Dravidian language family, Dravidian kinship and caste system, the sub-divided gene pools (breeding isolates). Originating in different ancient settlements they flew in, and expanded though sympatrically isolated. Thus 'Dravidian' became a culture and a linguistic family, adopted by 95% of the people of southern India. The genomic diversity thus generated in the name of sub-divided gene pools, provide us a means to study the role of MHC in the generation of immune-repertoire and differential susceptibility to various infectious diseases: it provides us an opportunity to evaluate and distinguish migration vs. selection operating on the highly polymorphic MHC region. Well-defined breeding isolates of southern India differs in their origin, migration and MHC diversity. A gradient of HLA DRB1* alleles and MHC haplotypes from Eastern Europe to South East Asia attributed to migrations follows that pattern of NRY flow. Selection still operates on MHC loci. Disease association studies, community genetic studies, Genome Scan studies all reiterate the importance of samples identity, even in this genomic era. Studies on South Indian samples have identified high-risk alleles for tuberculosis and leprosy, genomic regions predisposing for leprosy and the role of epidemiology / vaccination status in immune repertoire at the TCR level. The genetic and immunological basis of multi-factorial, polygenic, infectious and autoimmune diseases and disorders thus need to be interpreted in the context of migrational history community genetics to obtain unequivocal results: this adds a new dimension to genomic diversity.

(S3-2) HLA Polymorphism and Evolutionary Inferences

Henry Erlich[1] and Steven Mack[2]
[1]Roche Molecular Systems, Alameda, CA USA, [2]Children's Hospital Oakland Research Institute, Oakland, CA USA

The analysis of HLA sequence diversity can be informative with respect to the evolution of HLA polymorphism as well as the evolution of the human species. Inferences about the more recent relationships among human populations can be made by analyzing the distribution of HLA alleles in various human populations. Such population data can also be analyzed by the Ewens-Watterson homozygosity test to reveal the nature of the selective pressures that have shaped these frequency distributions. Phylogenetic analyses of HLA sequences from a variety of primate species by a variety of labs have indicated the presence of ancestral polymorphisms (i.e. predating the hominoid divergence, 5–7 myr ago) at most loci. However, most DPB1 sequences cluster by species, suggesting that this locus has been evolving faster than the other loci and/or that only one or two ancestral alleles have been retained by the modern hominoid species. Several years ago, Bergstrom et al. (Nature Genetics, 1998) compared phylogenetic trees for human DRB1 sequences from exon-2 and introns 1 and 2 and concluded that, while the major allelic lineages predate the hominoid divergence, the alleles within a lineage are of more recent origin. This interpretation of the DRB1 intron sequence data, unlike interpretations based on exon-2 sequence data, which is known to be under selection, allowed estimates of the size of and coalescence time for the founding human population that were consistent with estimates from mtDNA and other autosomal markers. We have recently used allele frequency data from a variety of human populations, using Nei's genetic distance and neighbor-joining algorithms, to construct population "networks". Although some graphical representations of these population relationships (ie dendrograms) look like sequence "trees", these population-based networks differ from gene geneology trees based on sequence divergence in a number of fundamental ways, such as the meaning of branch length. The relationships among human populations can be inferred from such networks, and specific anthropological hypotheses (e.g .the colonization of Polynesia) can be examined. We will present the analyses of population data generated in our lab as well as data generated, using our immobilized probe HLA class I typing reagents, by participating labs in the 13th International Histocompatibility Workshop.

Reference:
Bergstrom, TF, Agnetha, J., Erlich, HA, Gyllensten, U. 1998. Recent origin of HLA-DRB1 alleles and implications for human evolution. Nature Genetics 18: 237–242.

(S3-3) MHC class I gene organization in primates

Hiromi Sawai, Yoko Satta and Naoyuki Takahata
Department of Biosystems Science, Graduate University for Advanced Studies, Hayama 240–0193, Kanagawa, Japan

ABSTRACT The genealogical relationships of MHC class I genes between humans and New World Monkeys (NWMs) are examined by means of SINE/LINE markers and genomic DNA sequences. From three subfamilies in NWMs (Aotinae, Atelinae, and Cebinae), 18 MHC-like genes are found. Of these, two pairs of genes are clearly orthologous to HLA-E and -F, respectively. In the remaining 14 genes, eight belong to a cladistically distinct group B, including HLA-B/C, and they are phylogenetically clustered into four clades (B1, B2, B3 and B4). The presence of group B genes in NWMs is contrary to the previous finding that there are no genes in subfamily Callitrichinae which share direct common ancestors with HLA-B/C. Furthermore, in each of B1, B2 and B3 clades, the orthologous relationships are found among different subfamilies.
This is in sharp contrast to the genus-specific gene organization in Callitrichinae. The other six genes belong to a cladistically distinct group G and are phylogenetically clustered into two clades (G1 and G2). However, since these genes are almost equally related to HLA-G, -A/H, -J and -K, it is likely that they are not orthologous to HLA-G. Since most class I genes in humans and NWMs were generated prior to the emergence of simian primates, gene duplication took place frequently during the early evolution of primates and the class I gene organization has since been somehow stabilized. The present repertoire of simian primate MHC loci has been shaped mainly by loss of loci.

(S3-5) Evolutionary origin of the central nervous system-related genes and its implication to the MHC gene evolution

Katsuhiko Mineta[1,2], Masumi Nakazawa[2], Francesc Cebria[3], Kazuho Ikeo[1,2], Kiyokazu Agata[3], and Takashi Gojobori[1,2]
[1]Center for Information Biology and DNA Data Bank of Japan, National Institute of Genetics, Yata 1111, Mishima, Shizuoka 411–8540, Japan; [2]Department of Genetics, The Graduate University for Advanced Studies, Yata 1111, Mishima, Shizuoka 411–8540, Japan; [3]Evolutionary Regeneration Biology Group, RIKEN Center for Developmental Biology, 2–2–3, Minatojima-minamimachi, Chuo-ku, Kobe 650–0047, Japan

In the bilateral animals, the centralized nervous system was found in both clades of deuterostome and protostome (1). It is essential to understand what kinds of genes had existed in the central nervous system (CNS) of the common ancestor between deuterostome and protostome for the evolutionary study of CNS. To answer this question, we took a comparative approach using different species, particularly focusing on one of the lower bilateral animals, planarian (Platyhelminthes, Tricladida) which is known to possess the CNS. We determined the nucleotide sequence of expressed sequence tags (ESTs) from the head portion of planarians, obtaining 3,101 non-redundant EST clones. As a result of homology search, we found that 116 clones had significant similarity to the genes related to the nervous system. Here, we compared these planarian 116 EST clones with all ORFs of the complete genome sequences of human, fruit fry, nematode, showing that over 95% of these 116 nervous system-related genes were commonly shared among these organisms, suggesting the existing of common ancestral CNS at the molecular level. Interestingly, we found that about 30% of planarian nervous system-related genes had homologous sequences in *Arabidopsis* and yeast which do not possess the nervous system. It implies that the origin of nervous system-related genes was much older than the emergence of the nervous system. A similar approach can be taken for the evolutionary studies of MHC.

(S3-6) Co-volution of natural killer cell receptors and MHC class I molecules in higher primates

Peter Parham
Stanford University

Natural killer (NK) cells are lymphocytes of innate immunity that secrete cytokines and kill infected cells at early times in infection. By interaction with dendritic cells NK cells influence the temporal transition from innate to adaptive immunity. NK cells use several different families of receptors to interact with other cells, including ones with specificity for major histocompatibility complex (MHC) class I molecules and MHC class I-like molecules. In mammals two genetic complexes specify MHC class I receptors of NK cells: the natural killer complex (NKC) that encodes receptors with lectin-like structures and the leukocyte receptor complex (LRC) that encodes receptors made up of immunoglobulin-like domains. The MHC the NKC and the LRC are all situated on different chromosomes. As for the MHC class I and class II genes, certain families of NKC and LRC genes are characterized by diversity, genetic polymorphism and relatively rapid rates of evolution. Consequently, their structures and functions differ quite strikingly between species, as was first appreciated from comparison of human with mouse. Whereas the receptors for polymorphic MHC class I molecules in mice are lectin-like Ly49 molecules

encoded by a polymorphic gene family of the NKC, in humans the functionally analogous receptors are killer cell immunoglobulin-like receptors (KIR) encoded by a polymorphic gene family of the LRC. A current working model is that the species divergence reflects strong pressures upon the NK-cell response to infection and the need to maintain functional interactions with rapidly evolving MHC class I ligands.

Further investigation of these questions requires comparison of species that are more closely related than humans and mice. We have therefore begun to compare the human KIR system with its counterpart in species of ape: chimpanzee, bonobo, gorilla and orangutan. And research by others of rhesus monkey also permits comparison with this Old World monkey species. The human KIR gene family is compact and contains three conserved genes: one at each end and one in the middle (KIR2DL4). The regions between the conserved genes vary in the numbers and the types of KIR genes they contain, being favoured sites for gene duplication, deletion and recombination. There are three phylogenetic lineages of human KIR and all of these are represented in each species of ape. Although gene lineages are conserved in the hominoids only a minority of the individual KIR genes are common to species and only one (KIR2DL4) is common to all. The rhesus monkey KIR are more divergent and most comprise a distinct gene lineage. KIR2DL4 is, however, present. The more rapidly evolving KIR genes appear to be those with specificity for polymorphic MHC class I determinants. In particular the system of HLA-C ligands and HLA-C specific KIR, whose functions appear dominant in humans, is of most recent origin and refinement. In orangutans the MHC-C/KIR system is at an intermediate stage of complexity and in rhesus monkey it is absent.

Workshop

(WS1-2) IL-10-producing alloreactive cells and the lack of development of acute GvHD post bone marrow transplant

Lyanne WESTON, Narelle Watson, Andrew Greczy
Tissue Typing Department, Australian Red Cross Blood Service-NSW/ACT

Using a murine model, Hoffmann (2002), demonstrated rescue of recipients from lethal GvHD using freshly isolated CD4+ CD25+ from unprimed mice. These authors also noted that protection was dependent of IL-10 production. Human CD4+ CD24+ regulatory T cells (Treg) isolated from peripheral blood have been shown to suppress alloresponses in the MLR (Jonuleit 2001, Levings 2001). Jonuleit (2001) observed that contrary to murine regulatory T cells, human Treg, produced high levels of IL-10.
The study group of 26 patients from 6 transplant centres received bone marrow transplants from HLA identical sibling donors as treatment for their haematological disorders over the period January 1990 to June 2000. Peripheral Blood Mononuclear Cells (PBMC) from both recipient and donor taken before transplant were cryopreserved and stored. Patients analysed in this study all received a myeloablative treatment regime and the GvHD prophylactic drug treatment after transplantation was Methotrexate and Cyclosporin. Transplanted marrow was not manipulated prior to grafting.
IL-10 cytokine polymorphisms were identified using PCR-SSP technology. The frequency of IL-10-producing cells was determined using an ELISPOT assay adapted specifically for the purpose of detecting alloantigeneic responses.
Analysis of the data presented demonstrated failure to develop acute GvHD after HLA identical sibling bone marrow transplant correlated with an elevated frequency (> 1 per one thousand PBMC) of IL-10-producing T cells present in the donor in response to alloantigen.

These results have significant implications for improving the fate of bone marrow transplant recipients and identify a potential immunotheraputic for the management of patients post transplant.

(WS1-3) LABScreen™ PRA evaluation for HLA class I antibody screening for thai patients awaiting kidney transplant

Pawinee Kupatawintu[1], Sirilak Phiancharoen[1], Araya Tatawathorn[1], Daowan Wiriyapong[1], Oytip Nathalang[2]
[1]National Blood Centre, Thai Red Cross Society , [2]Phramongkutklao College of Medicine

The aim of this study was to compare the detection of HLA class I antibodies by two different techniques, the complement-dependent cytotoxicity (CDC) and the LABScreenTM PRA. The study included 232 serum samples from Thai patients awaiting kidney transplantation. Ninety-three sera (40.09%) were negative and 121 (52.16%) were positive by both techniques. Seven sera (3.02%) were positive only by CDC whereas 11 sera (4.74%) were positive only by LABScreenTM PRA. It was found that LABScreenTM PRA gave a sensitivity of 94.5% while the specificity was 89.4%. Moreover, result discrepancies in 18 serum samples were tested with LABScreenTM PRA. The disagreement results of antibody specificities were due to HLA polymorphism and the different panels used.
It is concluded that LABScreenTM PRA seems to be a sensitive technique for HLA class I PRA testing when compared with CDC. Additionally, since HLA antigen frequencies differ among ethnic groups, the most appropriate panel selection should be considered.

(WS1-4) Polymorphism of microsatellite markers in HLA region and effects on clinical outcome of unrelated hematopoietic stem cell transplantation

Suyun Li[1], H. Kawata[1], M.Ota[2], Y. Morishima[3], T. Naruse[1], H. Inoko[1]
[1]Department of Molecular Life Science Tokai University School of Medicine, Kanagawa, Japan, [2]Department of Legal Medicine, Shinshu University Graduate School of Medicine, Nagano, Japan, [3]Department of Hematology and Cell Therapy, Aichi Cancer Center, Nagoya, Japan.

Abstract: Graft-versus-host disease (GVHD) is one of the most important complications in patients who receive HLA-A, -B, -C, and -DR and -DQ matched hematopoietic stem cell transplantation (HSCT) from unrelated donors. The effect of mismatching for microsatellite existed in HLA region on acute GVHD and overall survival is still unknown. In this study, the polymorphism of eight microsatellites in HLA region were investigated and the effect of the mismatching was analyzed on the clinical outcome of the 100 recipients who received complete HLA matched HSCT through Japan Marrow Donor Program. Low degree of mismatches was observed in DQCARII (4%), MICA (7%), MIB (11%), and C1-3-1 (7%), while, high degree of mismatches was observed in TNFd (27%), TNFa (27%), D6S273 (36%)

and C3-2-11 (56%). There was no association between mismatching of these microsatellites and the incidence of GVHD and the recipient survival. The genetic predisposition to GVHD was also investigated in this study by analyzing each microsatellite allele frequency. The frequency of DQCAR II*200 showed a significant decrease in patients with acute GVHD (grade I–II) in comparison to patients without the same complication ($P < 0.0008$, RR = 0.06). This allele may consider as an independent genetic marker for protection against mild acute GVHD. In spite of, TNFa*113 showed a significant increase in patients with severe GVHD (grade III–IV) in comparison to other recipients. ($P < 0.0084$, RR = 3.89). It may reveal as an inductive genetic marker for acute GVHD. However the results of present study showed no strong association between aforementioned microsatellites and GVHD, further study on other microsatellites is necessary for finding others in linkage disequibrium with minor histcompatibility genes, which are effective candidates for GVHD.

(WS1-5) Short term outcome in high risk renal transplant recipients with newer immunosuppressives

Gurvinder Singh Chopra, P P Varma, S R Gedela, K V Baliga, S K Nema, R Rai
Army Hospital (Research & Referral)

We studied short term graft outcome in high risk rejection group with newer immunosuppressive drugs. Protocol of our center is cyclosporine, azathioprine and prednisolone. Patients receiving second transplant/having high PRA/receiving unrelated/cadaveric kidneys were classified high risk. They were given plasmapheresis/IL-2 receptor blocking agents and MMF instead of azathioprine. Use of ALG/ATG was restricted to cadaveric kidneys/patients whose PRA remained unresponsive to plasmapheresis/steroid resistant rejection. Over the last 16 months 72 transplants were done, of which two grafts were lost due to graft artery thrombosis. 70 patients formed the study group, of which 25 formed the high risk group(GpA) which included 08 re-transplants, 04 high PRA, 04 with cadaveric grafts and 17 were spousal transplants; balance 45 formed the low risk group(GpB). Mean age of GpA was 35.5 years (18–55) with M:F ratio 17:8. Basic immunosuppressive protocol in these patients was CyA, MMF and prednisolone. Four patients with high PRA were given plasmapheresis; four cadaveric graft recipients were given sequential quadruple therapy with ATG, CyA, MMF and prednisolone. Eight re-treansplant recipients received IL-2R blockers in addition. Mean follow-up of these patients was 07 months (1–16). Nine patients (13%) developed acute rejection, (5/25) 20% in GpA and 4/45(9%) in GpB ($p > 0.05$). All rejections could be reversed with steroids except one in each group which required ATG. Mean serum creatinine of GpA and GpB after 07 months follow-up was 1.5 mg/dL and 1.4 mg/dL respectively. The study highlights that with judicious use of newer immunosuppressives, excellent short-term graft survival can be achieved, even in high-risk groups.

(WS1-6) Monitoring of cytokine production as a predictor of acute graft rejection in live related donor (LRD) renal transplantation

Arundhati Panigrahi, Dipankar Bhowmik, Suresh Chand Tiwari, Sada Nand Meheta, Narinder Kumar Mehra
All India Institute of Medical Sciences, New Delhi, India

The present study is aimed at monitoring effector cytokine producing helper T cells by intracellular staining for IFN-γ and IL-4 at pre transplant and on days 7, 15, 30, and 90 following LRD renal transplantation. The pre transplant frequency of IFN-γ(7.55 ± 5.01%, median 6.16) and IL-4 (1.56 ± 1.07% median 1.21) expression was significantly decreased in patients as compared to healthy controls (15.73 ± 10.22, median 13.06, and 1.92 ± 1.73%, median 1.56 respectively, $p = 0.002$). Nine of the fifty four patients who suffered acute rejection episodes had significantly heightened response for IFN-γ(19.16 ± 7.4% median 17.50) but not of IL4 (2.69 ± 1.97%, Median 1.8) at the time of acute rejection as compared to changes in their pre Tx levels (5.68 ± 1.63%, Median 5.20) and also with the non-rejectors (5.97 ± 4.39%, median 4.3 $p = 0.0004$). However, patients with impaired renal function due to causes other than acute rejection (non-immunological causes of dysfunction) had lower levels of IFN-γthan their pre-transplant levels (4.10 ± 2.37%, Median 3.87 vs 9.71 ± 6.02%, Median 7.60) and the differences were significant when compared with that of the acute rejectors ($p = 0.008$). Although the IL-4 expression showed a marginal increase from the pre transplant level (1.15 ± 1.05% vs 0.92 ± 0.47%), this was not significant when compared with that of acute rejectors. our study showed that regular cytokine monitoring in renal transplant patients could provide an effective tool for immunological monitoring of acute rejection and functional assessment of immunosuppression during post transplant follow up.

(WS1-7) Natural Killer Receptor KIR genotype and HLA-C KIR epitope incompatibility in acute GVHD of unrelated bone marrow transplantation.

Toshio Yabe[1], Masako Sato-Takeda[1,2], Katsushi Tokunaga[2], Kenji Tadokoro[1], Yasuo Morishima[3] and Masahiro Satake[1]
[1]Tokyo Metropolitan Red Cross Blood Center, Tokyo, Japan, [2]Department of Human Genetics, The University of Tokyo, Japan, [3]Aichi Cancer Center, Nagoya , Japan

Killer Ig-like receptor (KIR) is expressed on NK cells and recognizes HLA class I antigens to regulate cytotoxicity or cytokine secretions. To evaluate the effects of KIR on transplantations, KIR epitope and KIR genotype of recipient-donor pairs from unrelated bone marrow transplantation through Japan Marrow Donor Program (JMDP) have been analyzed. We determined the HLA-C KIR epitope (G1 and G2) compatibility between the recipients and donors. Frequencies of acute GVHD is higher in KIR epitope mismatched cases than in matched cases when the mismatch is GVH direction for the inhibitory receptor. We analyzed genotype of 14 KIR genes of the recipient-donor pairs by the PCR-SSP method. In GVH direction mismatch (recipientG2G2-donorG1G2), all donor examined has the inhibitory KIR gene for G1 and G2. There are no mismatch cases between inhibitory KIR genotype of the donor and corresponding KIR epitope of the recipient, suggesting the selective expression of inhibitory KIR on the cell surface of the donor is responsible for the acute GVHD. On the contrary, high frequency of the acute GVHD was observed when the donor has the activating KIR gene for G2 (KIR2DS2). In the case of HVG direction mismatch (recipientG1G2-donorG2G2), GVHD frequency is not high even when the donor has the KIR2DS2. These results indicated that activating KIR genotype and the corresponding KIR epitope incompatibility has effects on the acute GVHD. Data also suggested the involvement of NK cells in GVHD and the importance of the KIR genotype and KIR epitope matching in unrelated bone marrow transplantations.

(WS2-1) Abundant heterogeneity of HLA expression and aneuploidy in head and neck squamous cell carcinomas.

GJPA Koene, J Reinders, D de Santis, PJ Slootweg, RA de Weger, MGJ Tilanus.
UMC Utrecht, Dept. of Pathology, the Netherlands.

HLA has a pivotal function in the immune system. Presentation of endogenous derived peptides by HLA class I and B2m offers the immune system a mechanism to monitor intracellular events. Infection by bacteria or viruses and tumorgenesis alters the peptide pool presented on the cell surface. This may lead to a cytotoxic T-cell response by which non-healthy cells can be eradicated. In tumors, loss of HLA cell surface expression is frequently observed. The reduced HLA expression affects the possibility to detect non-healthy cells (e.g. cancer cells) and is therefore a mechanisms by which tumor cells can circumvent eradication by cytotoxic T-cells. In tumors, HLA and B2m gene loss is frequently studied to characterize HLA loss phenotypes. Microsatellite markers are widely used to study loss of heterozygosity (LOH). We studied LOH of the B2m gene in 53 head and neck squamous cell carcinoma (HNSCC) using an expanded set of microsatellite markers compared to described in literature and combined the results with immunohistochemical staining of B2m. Four HNSCC had LOH and showed positive or overexpression of B2m. Since LOH can not distinguish loss from amplification we determined the copy number of chromosome 15 (where B2m is located) using centromere 15 fluorescent in situ hybridization (FISH) in 11 HNSCC including the 4 with LOH and positive B2m expression. Centromeric chromosome 1 FISH was used as control. Summarized, chromosome 15 as well as chromosome 1 was affected in all 11 HNSCC. The majority of the tumors were heterogeneous for the chromosome 15 and 1 copy number. Amongst others, the four HNSCC with LOH and B2m expression showed amplification of chromosome 15 instead of loss. It can be concluded that B2m microsatellite LOH does not reflect the B2m gene copy number in these HNSCC. Moreover, LOH does not only detect loss but also amplification of a genomic region. Preliminary results of ongoing studies on LOH of chromosome 6 in relation to HLA expression and aneuploidy display similar characteristics as described for B2m.

References:

— Koene G, Van der Ven K, Verdaasdonk M, Slootweg P, De Weger R, Tilanus M. A variety of HLA phenotypes in HNSCC patients identified with the workshop antibodies as defined in the HLA and Cancer component. IHWG 13th workshop proceedings, in press.
— Koene G, Coenen S, Verdaasdonk M, De Weger R, Slootweg P, Tilanus M. The value of loss of heterozygosity of STR markers to define expression variants of the B2M gene. IHWG 13th workshop proceedings, in press.
— Koene G, Arts Y, Van der Ven K, Rozemuller E, Slootweg P, De Weger R, Tilanus M. Fluorescent in situ hybridization and loss of heterozygosity B2-microglobulin in Head and Neck Squamous Cell Carcinomas to define the B2 microglobulin gene copy number. Submitted for publication.

(WS2-3) Pathogenecity and the involvement of HLA-B27 subtypes in Spondyloarthropathy of North Eastern Indian population

Bikash Mitra[1], M. Debnath[1], C. R. Gupta[2], C. R. Nayak[3] and T. K. Chaudhuri[1]
[1]Cellular Immunology Laboratory, Deptt. Of Zoology, University of North Bengal, Siliguri-734430, W.B., India, [2]Deptt. of Physical Medicine and Rehabilitation, North Bengal Medical College & Hospital, Siliguri-734430, W.B., India, [3]Computer Centre, University of North Bengal, Siliguri-734430, W.B., India,

Spondyloarthropathy represent a complex heterogenous group of genetic disorders that share a number of clinical, radiographic, genetic features and are quite distinct from rheumatoid arthritis. HLA-B27 is a serologic specificity that encompasses 25 different alleles that encode 23 different product (HLA-B*2701 to HLA-B*2723) which are associated with diseases. Ankylosing spondylitis and HLA-B27 antigenic positivity, is one of the strongest association seen between a disease and a Class-I antigen.
The genetic subtypes and susceptibility to development of disease vary in different ethnic population which may be result of genetic and geographic origins. In present investigation unrelated patients with spondyloarthropathy (Indian-born Bengali population = 52) has been considered to investigate which of them are and are not associated with AS and related SpA, and whether certain subtypes show any preferential association with some of the clinical features or forms of these diseases among the said population.
Serological typing was performed in all the 52 cases after assessing several clinical criteria like extra articular features, radiological findings, determination of RF, ANA, ENA, ESR, CBC, C-reactive protein, arthroscopy etc.. PCR based high resolution molecular typing was conducted on 19 serologically HLA-B27 positive patients, 8 of them showed the presence of B27 gene. From molecular typing results, we observed a significant preferential association (75%) of B*2752/53 gene in this population. Significant findings have also arisen from the study: B*2704, B*2705, B*2708.
The presence of HLA-B27 gene may serve as an aid to diagnosis or prognosis for clinicians though how it contributes disease, its role remains enigmatic.

(WS2-4) Etiologic considerations of major histocompatibility linked genes in paranoid psychosis: a possible relationship between delusional disorders and paranoid schizophrenia.

Monojit Debnath[1], N. K. Bera[2], S. K. Das[2], C. R. Nayak[3] and T. K. Chaudhuri[1]
[1]Cellular Immunology Laboratory, Department of Zoology, University of North Bengal, Siliguri-734430, W. B., India., [2]Department of Psychiatry, North Bengal Medical College & Hospital, Siliguri, W. B. India., [3]Computer Centre, University of North Bengal, Siliguri-734430, W. B., India.,

Paranoid symptoms are among the most dramatic and serious disturbances in psychiatry and medicine. Delusional disorder, the contemporary conceptualization of paranoia, is an uncommon condition characterized by the presence of one or more nonbizarre delusions and the relative absence of associated psychopathology. Paranoid (delusional) disorders are usually thought to overlap with schizophrenia disorders, which is characterized by the presence of prominent delusions or auditory hallucinations and perceptual disturbances. Delusional disorder is probably heterogeneous group of illness and occurs in a variety of psychiatric and medical conditions. Etiology of delusional disorder is poorly understood. Recently the involvement of genetic factors and familial aggregation of the disease have been suspected. The main purpose of the present study was to investigate the role of HLA Class-I antigens in the patients with delusional disorder and Paranoid Schizophrenia. A total number of 80 unrelated patients with delusional disorder and 30 unrelated patients with paranoid schizophrenia along with 80 healthy individuals considered for the study were selected from the Indian born Bengali population. The frequency of HLA Class-I genes have been studied by PCR-SSP typing. Our results suggest a strong association of HLA-A3 antigen (60% vs. 15%) with delusional disorder and paranoid schizophrenia. (53.33% vs. 15%). From the result it can be interpreted that HLA-linked genes may have the role to increase susceptibility to paranoid disorders. Also delusional disorder may have a causal link with paranoid schizophrenia and/or delusional disorder may be one of the possible sources of the heterogeneity within "schizophrenia ".

(WS2-5) Comparison of HLA-B51 haplotypes and microsatellite polymorphisms in Bechet's disease of multiple populations

Yuko Takemoto[1], Taeko Naruse[2], Yumiko Shindo[3], Norihiko Ito[4], Masao Ota[5], Nobuhisa Mizuki[4], Shigeaki Ohno[6], Hidetoshi Inoko[4]

[1]Hokkaido University School of Medicine, [2]Tokai University School of Medicine, [3]Juno Clinic, [4]Yokohama City Univercity School of Medicine, [5]Shinshu University School of Medicine, [6]Hokkaido University Graduated School of Medicine

Bechet's disease (BD) is a chronic multifactorial disorder, with genetic and environmental factors. The distribution of BD is mainly around the Mediterranean Sea, Middle East and Far East. Previous studies have shown that BD has an primary association with HLA-B*51011 in many different ethnic groups, suggesting that HLAB*51011 determines the susceptibility to BD as one of major risk factors. However, HLA class I haplotypes are composed of not only the HLA-B gene but also of many functional and unfunctional genes which are located in the HLA class I region. Recent studies showed that microsatellite markers, such as MICA-TM, MIB and C1-4-1, have significant associations with BD. The aim of this study was to clarify the association of HLA haplotypes and microsatellite polymorphisms, and to make phylogenetic analysis on HLA-51 by making a comparison of HLA haplotypes and microsatellite polymorphisms in Turkish, Iranian and Japanese Bechet's patients to trace an ethnic origin of BD. HLA-A and -B haplotype analysis, investigation of microsatellite markers dispersed throughout the HLA class I region and direct sequencing of the HLA-B gene were performed. As a result, unique linkage among HLA haplotypes, microsatellite polymorphisms around HLA-B and single nucleotide polymorphisms (SNPs) of HLA-B could be found in BD.

(WS2-7) Human leukocyte antigens class I and II, In Iranian patients with common variable immunodeficiency

Amirzargar A[1], aghamohammadi A[2], Moein M[2], Poorpak Z[2], Khosravi F[1], Niknam M[1], Ghragozlo M[2], Farhodi A[2], Movahedi M[2], Ebrahimi F[2], Nikbin B[1]

[1]Dept of Immunology, Immunogenetic Laboratory and [2]Dept of clinical immunology and allergy, school of medicine, Tehran university of medical sciences, Tehran, Iran

Background: Common variable immunodeficiency (CVID) is a heterogeneous group of primary immunodeficiency disease characterized by hypo gamma-globulinemia and variable or low numbers of circulating B cells. An association between CVID and abnormally high frequency of an HLA haplotype including HLA-A1, HLA-B8, HLADR3 (referred to as haplotype 1) and another one including HLA-A29, HLA-B44, HLA-DR7 (Referred to as haplotype 2) has been previously documented. In the present study, we have attempted to find an association between susceptibility to CVID and HLA Class I and Class II antigens in Iranian population. Subjects and method: 20 Iranian patients with CVID (mean age 17, range 3–28 years; 12 males and 8 females), and 100 healthy controls were studied. we used PCR based HLA typing for Class II and micro-lymphocytotoxicity technique for Class I typing. results: Out of 20 CVID subjects typed for HLA-DR, DQA1 and DQB1 specificities, the most frequent alleles in the patients population were DRB1*1303 (8.3% vs 0.5%, od = 18.09, Pc = 0.01), HLA-DRB1*04 (16.6% vs 10.5%), DQB*10302 (12.9%vs 5.5%), DQB*1020 (25.8% VS19%) and DQA1*0500 (49.9% VS 39%). The least frequents alleles in the patients population were HLADRB1*15 (5.5% VS12) AND dqb1*05011 (6,4% vs 22% od = 0.24, P = 0.07). We could not find any significant association between HLA-Class I previously reported to be associated with CVID patients.' Conclusion: Our results suggest that alleles in the HLA-DRB, DQB1 and DQA1 loci may contribute to susceptibility to Iranian patients with CVID.

(WS2-8) Genes influencing innate and acquired immunity in type 1 diabetes

Carani B Sanjeevi[1], Liene Nikitina-Zake[1], Raja Rajalingam[2]

[1]Karolinska Institute, [2]UCLA Immunogenetics Center, UCLA, USA

T1DM is very common in Sweden and is positively associated with HLA class II genes. Approximately 89% of the newly diagnosed patients carry the high-risk HLA-DR4-DQ8 and DR3-DQ2. The remaining 11% develop T1DM without them. This can be due to involvement of other genes and environmental factors. NK cells of the innate immune system are important in anti-viral and anti-tumor immunity. They are implicated in the etiology of autoimmune T1DM. Human NK cells express Killer Immunoglobulin-like receptors (KIR) which belong to polymorphic multigene family in chromosome 19q3.4. They modulate NK cell response by interacting with HLA class I. In addition polymorphic MICA in HLA class I interacts with non-polymorphic NKG2D receptor on NK cells. We have studied, in addition to HLA-DR and DQ, genes of the innate immune system MICA and KIR in Latvian patients (n = 98) and controls (n = 100) with T1DM. They were genotyped using standard PCR based typing methods. MICA allele 5 to be positively associated with T1DM. KIR2DL2 and KIR2DS2 were both positively associated. Combined association of MICA5 and KIR2DL2 gave an odds ratio (OR) of 26.7. However

the combined risk of KIR2DL2 and HLA class II genes, HLA-DR3 (OR = 73.4), DR4 (OR = 66.8) and DR3 and DR4 (OR = 88.3), were higher. The maximum risk was when KIR2DL2, MICA5 and DR3/DR4 were in combination.
In conclusion, our results suggest that a balance between innate and acquired immunity is important and an imbalance could lead to T1DM.

(WS2-9) Molecular basis of HLA and disease susceptibility to tuberculosis

Narinder Kumar Mehra[1], Balamurugan Arumugam[1], Surendra K Sharma[2]
[1]All India Institute of Medical Sciences, [2]Dept of Medicine, AIIMS, Ansari Nagar, New Delhi

Structural and functional correlation of MHC-peptide interaction has led to newer understanding of the role of susceptibility gene(s) in diseases. To demonstrate the susceptible/resistant peptide-binding motif in patients with pulmonary (both drug sensitive and resistant) and extra-pulmonary TB, we analyzed HLA class I specificities based on the supertype classification and amino acid variations of class II peptide-binding pockets '1' & '4' Of the nine HLA-A and-B supertypes, A3-like and A1-like supertypes were inversely associated in patients with pulmonary as well as miliary/disseminated TB. These two disease associated supertypes share similar peptide binding motif except 'Pocket F' of the HLA class I molecules. In addition, the HLA-Cw specificities that are major ligands for killer cell Ig-like receptors (both KIR2DL1, DL2) were encountered more frequently among TB patients suggesting a possible inhibition of NK cell activity against the infected target cells. Similarly, sequence analysis of HLA-DRB1 alleles particularly in the 'pocket 4' that have a dual role of peptide binding as well as T cell recognition, showed positive association of negatively charged ($D^{70}E^{71}A^{74}$) and neutral charged ($Q^{70}A^{71}A^{74}$) 'pocket 4' motif with tuberculosis. Further, simultaneous evaluation of 'pocket 4' and V/G dimorphism at position β86 of 'pocket 1' revealed significant over representation of valine bearing alleles among patients with extensive lung lesions than those with minimal disease. These results underline the importance of specific peptide-binding pockets in the MHC molecules and ligand specificity of the KIR receptors in governing susceptibility and disease severity fallowing M. tuberculosis infection.

(WS2-10) Variations in cytokine genes influence mycobacterial disease profiles

Gurvinder Kaur, Chowphi Chen Rapthap, Narinder Mehra
Dept Transplant Immunol & Immunogenet. All India Institute of Medical Sciences

With the recent corollary of knowledge gained on Th1/Th2 paradigm, cytokine gene polymorphism, interindividual differences have been discovered that influence not only the gene expression but also susceptibility to and clinical seveity of disease. This study has evaluated polymorphism in cytokine genes (IL1a, IL1b, IL1R, IL1RA, IL4RA, IL12, gIFN, TGFb, TNFa, IL2, IL4, IL6 and IL10) using PCR-SSP technique (developed by Dr J Mytilineos) among tuberculosis patients from India, Greece (collected by Dr P Pratsidou-Gertsi) and leprosy patients from India and Korea (collected by Dr Gue Tae Chae). Significant observations included increased frequency of (i) IL 4 haplotype TCC in Indian LL, (ii) IL1RA mspa 111100 C in Indian TL, (iii) IFNγUTR 5644 AA in Indian TL (iv) IFNγUTR 5644 A, IL4-1098 G, IL2-330 TT, and IL10-819 CT in Indian TB, (v) IFNγUTR 5644 T, TGFb1 CG and TGFβ1 cdn 10 CC in Greek TB, (vi) IL-511 C, IL 4–33 C and IL4-33 CT among the Korean TL, (vii) IL4-33 C also in Korean LL, (viii) IL1β-511 CC, IL1RA mspa 111100 CC, IL4-590 CT in Korean TL, and (ix) IL6-174 CG amongst Korean LL patients. Likewise associations with decreased frequencies of (i) IL4 GCC in Indian TL, (ii) IL1RA mspa 111100 C in Indian LL, (iii) IL1RA mspa 111100 CT, IL4-33 TT in Korean TL, (iv) IL4-33 CT in Korean TL, (v) TGF β1 cdn 10 CT and IFNγUTR 5644 AA in Greek TB were also observed.

(WS3-3) Allelic and haplotypic diversity of HLA-A, -B, -Cw, -DRB1, and -DQB1 genes in the Korean population

Kyung Wha Lee[1], Do Hoon Oh[1], Chaeyoung Lee[2], Soo Young Yang[3]
[1]Hallym Institute for Genome Application, Hallym University, [2]Institute of Environment and Life Science, Korea, [3]Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, USA

Development of high level of HLA typing technology exposes the unique pattern of HLA allele and haplotype frequencies in each population. In this study, genotypes of HLA-A, -B, -Cw, -DRB1, -DQA1 and -DQB1 loci were analyzed in 485 apparently unrelated healthy individuals of Koreans. A total of 20 HLA-A, 43 HLA-B, 21 HLA-C, 31 HLA-DRB1, and 14 HLA-DQB1 alleles were identified. Eleven alleles (A*0201, A*1101, A*2402, A*3303, B*1501, Cw*0102, Cw*0302, Cw*0303, DQB1*0301, DQB1*0302, DQB1*03032) appeared to be major alleles exhibiting more than 10% in the population. In each serologic group, less than 3 alleles exhibited only with several exceptions (A2, B62, DR4, DR14, DQ6). Multiple locus haplotypes estimated by maximum likelihood method revealed 51 A-C, 43 C-B, 52 B-DRB1, 34 DRB1-DQB1, 48 A-C-B, 42 C-B-DRB1, 46 B-DRB1-DQB1, and 30 A-C-B-DRB1-DQB1 haplotypes with the frequencies of more than 0.5%. Eighteen of DRB1-DQB1 and 16 of B-C haplotypes exhibit tight associations (RLD > 0.95). The five

locus haplotypes defined by high level of DNA typing correlated well with previously identified serology-based haplotypes in the population. The five most frequent haplotypes are: A*3303-C*1403-B*4403-DRB1*1302-DQB1*0604 (4.2%), A*3303-C*0701-B*4403-DRB1*0701-DQB1*02 (3.0%), A*3303-C*0302-B*5801-DRB1*1302-DQB1*0609 (3.0%), A*2402-C*0702-B*0702-DRB1*0101-DQB1*0501 (2.9%), and A*3001-C*0602-B*1302-DRB1*0701-DQB1*02 (2.7%). Several sets of allele level 5-locus haplotypes that has impact on unrelated hematopoietic stem cell transplantation but could not be discriminated by routine HLA-A, B, DR low level typing, are mostly originated from allelic diversity of A2, A26, B61, and DR4 serologic groups. Information obtained in this study will be useful in medical and forensic area as well as in anthropology in the population.

(WS3-4) Genomic diversity of HLA in North Indians characterizes higher combinatorial variety than allelic diversity.

Ritika Jaini, Gurvinder Kaur, Narinder Mehra
All India Institute of Medical Sciences, New Delhi, India

The North Indian population displays extensive diversity alongwith novel alleles and unique haplotypic combinations in its HLA repertoire. Allelic data indicate an important role of microbial pressure and possible oriental influence in generation of these novel alleles and in shaping this repertoire. Extensive heterogeneity in the haplotype repertoire is indicated by the statistic that 60% of HLA-A-B haplotypes are observed only once in the population while only 13% are represented more than 4 times. Similarly 41% of HLA-DRB1-DQA1-DQB1 haplotypes occur only once in the population while 30% are represented more than 4 times in the cohort studied. Highest linkage disequilibrium is observed for the ancestral haplotype AH8.2, HLA-A*26-B*08-DRB1*03 (%HF = 5.1), which is unique to the Indian population. In addition to representation of typical Caucasians and Oriental haplotypes, a large number of unique haplotypes, particularly in the DR2 family were also encountered in this population.
On the other hand, the alleleic repertoire revealed comparatively lower heterogeneity with 7–14 alleles, at each of the classical class I and II loci, making up more than 50% of the allelic conjugate of the population with an average homozygosity of 11%–30%. The HLA-C locus however revealed much higher homozygosity (49%) with only 4 alleles collectively constituting greater than 50% phenotypes in the population. These data indicate a much higher combinatorial heterogeneity in the North Indians compared to the alleleic diversity, possibly due to extensive recombinations owing to genetic admixture and subsequent selection and may have important implications on immunobiology and immunotherapy trials in this population.

(WS3-5) MICA polymorphisms in Pacific Islands populations

Zlatibor Velickovic, Heather Dunckley
Australian Red Cross Blood Service

The MICA gene is a homologue of the MHC class I genes located approximately 40 kb centromeric to the HLA-B locus. The gene encodes cell surface molecules with a1, a2, and a3 extracellular domains and a transmembrane domain. The expression of MICA gene is largely confined to epithelial cells. MICA peptides are ligands of the NKG2D receptor expressed on NK cells, CD8+ ab T cells and gd T cells, and as such are part of an innate immune response. It has been shown that the MICA gene is highly polymorphic with more then 50 alleles identified to date. Similar to HLA genes, allele frequency distribution of the MICA gene varies between different ethnic groups. We have identified MICA allele frequencies in four Polynesian populations: Cook Islands, Samoa, Tokelau and Tonga using sequencing based typing. We have found a limited diversity of MICA alleles in Polynesians with a few predominant alleles. Correlation with allele frequency distribution in other populations and MICA-HLA haplotypic associations are discussed.

(WS3-6) Sequence analysis of the ATP6G and NFKBIL1 genes in four HLA haplotypes commonly seen in the Ami tribe.

Chen-Chung Chu, Zong-Xian Chen, Jean Alain Trejaut, Marie Lin
Mackay Memorial Hospital

The Ami tribe, one of ten indigenous tribes in Taiwan, has very high frequencies of HLA-DRB1*0404 and 0405 (gf = 0.35 and 0.21, respectively). Although these two alleles may be associated with the development of rheumatoid arthritis (RA, RA is rarely seen among the Ami tribe. It is believed that others genetic and environmental factors may contribute to the disease development. Recently, a second susceptibility gene associated to rheumatoid arthritis was suggested to be present in a 70 kb segment, telomeric to the TNF gene region in the HLA class III region, which including NFKBIL, ATP6G, BAT1 and MICB genes. In this study, we propose to survey the genetic polymorphism of the ATP6G and NFKBIL1 genes.
Direct sequencing of long-range PCR products were performed in four HLA-A-B-DRB1 homozygous individuals with the following

haplotypes: A*2402-B*4001-DRB1*0404, A*2402-B*4001-DRB1*0405, A*3401-B*5601-DRB1*1502 and A*2402-B*4801-DRB1*0404. Four long-range PCR products were amplified from each individual and were sequenced in both directions using 166 sequencing primers.
In this report two long-range PCR products including all predicted exon regions of ATP6G and NFKBIL1 genes were sequenced and compared to the NCBI reference sequence. There was no sign of heterozigosity, and among a 3 bp deletion, a 4 bp insertion, two 1bp insertion and 10, 9, 15 and 8 substitutions seen respectively in the four individuals, only one synonymous substitution (C31588548T) belonged to the coding region. C31588548T was shared by haplotypes B*5601-DRB1*1502 and B*4801-DRB1*0404. Further analysis are still being performed, and any new outcomes will be reported.

(WS3-7) Microsatellites in the HLA region, Association with HLA alleles and HLA haplotypes

P A Gourraud[1], C. Bétard[2], C. Raffoux[3], A Cambon-Thomsen[1]
[1]INSERM U558 Toulouse France, [2]National Centre for Genotyping, Evry France [3]France Greffe de Mo lle Paris, France; and partners from EU project MADO www.euromado.org

More than 250 highly polymorphic Microsatellites markers exist in the HLA region. Some of them are known to be in linkage disequilibrium (LD) with HLA. Their study allow to refine the analysis of HLA-region LD structure which is a very important issue in the selection of appropriate markers to use in studies of MHC molecular genetics and disease association.

Population and Methods: We present here data on 2183 unrelated haematopoietic stem cell donors already typed for HLA-A HLA-B and HLA-DR and typed for 16 Microsatellites. Identification of HLA association (Pair wise linkage disequilibrium D, Sensitivity Se, Specificity Sp, Odds Ratio, Hellinger measure) with Microsatellites has been studied using haplotype frequency estimation by maximum likelihood implemented in Expectation Maximisation algorithm.

Results: Best predictions have Se values around 80%, Sp around 99% an standardised measure of D 0,8. It allows the identification of multi point association between HLA and Microsatellites For example :*29-44-07 and TNFd-Mib-C244-D6S265-MOGc-D6S2222; *02-44-04 and DQIV-DQcar-D6S273-TNFa; *03-07-15 and TNFd-Mib-C244-D6S265-MOGc; *03-35-01 and DQIV-Dqcar-D6S273-TNFa-TNFd-MIB-C244-D6S265-MOGc; *23-44-07 and TNFa-TNFd-MIB-C244-D6S265-MOGc; *01-57-07 and MIB-C244-D6S265-MOGc; *02-60-13 and D6S273-TNFa-TNFd-MIB-C244; *30-13-07 and TNFd-Mib-C244-D6S265-MOGc

Discussion: Such results are only preliminary results. Analysis on 6000 thousands individuals would give more accurate association and would allow better identification of rarer HLA alleles and/or haplotypes with Microsatellites.

(WS3-8) Analysis of sequence variations of the MHC class II gene in genus spheniscus.

Eri F Kikkawa[1], Taeko K Naruse[1], Michio Fukuda[2], Masanori Kurita[3], Koichi Murata[4], Rory P Wilson[5], Yvon LeMaho[6], Michio Tsuda[1], Tomi T Tsuda[7], Hidetoshi Inoko[1]
[1]Tokai University School of Medicine, [2]Tokyo Sea Life Park, [3]Port of Nagoya Public Aquarium, [4]Dept of Wildlife Science Nihon University, [5]I fM/Kiel, Germany, [6]CEPE/CNRS, France, [7]Dept of Human Life Science

Penguins known to be branched from diving oceanic birds about 47MYA ago have been classified into six genera which consist of 16 species at present. In the present study, we have cloned and analyzed the MHC class II DRB1 (like) gene polymorphism of Humboldt penguins (S.humboldti) as the first step to identify generic variations in the penguin species and to estimate systematically the evolution and specialization of Birds in the context of penguin polymorphism.
Genomic DNAs of 20 wild or captive Humboldt penguins were amplified with a set of primers designed for PCR amplification of a 1.1 kb PCR products containing the exon 2, intron 2 and exon 3 segments of the DRB1 gene Several subclones carrying PCR products were determined for their nucleotide sequences. The thus obtained sequences in exon 2 had at least 5 different alleles with 14 polymorphic sites in the amino acid sequences and 26 polymorphic sites in the nucleotide sequences. Homology search showed 85% identity with DRB1 of Gallinago medio and 90% with that of Gallus gallus in exon 2, 91% with that Anas platyrhynchos and 88% with that Gallus gallus in exon 3. However, the intron 2 sequence appeared to be specific for penguin because low nucleotide identity could be observed in comparison among other birds.
Interestingly, unique nucleotide sequences specific for Humboldt penguins could be found, suggesting a possibility that each genera or species of penguins has acquired each specific sequence in the process of their evolution.

Best Abstracts

(Best Abstract Best-1) Effect of Nef-mediated HLA class I down-regulation on ability of HIV-1-specific CD8+ T cells to suppress HIV-1 replication

Mamoru Fujiwara[1], Hiroko Tomiyama[2], Masafumi Takiguchi[2]
[1]Division of Viral Immunology, Center for AIDS Research, Kumamoto University, [2]Division of Viral Immunology, Center for AIDS Rese

HIV-1-specific cytotoxic T lymphocytes (CTLs) are induced in acute and chronic phases of HIV-1 infection. However, CTLs cannot completely eliminate HIV-1 virus, and HIV-1-seropositive individuals develop AIDS if they are not treated with anti-retrovirus therapy. HIV-1Nef-mediated down-regulation of HLA-class I on the surface of HIV-1-infected cells is one of mechanisms that allow HIV-1 to evade CTLs. Previous studies showed that HIV-1-infected cells are hardly killed by HIV-1-specific CTLs due to Nef-mediated down-regulation of HLA-class I. In the present study, we investigated the ability of HLA-A*3303 CTL clones to inhibit HIV-1 replication by using a Nef-positive HIV-1 strain (NL-432) and a Nef-mutant HIV-1 strain (NL-M20A) that expresses a Nef protein which does not induce down-regulation of HLA class I molecules but is otherwise functional. Primary CD4+ T cells were incubated with the HIV-1 strains and co-cultured with five HIV-1-specific HLA-A*3303 CTL clones. The ability of HLA-A*3303 CTL clones to inhibit HIV-1 replication was investigated by measuring p24 expression in CD4+ cells by flow cytometry and p24 proteins in culture supernatant by ELISA. The results showed HIV-1-specific CTL clones suppressed replication of NL-M20A (about 70% suppression), while these CTL clones could partially suppress replication of NL-432 (10–40% suppression). In contrast, they failed to suppressed the replication of both viruses in HLA-mismatched cells infected with the viruses. These results suggest that HIV-1-specific CTLs partially recognize HIV-1 epitopes presented by HLA-A*3303 nevertheless the surface expression of HLA class I molecules are down-regulated by Nef.

(Best Abstract Best-2) Identification of HIV-1 CD8 T cell epitopes presented by HLA-A*2601

Manami Satoh[1], Yuji Takamiya[1], Shinichi Oka[2], Katsushi Tokunaga[3], Masafumi Takiguchi[1]
[1]Kumamoto Univercity Center for AIDS research, [2]AIDS Clinical Center, International Medical Center, [3]Department of Human Genetics

Since HLA-A*26 is one of the most common alleles in Asia where approximately 20% people have this allele, identification of HIV-1CD8 T cell epitopes presented by HLA-A*26 is necessary for studies of immunopathogenesis in AIDS and vaccine development in Asian. We therefore tried to identify HIV-1CD8 T cell epitopes presented by HLA-A*2601. We employed reverse immunogenetics to identify the HIV-1 epitopes presented by HLA-A*2601. We selected 124 peptides that consist of 8-mer to 11-mer carrying V, T, I, F or L at P2 and Y or F at the C-terminus from HIV-1 SF2 sequence, and then synthesized these peptides. The ability of the peptides to bind the HLA-A*2601 molecules was tested by a HLA-A*2601 stabilization assay using RMA-S-A*2601 cells. 27 peptides bound to HLA-A*2601. The ability of these HLA-A*2601-binding peptides to induce peptide-specific CD8 T cells was tested by stimulating PBL from HIV-1-infected individuals having HLA-A*2601. Stimulated PBL was cultured for approximately 2 weeks and then the ability of the cultured cells to produce IFN-γ was tested by stimulation with C1R-A*2601 cells pulsed with the peptides. 5 of 27 HLA-A*2601-binding peptides induced peptide-specific CD8 T cells. Of CD8 T cells specific for 5 peptides, those specific for 3 peptides showed IFN-γ production after stimulation with C1R-A*2601 cells infected with HIV-1 recombinant vaccinia virus. These results indicate that these three peptides are HIV-1 CD8 T cell epitopes presented by HLA-A*2601. This study will contribute to studies of AIDS immunopathogenesis and vaccine development.

(Best Abstract Best-3) Expression of non-classical MHC class I molecules in the neuronal cells of central nervous system

Asako Ando[1], Atsuko Shigenari[1], Shinichi Yoshimura[1], Tetsushi Yamagata[1], Kunio Tsujimura[2], Yuichi Obata[3], Tetsuo Yamamori[4], Hidetoshi Inoko[1]
[1]Dept. of Molec. Life Sci., Tokai Univ. Sch. Med., [2]Div. Immunol. Aichi Cancer Center Res. Inst., [3]Bioresource, RIKEN, [4]Lab. for Spec. Mech. 1, Nat. Inst. for Basic Biol.

In order to elucidate a role of MHC molecules in the central nervous system (CNS), we have examined the expression of classical (Ia) and non-classical (Ib) class I MHC molecules in the CNS of C57BL/6 mice by using RT-PCR and immuno-histochemistry. In Ia molecules, although *H2-K* and *H2-D* transcripts were found by RT-PCR analysis, these proteins were mainly localized in endothelial cells and choroid plexus cells by immuno-histochemical study using an anti-Ia antibody. The staining of neuronal cells were faint or weak, and the special distribution of Ia proteins were not recognized in neuronal cells. In contrast, Ib proteins were localized mainly in neuronal cells. The strong

staining of a Qa-1 protein was observed in the nerve cells localized in the 5 and 6th layers of cerebral cortex, hippocampus and the tuberal nucleus. The immuno-staining with an anti-TL antibody revealed that the majority of the nerve cells in cerebrum were positively stained, and the strong staining was observed especially on the nerve cells in the paraventricular nucleus thalamus, and Purkinje's cells in cerebellum. However, *TL* mRNA encoded by *T3* or *T18* gene, was not found. Among the *T*-locus genes, *Qa-1* and *T22* transcripts were confirmed by sequence analysis of RT-PCR products. The specific localization of Qa-1 and some Ib molecules cross reacted with an anti-TL antibody, may suggest an important role of Ib molecules in the remodeling and plasticity of connections of nerve cells or in some immune response in the CNS.

(Best Abstract Best-4) Detection of HLA-F expression in normal and tumor tissues — Collaboration of HLA-E, -F and -G —

Noriko Sageshima[1], Ni Lee[2], Takanori Shobu[1], Akinori Miki[2], Katsunori Yane[3], Saiho Ko[4], Hideaki Kondo[5], Motoko Omura[1], Katsuhiko Hatake[1], Daniel Edward Geraghty[2], Akiko Ishitani[1]

[1]Department of Legal Medicine, Nara Medical University, [2]Fred Hutchinson Cancer Research Center, [3]Department of Otorhinolaryngology, Nara Medical Un, [4]First department of Surgery, Nara Medical Universi, [5]Department of Urology, Nara Medical University

We have investigated the expression of HLA-E, -F and -G to understand their function using monoclonal antibodies we had developed. HLA-G expression is restricted in placenta, which is fetal-maternal border. HLA-E shows ubiquitous expression including placenta. But the expression of HLA-F has not clarified yet. We investigated the surface expression of HLA-F on many kinds of cell lines by FACS and many kinds of normal tissues by immunohistochemical staining and failed to detect the expression in all of them. But when we tested maternal decidua tissue, surprisingly the extravillous trophoblasts deeply invaded into the maternal decidua, expressed HLA-F strongly on the cell surface. On the extravillous trophoblasts, all three nonclassical HLA class I antigens are expressed. This may suggest that they function with associating each other during pregnancy. To understand HLA-F function, we investigated the expression of HLA-F on the human tumor tissues including the expression of HLA-E and -G.

We investigated the HLA-F expression of tumor tissues and leukemic cells by immunohistochemical staining or FACScan, respectively. Although most of tumor tissues and leukemic cells tested showed no expression of HLA-G and HLA-F, one of advanced carcinoma and some of leukemic cells showed HLA-F expression but not HLA-G expression.

It has been thought that HLA-F protein can express on the cell surface. Here, we showed the surface expression of the HLA-F protein on the leukemic cells and tumor. It is suggested that HLA-F may have specific functions and work with HLA-E and -G for fetal-maternal immunoreaction.

(Best Abstract Best-5) EVOLUTION OF THE KIR REGION IN THE GREAT APES

Lisbeth Ann Guethlein, Laurent Abi-Rached, Laura Flodin, Peter Parham

Stanford University

The killer cell immunoglobulin-like receptors (KIRs) comprise a highly polymorphic, rapidly evolving gene family. To aid in understanding the evolutionary dynamics shaping this family, we have studied the genomic organization of the KIR region in chimpanzee and orangutan. Phylogenetic analysis of expressed KIR genes in these and other primate species has shown conservation of all major KIR lineages although the number and nature of KIR within each lineage varies.

Analysis of two haplotypes each from chimpanzee and orangutan has revealed conservation of the flanking genes LILR (leukoctye immunglobulin-like receptor) and FCAR (Fc alpha receptor) in both species. Additionally, all haplotypes correspond to the centromeric half of the human KIR region, suggesting that this is the ancestral organization of the region. The haplotypes from both species include orthologues for two of the three framework genes described in man. The first, KIR3DL3 (KIRCI), located adjacent to the LILR region, is similarly positioned in the orangutan and chimpanzee haplotypes. However, in both chimpanzee haplotypes studied, there is another KIR, Pt-KIR2DL5, located between the Pt-LILRs and Pt-KIRCI. The other framework gene, KIR2DL4, is found in the center of the human KIR region. In both chimpanzee and orangutan, it is the penultimate gene in the complex with a KIR3DL gene located between it and the FCAR gene. Knowledge of genomic structure, discovery of pseudogene sequence, verification of intron/exon structure, and determination of intron sequence have provided invaluable information for the phylogenetic reconstruction of the evolutionary history of the KIR region in the great apes.

Oral Presentation

(O1-1) Clinical significance of comprehensive antibody screening in live related donor renal transplantation

Roonmoni Deka[1], Arundhati Panigrahi[1], Dipankar Bhowmik[2], SC Tiwari[2], Narinder Kumar Mehra[1]
[1]All India Institute of Medical Sciences, [2]Department of Nephrology

The objective of this study is to evaluate the antibody repertoire against donor T and B cells and monocytes in the recipients of live related donor renal transplantation. Retrospective flowcytometry cross match was done in 81 pretransplant and 90 post transplant sera to evaluate the presence of antibodies against these cells. Nine of the 81 patients tested IgG positive against T cells experienced higher acute rejection episodes at I year in comparison to the 72 IgG negative patients (89% vs 38%, $p < 0.0001$). In the antibody negative group, 14 patients lost grafts, 9 (64%) of which were found to have antiendothelial cell antibodies instead. In the remaining 58 patients with functioning grafts, only 12 (21%) developed these antibodies ($p < 0.0001$). During post transplant screening, presence of IgG had a similar impact in both T and B cell positive vs negative groups with a graft survival of 50% vs 92 % ($p < 0.00001$) and 72% vs 91% ($p < 0.05$) respectively with higher incidence of acute rejection ($p < 0.0001$) in the positive group. On the other hand, patients elaborating IgA antibodies irrespective of their target cell specificity and IgM (against monocytes) had a better graft survival and lower acute rejection episodes relative to their negative counterparts ($P < 0.05$). These results indicate that an assessment of anti endothelial antibody alongwith comprehensive antidonor antibody screening preferably by flowcytometry provides a more sensitive measure of the sensitization status of the recipient and can prove to be of immense prognostic value in renal transplantation.

(O1-2) The evaluation of panel reactive antibody assay (PRA) in living renal transplantation.

Ishizuka Tsutomu1, Kazunari Tanabe[2], Hideki Ishida[2], Miyuki Furusawa[1], Tetsuo Hayashi[1], Mineko Yasuo[1], Hiroaki Shinmura[2], Tadahiko Tokumoto[2], Tadashi Miyamoto[2], Hiroshi Toma[2]
[1]Tokyo Women's Medical University, [2]Urology

(Aim) Many institutions around the world use the flow cytometric panel reactive antibody (FlowPRA) assay to evaluate donor-nonspecific high responders. We have been using the FlowPRA assay at our institution since last year. In this study, we compared the FCXM assay and the FlowPRA assay. (Materials and Methods) A total of 249 samples were retrospectively analyzed using the FlowPRA assay. In 126 out of 249 patients, we compared the results of the FCXM assay and the FlowPRA assay. (Results) 1) Out of 249 Patients, class1 Ab was detected in 40 patients (16%) and class2 Ab in 9 patients (4%), both class1 Ab and class2 Ab in 8 Patients (3%). The rate of class1 Ab and class2 Ab appearance was not related to the number of blood transfusions or pregnancy. 2) In 21 patients who received the first renal graft with FlowPRA (+) and FCXM (–), nine patients (43%) experienced moderate to severe humoral rejection within two weeks of their renal transplantation. 3) Two patients with FCXM (–) and FlowPRA (–) experienced vigorous humoral rejection leading to anuria. (Conclusion) Overall, 43% of the patients who tested FlowPRA (+) at the time of the first renal graft experienced an acute humoral rejection immediately after transplantation, even if the FCXM assay could not detect presensitization. FlowPRA monitoring may be more useful than FCXM monitoring for the detection of high responders. More sensitive monitoring to detect donor-specific antibody, such as single antigen beads FlowPRA, will be further needed.

(O1-3) Non-T-cell depleted HLA haploidentical stem cell transplantation in advanced hematological malignancies based on the feto-maternal immunological tolerance

Chihiro Shimazaki[1], Naoya Ochiai[1], Noriko Yamada[1], Ryo Uchida[1], Masashi Okamoto[1], Akira Okano[1], Shin-ichi Fuchida[1], Eishi Ashihara[1], Tohru Inaba[1], Etuko Maruya[2], Hiroh Saji[2]
[1]Second Department of Medicine, Kyoto Prefectural University of Medicine, [2]HLA Laboratory

Feto-maternal microchimerism suggests that immunological tolerance exists between mother and fetus. Based on this hypothesis, we performed haploidentical stem cell transplantation (SCT) without T-cell depletion (TCD) in nine patients with advanced hematological malignancies. There were six males and three females, their ages ranging from 17 to 55 years. Two patients had CML at blast crisis, three had ALL/LBL, two had NHL, and two had MM/PCL. All patients were in relapse or refractory stages. HLA incompatibilities for GVHD direction included three loci mismatches in six patients, and two loci mismatches in three patients. A HLA-nested polymerase chain reaction with sequence-specific primer typing demonstrated chimeric cells in eight of nine donors. The conditioning regimen consisted of CA/CY/TBI in six patients, BU/CY in one patient, and Flu/L-PAM in two patients. The median number of CD34+ cells infused was

2.25 × 106/kg. The prophylaxis against graft-versus-host disease (GVHD) was tacrolimus with minidose methotrexate (5 mg/kg, on days 1, 3, and 6). Engraftment was obtained in all patients. An acute GVHD of less than or equal to grade 2 developed in all patients except one who developed tacrolimus encephalopathy. Chronic GVHD developed in four of seven evaluable patients. Four patients died; one with fungal pneumonia, one with GVHD after cessation of taclorimus because of relapse and two with disease progression. Five patients survived, with one patient being in complete remission (+75～+648).
These observations suggest that haploidentical SCT based on the feto-maternal immunological tolerance without TCD is possible.

(O1-4) MHC modulation of immune response across the leprosy spectrum.

Meenakshi Singh[1], Kiran Katoch[2], Narinder Kumar Mehra[1]
[1]All India Institute of Medical Sciences, [2]Central JALMA Institute of Leprosy

Following our demonstration on the involvement of $Arg^{13,70-71}$ residues in pocket 4 of HLA-DRB1 molecule in tuberculoid leprosy (BT/TT), we have now conducted a comprehensive high resolution analysis involving 247 unrelated North Indian leprosy subjects. A positive association of HLA-DR*15 ($Pc < 7.52 \times 10^{-11}$) was confirmed in both BT/TT and BL/LL forms of leprosy. However, while DRB1*1501 ($Pc < 3.08 \times 10^{-8}$) was significantly associated with the BL/LL leprosy, DRB1*1502 was significantly increased in the BT/TT form ($Pc < 4.11 \times 10^{-3}$). Analysis of the residues in the hypervariable peptide binding region revealed increased relative risk towards BL/LL leprosy conferred by V^{86}, Arg^{13} and Pro^{11} spread over pockets 1, 4 and 6 respectively. Our studies suggest that the presence of V^{86} in pocket 1, known to be crucial for peptide binding might be responsible for decreased immune responsiveness and bacterial clearance, leading to BL/LL forms of leprosy. To further explain the differential association, observed in two polar forms of leprosy, functional studies revealed a significant overrepresentation of MT_1 cells (CD45RA- CD62L- $CD11a^{bright}$, γ-Ifn producers) among BT subjects and MT_2 cells (CD45RA- CD62L+ $CD11^{dim}$, IL-4 producers) in BL/LL group. Also, 1501/02 + ve patients had significantly increased MT_1 representation than the negative group ($p < 0.001$). This data indicates immune dynamics in leprosy and provides evidence that functional immune response is dictated by the presentation of relevant peptides of *M.leprae* by the host MHC.

(O1-5) Characterization of HCMV-specific CD8 T cells using HLA-A*02 tetramers

Hiroshi Takata[1], Hiroko Tomiyama[2], Masafumi Takiguchi[2]
[1]Division of Viral Immunology, Center for AIDS Research, Kumamoto University, [2]Division of Viral Immunology, Center for AIDS Rese

A significant number of cytomegalovirus (HCMV)-specific CD8+ T cells are found in PBMC from latently HCMV-infected healthy donors. We characterized HCMV-specific CD8+ T cells in the present study. We used HLA-A*0201 and HLA-A*0206 tetramers including HCMV pp65-495-503 epitope-peptide to identify HCMV-specific CD8+ T cells as well as mAbs specific for differentiation and maturation makers CD27, CD28 and CD45RA to distinguish both differentiation and maturation stages of HCMV-specific CD8+ T cells. Multicolor flowcytometric analysis of HCMV-specific CD8+ T cells showed that they predominately express CD27- or low CD28-CD45RA+ or -phenotypes. Whole CD8+ T cells expressing CD27-CD28-CD45RA+ or -showed high level of perforin expression while those with CD27lowCD28-CD45RA+ or -showed moderate level of perforin, suggesting that CD8+ T cells expressing these phenotypes have cytolytic activity. Indeed, HCMV-specific CD8+ T cells expressing these phenotypes effectively killed target cells pulsed with HCMV pp65-495-503 epitope-peptide. CD8+ T cells expressing CD27-CD28-CD45RA+ showed lowest proliferation activity, highest susceptibility to anti-CD3 mAb-induced apoptosis and highest expression of perforin, strongly suggesting that CD8+ T cells expressing this phenotype are terminal effector T cells. On the other hand, CD8+ T cells with CD27lowCD28-CD45RA+ or - and CD27-CD28-CD45RA- may have characteristics of memory/effector T cells since they have proliferation ability. These results indicate that in healthy donors HCMV-specific memory CD8+ T cells are always stimulated by HCMV and then maturate to memory/effector or effector cells.

(O1-6) HLA-based human papillomavirus epitope prediction

Jorge L Cervantes, Shunro Sonoda
Kagoshima University, Department of Virology

We previously reported HLA class II DRB1*1602 allele to confer susceptibility to infection with HPV types that belong to the subgroup A9 (HPV-16, -31, and -58). As peptides that bind to a given major histocompatibility complex (MHC) molecule share sequence similarity, using a computer algorithm (RANKPEP) (available on-line at www.mifoundation.org/Tools/rankpep.html) we examined E2, E6, E7, and L1 protein sequences of HPV-16, -31, and -58 for the prediction of peptide sequences which are likely to bind to the susceptibility HLA DR2 molecule. No common predicted peptide from the analysis of regulatory protein E2, or transforming proteins E6 and E7 sequences could be identified. However, two 9 aminoacid residue peptides within the major capsid protein L1 of HPV-16, -31, and -58 were predicted as being capable of binding to HLA DR2. The amino acid sequence of the two predicted peptides were AQGHNNGIC, and KFGFPDTSF.

MHC class II are present only on antigen-presenting cells, bind exogenously derived peptides, and are recognized by CD4 helper T-cells. Prediction of peptides that can bind to MHC molecules is important for selection of peptides capable of eliciting an effective immune response. The fact that common epitope candidates could be localized only within the L1 sequences, agrees with the concept that capsid antigenicity seems to play an important role in HPV infection and related diseases. As vaccines appear to be a promising way of preventing cervical cancer, computer based scanning for possible epitopes may be time and cost saving for future experiments aimed to evaluate successful HPV vaccines candidates.

(O2-1) Preliminary investigations of the HLA class I antigens expression on the epithelial cells of the nasopharyngean carcinoma in Viet Nam

An Trieu Vu[1], Bui Cong Toan[2], Ha Vinh Nguyen[1], Thu Anh Thi Phan[1], Le Dinh Doanh[3]
[1]Hanoi Medical University. Dept of Immunology, [2]Cancer Hospital of Hanoi, [3]Dept Morbid Anatomy HMU

The non expression of HLA class I molecules on the tumoral cells is considered as a mean of the malignant process to evade the host immune response.
The expression of these HLA antigenes was analysed in 20 undifferenciated nasopharyngeal carcinoma (UCNT) patients biopsies by immunofluorescent technic with antibodies kindly given by Dr. Brian Tait (Royal Tissue Typing Laboratory Melbourne Hospital Australia).
The loss in expression of the pan antigens (ABC) was found in 16 cases (80%) and the b2m in 15/20 (75%); of both in 14/20 (70%). At the locus specific antigens this frequence is lower: 65% for the locus A and 45% for the B. The allelic specific antigenes were not present in 75% for the allele A and 60% for the B. When they were detected, the most frequently encountered were Bw4 (25%), B7 (20%) and A2 (15%) A28 (15%).
The percentage of non expression seemed higher than in other malignant tumors from the other sites mentionned in the litterature, perhaps it may be due to the disease late stage of detection in the majority of the patients (T2. and T3) and perhaps also in the nasopharyngeal carcinoma the Epstein Barr virus infection is always one cofactor if not the cause frequemment discovered (high titre of antibodies against early antigens of the virus

(O2-2) Microsatellite analysis of the HLA region in head and neck squamous cell carcinoma patients using DNA pools.

Judith Reinders[1], Petra van der Weide[1], Akira Oka[2], Rie Sato[2], Hideki Hayashi[2], Piet Slootweg[1], Erik Rozemuller[1], Hidetoshi Inoko[2], Marcel Tilanus[1]
[1]Department of Pathology, HP. nr. H04.312, University Medical Centre Utrecht, [2]Dept. of Genetic Information, Isehara, Japan

The HLA region on chromosome 6 contains up to 300 genes of which many are highly polymorphic. Microsatellites are useful markers in association-studies to identify disease-associated regions or genes. Previous research on head and neck squamous cell carcinoma (HNSCC) indicated the HLA-B40-DR13 haplotype to be significantly associated in Dutch HNSCC patients. We used 69 microsatellites to refine the association with the B-DR region and to localize genes associated with HNSCC. Four different DNA pools were made: 1 control DNA pool (N = 106) and three patient DNA pools according to the localisation of the tumor. An oral cavity DNA pool (N = 159), a larynx DNA pool (N = 101) and an oropharynx DNA pool (N = 86). These pools were tested for all 69 microsatellite markers in the HLA region. Thirty-nine microsatellites were located in the class I region, 22 microsatellites in the class II region and 8 microsatellites in the class III region. One universal PCR program was performed for these microsatellites and PCR products were analysed by Gene Scanning on an ABI 3700 Sequencer. Preliminary results show two regions with significantly associated markers: the HLA-DQ-DR region and the MICA-HLA-B-C region. Among the significant microsatellites, particularly observed in the oral cavity DNA pool, the MICA microsatellite association was studied in detail.

(O2-3) MHC Class I association with asthma in the Busselton population.

Jennie Hui[1], Arthur William Musk[2], Alan L James[2], John Beilby[3]
[1]Western Australia Institute of Medical Research, [2]Sir Charles Gairdner Hospital, [3]PathCenter

Asthma occurs more commonly in atopic (allergic) individuals and is characterised by variable and excessive airway narrowing, airway inflammation and alterations of airway dimensions - remodelling. A number of studies have shown associations between the MHC region and phenotypes including positive skin tests to common allergens and total serum IgE. However, studies of candidate genes within the MHC have been limited to genes around the Class II region and TNF gene cluster. It is not known whether any genes in these regions are directly involved in the pathogenesis of asthma or related phenotypes. To identify susceptibility loci for asthma and related phenotypes

within the MHC, associations with a set of well defined polymorphic microsatellite markers across part of the MHC region were studied in 82 cases with asthma and 94 healthy controls from the Busselton population in Western Australia. Statistically significant differences in allele distribution were found between cases and controls within two polymorphic microsatellite loci telemeric to HLA-A. ($p = 0.023$ and $p = 0.0033$ respectively). In addition, the allele frequencies for A5 of MICA was lower in cases of asthma (7/164–4.27%) compared with healthy controls (25/188–13.3%) ($p = 0.003$). Further studies are underway to evaluate the potential association between candidate genes in the Class l region and asthma.

(O2-4) Association of susceptible genes to Japanese cedar pollen allergy using SNPs in LHA gene region

Akiko Ishitani[1], Tsuneo Ashida[2], Takeshi Ide[3], Mari Nakanishi[1], Yoko Kameoka[1], Noriko Sageshima[1], Motoko Omura[1], Nobuyuki Sanehuji[1], Kiyoe Masuo[4], Masaharu Sada[5], Katsuhiko Hatake[1]

[1]Nara Medical University, [2]Ashida ENT Clinic, [3]Nara Medical University, Dep. of Chemistry, [4]Veritas Corporation, [5]National Cardiovascular Center

Using methods developed to examine single nucleotide polymorphisms in the human MHC, we have undertaken the study of cedar pollinosis and possible genetic with the MHC. Blood samples were collected from 132 unrelated patients with Japanese cedar pollen allergy and from 177 persons without any symptoms of allergy for use as healthy controls. All samples were titrated for the presence of specific IgE antibodies to Japanese cedar, orchard grass, mugwort pollen, and mite by RAST. In addition, 165 SNPs from the HLA region were typed by SSP assays as well as determining each of the HLA-A, -B, -DR types of all samples. The results of these tests showed that all patients were positive for IgE antibody to Japanese cedar pollen and some were positive for the other allergen. Ninety-one healthy control samples were negative for all of the specific IgE antibodies tested, while 86 controls had one or more secific IgE antibody while they did not show any symptoms. The SNPs data were analyzed for the association with pollinosis using two sets of controls, those that were completely IgE negative and IgE positive controls. When the IgE negative controls were used, 10 SNPs near the HLA-A region showed a significant association with a chi-square value of approximately 6. However, when the IgE positive controls were used, no association was detected. This results indicate that about half of healthy Japanese may have some susceptibility to pollinosis and that there may exist susceptibility genes may exist near the HLA-A region.

(O2-5) Heterozygote disadvantage of HLA-DRB1*0405 and DRB1*0901 in susceptibility of rheumatoid arthritis in the Korean population.

Kyung Wha Lee[1], Hye-Soon Lee[2], Sang-Cheol Bae[2]

[1]Hallym Institute for Genome Application, Hallym University, [2]Hanyang University College of Medicine

The present study was undertaken to elucidate the impact of specific DRB1 alleles in conferring disease susceptibility and severity for RA in Koreans. The patients with RA ($n = 576$) and controls ($n = 392$) with same ethnic background were included in this study. HLA-DRB1 typing were performed by polymerase chain reaction and direct DNA sequencing analysis. Statistical analysis of the HLA typing data revealed that the frequencies of DRB1*0405 (24.4% vs. 7.1%) and DRB1*0901 (14.4% vs. 8.2%) were significantly higher in patient group than in control. The patients and controls were then divided into 6 groups based on the possession of DRB1*0405 and DRB1*0901. Re-analysis of the data on these groups appeared that frequency of DRB1*0405/DRB1*0901 heterozygote [$p = 0.0001$, OR 58.5 (95% CI 7.99–427.7)] was much higher in patient group than in control. The odd ratio of the heterozygous group was even higher than in DRB1*0405 homozygous group (58.5 vs. 37.2). The age at disease onset was significantly lower in patients carrying HLA-DRB1*0405 than in those without HLA-DRB1*0405 [$p = 0.005$, 36.3 ± 11.9 vs 39.2 ± 12.0, respectively]. In addition, the radiographic changes (stages 2–4) were more frequent in patients carrying HLA-DRB1*0405 allele only [$p = 0.012$, 91.1% vs 83.7%, OR 2.0 (95% CI 1.17–3.41)]. These data suggest that both DRB1*0405 and DRB1*0901 are strongly associated RA susceptibility and DRB1*0901 has additive disease susceptible effect. However, only the DRB1*0405 is associated with disease progress and severity.

(O3-1) An approach to minimize DRB1 high-resolution ambiguity in Japanese population using SSO probes that establish a linkage of two polymorphic sequences.

Katsuyuki Saito[1], Koichi Kashiwase[2], Masahiro Satake[2], Kiyoe Masuo[3], Shunta Kobayashi[3], Jar-How Lee[1]

[1]One Lambda, Inc, [2]Dept of Laboratory, Tokyo Red Cross Blood Center, [3]VERITAS Corporation

The reverse SSO method suffers lower resolving power compared to SSP and SBT methods. This is due to the fact that certain HLA genotypes contain identical polymorphism, but differ only in their arrangement, cannot be resolved without establishing a polymorphism linkage. Since a single SSO probe designed for a single target sequence cannot establish a linkage of multiple polymorphic sequences on

a strand of DNA, it has remained as inherent ambiguity problem in the SSO method.
Here, we demonstrate that selected DRB1 probes that establish linkage of two or three distant sequences are able to resolve ambiguities typically seen in Japanese population. The ambiguous combinations in DRB1 locus studied include well-represented alleles in Japanese population such as: [DRB1*04031/04/06, DRB1*13021] = [DRB1*04071, DRB1*13011]; [DRB1*0405, DRB1*1403] = [DRB1*04051, DRB1*1412]; [DRB1*130201, DRB1*140101] = [DRB1*130101, DRB1*140701] etc. Overall effects of newly developed DRB1 probes in routine typing results in Japan will be discussed.
Representative ambiguities that can be resolved by this technology are: A*2501, 02 specific probe to distinguish A*03/A*25 and A*32/A*66, A*25/A*74 and A32*/A*66; probes specific for two polymorphisms to resolve Bw4 associated ambiguities, B4901/B4002 = B4019/B50011, B4901/B7805 = B520101/50011 ambiguities in B-locus; DRB1*0308/1107 specific probe to exclude DRB1*0308 from common DRB1*11 and DRB1*03 alleles; CW*0106 specific probe to exclude all CW*0106 ambiguities.

(O3-2) Typing for the C282Y and H63D mutations of HFE by pyrosequencing

Leanne Louise Langan, Alison Castley, Frank Christiansen, Cyril Mamotte
Departments of Clinical Immunology and Biochemical Genetics, Royal Perth Hospital

Pyrosequencing is a rapid technique suitable for sequence analysis of short regions of PCR amplified DNA, and particularly suited for SNP analysis. It makes use of pyrophosphate generation upon incorporation of nucleotides during primer extension as dNTPs are added in a pre-determined order. The generation of pyrophosphate is coupled to a luciferase catalysed reaction resulting in light emission if the particular dNTP added is incorporated, yielding a distinctive pyrogram. In this study we compared Pyrosequencing to FRET/Melting curve analysis on the Roche Lightcycler for HFE C282Y and H63D genotyping.
The Pyrosequencing protocol comprised of capture of PCR amplicons on streptavidin-coated beads, isolation of single-stranded DNA, hybridization to a sequencing primer and analysis by Pyrosequencing.
Results by both methods were completely concordant, and included 41 CC, 19 CY, 16 YY, 38 HH, 25 HD, and 13 DD samples. None of the results were ambiguous and all genotypes were automatically and correctly assigned by the manufacturer & acute;s software. In routine practice, the method has proved to be reliable, and because genotype assignment is based on pattern recognition, the approach is insensitive to differences in product yield for different samples. The instrument can analyse 96 samples/10 minutes and has the flexibility to analyse a variety of different SNPS on the same analytical run. Assay design and set-up for HFE genotyping, as for numerous other SNPs also developed, was a very simple proposition. These qualities make Pyrosequencing highly suitable for SNP analyses for medium to large size laboratories, and for both diagnostic and research applications.

(O3-3) KIR phenotype diversity generated by allelic diversification within limited genotype distribution in Japanese

Nobuyo Yawata, Makoto Yawata, Peter Parham
Stanford University

Killer cell Immunogloblin-like Receptors (KIR) are a highly diverse family of cell surface receptors which regulate NK cells and subsets of T cells through recognition of HLA class I molecules. The number and combination of *KIR* loci (genotypes) has been found to differ greatly amongst human individuals and also between ethnic populations.
A unique distribution of only ten *KIR* genotypes was observed in >100 healthy unrelated Japanese individuals, originating from Hokkaido to Okinawa. The four most frequent genotypes accounted for 94% of the panel, due mainly to the high frequency [80%] of one specific haplotype group, the group A haplotypes. No other population group studied displays such a restricted pattern in *KIR* genotype at the gene content level.
Despite the limited genotype diversity, expression patterns of *KIR* in the Japanese panel as assessed by flow cytometry with six anti-KIR antibodies, were highly diverse and comparable to a Caucasoid panel, indicating that the limited variability of *KIR* gene content does not equate with a constricted phenotype of *KIR* repertoire. High resolution *KIR* typing by full-length sequencing of cDNA transcripts revealed allelic distribution to correlate with these phenotypes, suggesting allelic diversification as the mode generating *KIR* diversity in this population, and occurring mainly in the group A haplotypes. Also supporting this view was the discovery in this panel of several novel *KIR* alleles with potential for unique ligand specificity.

(O3-4) Polymorphic alu insertions within the MHC class I genomic region

Jerzy (Yurek) Kazimierz Kulski[1], David S Dunn[2], Hidetoshi Inoko[1]
[1]Tokai University Medical School, [2]Murdoch University, Western Australia

Many polymorphic Alu insertions (POALINs) belong to a subgroup of the Alu multicopy retrotransposon family of short interspersed nucleotide elements (SINEs) that are categorized as AluYb8. The number of AluYb8 members (~500–2000 copies) is significantly less than the fixed ~0.5 million Alu copies per haploid genome in humans. Because of their activity and mobility, POALINs are estimated to contribute to at least 0.4%–1.0% of human genetic disorders.
We study the Major Histocompatibility Complex (MHC) class I region on the short arm of chromosome 6 because this region has a high gene density, many genes with immune system functions, large sequence variations and diversity, duplications and redundancy, and a strong association with more than 100 different diseases. Since very little is known or understood about POALINs within the MHC genomic region, we undertook to identity some of the members of the AluYb8 subfamily and to study their frequency distribution and genetic characteristics in different populations. As a result of our comparative genomic analyses, we have successfully identified the insertion sites for 5 POALINs distributed within the MHC class I region. This presentation will outline the locations of the insertions and sequence features of the 5 MHC POALINs, their single site and haplotype frequencies in a few examples of different geographic populations, and their association with different HLA class I genes and disease. Our findings suggest that the MHC POALINs have a potential value as lineage and linkage markers for the study of human population genetics, disease associations, genomic diversity and evolution.

(O3-5) The origin of MHC involvement in allograft rejection

Johannes Martinus Dijkstra[1], Md. Rafiqul Islam Sarder[1], Ikunari Kiryu[1], Yasutoshi Yoshiura[1], Uwe Fischer[2], Bernd Kollner[2], Kazuhiko Okamura[3], Hashimoto Keiichiro[3], Teruyuki Nakanishi[4], Mitsuru Ototake[1]
[1]National Research Institute of Aquaculture, [2]Friedrich Loeffler Inst., Insel Riems, Germany, [3]Fujita Health University, Toyoake, Japan, [4]Nippon University, Fujisawa, Japan

Fish are the most primitive species with MHC class I and II genes. Whereas in the elasmobranches (shark and ray) the class I and II loci are linked, in teleost fishes they are not. We showed that the MHC in shark is an important determinant for the vigor of allogeneic skin graft rejection. Cardwell and coworkers showed that the class II linkage group is an important determinant for allograft rejection in the teleost Gila topminnow, and we recently showed the same for the class Ia linkage group in rainbow trout. Probably allograft rejection in fish has more functional importance than in mammals: Fish skin epidermis consists of living cells, many fish species are cannibalistic, and cell grafting in water should be easier than in air. However, whereas in mammals it is thought that MHC mediated allograft rejection and pathogen recognition depend on similar mechanisms, namely, small changes in the MHC or MHC/peptide structure, this may not be true in fish. The relative importance of 'Danger' signals for immune stimulation is probably more important than in mammals, because fluctuating body temperatures alone already should influence MHC-TCR binding efficiency. Interesting in this respect is that rainbow trout have an unusual high level of allelic class Ia variation extending far beyond the binding groove.
This study was supported by "the promotion of basic research activities for innovative biosciences" funded by "Bio-oriented Technology Research advancement Institution (BRAIN), Japan.

(O3-6) Comparative analysis of MHC regions elucidated by genomic sequencing

Takashi Shiina, Tatsuya Anzai, Sayoko Shimizu, Kazuyo Yanagiya, Natsuki Kimura, Nami Hashimoto, Atsushi Watanabe, Yurek Kulski, Hidetoshi Inoko
Department of Basic Medical Science and Molecular Medicine, Tokai University School of Medicine

We previously reported the genomic sequence of the 2.2 Mb HLA class I and III regions, and also of one of the HLA paralogous regions, the 1.1 Mb CD1 gene region on chromosome 1. As a next step to comparative genome analysis, we are now investigating gene organization of the MHC or ancestral MHC regions by genome sequencing in various species in order to elucidate molecular mechanism for the evolutionary process of the MHC regions. To attain this goal, we have so far determined the genomic sequences of 11 Mb in total of the MHC or ancestral MHC regions from following species: 511 kb from amphioxus, 271 kb from shark, 209 kb from rainbow trout, 243 kb from quail, 3.8 Mb from rat, 1.1 Mb from pig, 3.3 Mb from rhesus macaque, 1.75 Mb from chimpanzee, and compared to each other among species. In summary, these analyses, the basic structure of the MHC region is largely conserved among various species, but always remodeled as responses to environmental pathogens by "birth and death" of MHC and MHC-linked genes. Further the comparative genome analysis of the MHC regions provides us with informative data which help understanding the evolutionary process of the human genome.

(O3-7) Comparative genomic analysis between a chimpanzee sequence and two human sequences with different HLA haplotypes within the entire MHC Class I region.

T Anzai[1], T Shiina[1], T Yamagata[1], J K Kulski[1,2], T K Naruse[1], R Horton[3], S Forbes[4], K Halls[3], R J N Allcock[4], A M Atrazhev[5], J Ashhurst[3], P Coggill[3], I Dunham[3], A J Mungall[3], K Osoegawa[6], A N Roberts[7], J Rogers[3], S Sims[3], Y Wang[6], S Williams[3], L Wilming[3], J F Elliott[5], P J de Jong[6], S Sawcer[8], J A Todd[7], J Trowsdale[4], S Beck[3], H Inoko[1]

[1]Department of Molecular Life Science, Tokai University School of Medicine, Japan. [2]Centre for Bioinformatics and Biological Computing, Murdoch University, Australia. [3]Wellcome Trust Sanger Institute, UK. [4]Department of Pathology, Immunology Division, University of Cambridge, UK. [5]Department of Medical Microbiology and Immunology, University of Alberta, Canada. [6]Children's Hospital Oakland Research Institute, USA. [7]Cambridge Institute for Medical Research, University of Cambridge, UK. [8]Neurology Unit, University of Cambridge, UK.

The chimpanzee shares nearly 99% sequence identity with the human genome. Our aim is to determine the genomic sequence in the chimpanzee MHC class I region and to compare the genomic diversity between the two species. This report presents the first large scale comparison between the human and the chimpanzee genomes via the sequence analysis. This 1.75 Mb stretch of DNA which encompasses the entire class I along with the telomeric part of the MHC class III regions corresponds to an orthologous 1.87 Mb of the human HLA region. Sequence analysis confirms the existence of a high degree of sequence similarity between the two species. However and importantly, this 98.6% sequence identity drops to only 86.7% once taking into account the multiple insertions/deletions (indels) dispersed throughout the region. And, when divided into MHC and non-MHC genes, the nucleotide identity was 99.3% for 28 non-MHC genes and 97.1% for 6 MHC genes and 1 MIC gene. This difference between non-MHC and MHC genes is probably due to balancing selection or over-dominant selection operating through recombination to maintain polymorphism in functional MHC genes. In this comparative analysis, diversity profiling, indel distribution, pattern of nucleotide substitution, tendency toward diversity between MHC (multi-copy) and non-MHC (single-copy) genomic regions will be presented using genomic sequences the entire MHC class I region from 2 different HLA haplotypes and 1 chimpanzee sequence.

(O3-8) Sorting out the orthology among hominoid MHC-A related loci: genomic analysis of class I genes of the orangutan (Pongo pygmaeus)

Makoto Yawata, Nobuyo Yawata, Lisbeth Guethlein, Laurent Abi-Rached, Peter Parham
Stanford University

Study of hominoid species provides evidence for several genes related to *HLA-A*. Whereas humans have *HLA-A* and *HLA-H*, chimpanzees have *Patr-A*, *Patr-H*, and another *A*-related gene, *Patr-AL*. Phylogenetics show *HLA-A*, *Patr-A* and *Gogo-A*, present in human, chimpanzee and gorilla, are orthologues. Orthology seems to dissolve with orangutan *MHC class* I genes, for which the sequence designated as *Popy-A*, does not cluster with *HLA-A* but with *Patr-AL*.

We aimed to determine whether orangutans have an *HLA-A* orthologue. *MHC class* I genes isolated from an orangutan cosmid library were characterized. A clone corresponding to the *HLA-A* containing region was shown to be conserved with regard to gene order, orientation and intergenic sequences. This genomic analysis identified a new *Popy class I MHC* gene, that is orthologous to *HLA-A* and distinct from either the previously assigned *Popy-A* gene or the polymorphic pseudogene, *Popy-Ap*. The new gene is closest in sequence to the gibbon class I gene *Hyla-A*. Preliminary study suggests the orangutan ortholog of *HLA-A* has functional polymorphism.

In conclusion, phylogenetics shows the polymorphic gene named *Popy-A* is orthologous to the non-polymorphic *Patr-AL*, a gene not present in humans. Secondly, the polymorphic *Popy-Ap* pseudogene, appears orthologous to human and chimpanzee pseudogenes *HLA-H* and *Patr-H*. Most importantly, a newly discovered orangutan class I locus is orthologous to *HLA-A*. Thus, at least three genes in the *MHC-A* family were present in the ancestor of modern hominoids. This study demonstrates how class I genes can change their character, function and polymorphism in the course of evolution.

Poster

(P1-1) Rainbow trout MHC class Ia and Ib regions; Interlocus recombination created extreme high levels of Ia diversity

Johannes Martinus Dijkstra[1], Atushi Fujiwara[1], Mitsuru Ototake[1], Chizuko Nishida-Umehara[2], Ikuo Hirono[3], Takashi Aoki[3], Atsushi Watanabe[4], Sayoko Shimizu[4], Kazuyo Yanagiya[4], Takashi Shiina[4], Hidetoshi Inoko[4]
[1]National Research Institute of Aquaculture, [2]C. Adv. Science and Technol., Hokkaido University, [3]Dep. of Aquatic Biosciences, Tokyo University, [4]Dep. of Molecular Life Science, Tokai University

Although rainbow trout only has a single class Ia locus, the diversity of Ia sequences is unprecedented. Homology levels between allelic trout a1 or a2 domains can be as low as when compared with mammalian sequences. Copies of most of the very diverse trout Ia a1 and a2 lineages can be found elsewhere in the genome. We identified a class Ia and a class Ib region on two different trout chromosomes, possibly originating from the previous tetraploid state of salmonids. This arrangement seems to allow genetic exchange between the Ia locus and a variety of class Ib loci, resulting in the enormous Ia allelic diversity.
This study was supported by "the promotion of basic research activities for innovative biosciences" funded by Bio-oriented Technology Research Advancement Institution (BRAIN), Japan.

(P1-2) The diversity of bovine MHC class II DRB3 genes in Japanese Black, Japanese Shorthorn, Jersey and Holstein cattle in Japan

Shinnosuke Takeshima[1], Naruya Saitou[2], Mitsuo Morita[3], Hidetoshi Inoko[4], Yoko Aida[1]
[1]Retrovirus research unit, RIKEN, [2]National Institute of Genetics, [3]Livestock Improvement Association of Japan, [4]Tokai University School of Medicin

We sequenced exon 2 of the MHC class II *DRB3* gene from 471 individuals in four different Japanese populations of cattle (201 Japanese Black, 101 Holstein, 100 Japanese Shorthorn, and 69 Jersey) using a new method for sequence-based typing (SBT). We identified the 34 previously reported alleles and four novel alleles. These alleles were 77.9% to 100.0% identical at the amino acid level to the bovine *MHC (BoLA)-DRB3* cDNA clone NR1. Among the 38 alleles, eight alleles were found in only one breed in this study. However, these alleles did not form specific clusters on a phylogenetic tree of 236bp nucleotide sequences. Furthermore, these breeds exhibited similar variations with respect to average frequencies of nucleotides and amino acids, as well as synonymous and non-synonymous substitutions, in all pairwise comparisons of the alleles found in this study. By contrast, analysis of the frequencies of the various *BoLA-DRB3* alleles in each breed indicated that *DRB3*1101* was the most frequent allele in Holstein cattle (16.8%), *DRB3*4501* was the most frequent allele in Jersey cattle (18.1%), *DRB3*1201* was the most frequent allele in Japanese Shorthorn cattle (16.0%) and *DRB3*1001* was the most frequent allele in Japanese Black cattle (17.4%), indicating that the frequencies of alleles were differed in each breed. In addition, a population tree based on the frequency of *BoLA-DRB3* alleles in each breed suggested that Holstein and Japanese Black cattle were the most closely related, and that Jersey cattle were more different from both these breeds than Japanese Shorthorns.

(P1-3) Comparing of antigen binding groove of MHC class II DR molecule of cattle and human

Shinnosuke Takeshima[1], Naruya Saitou[2], Yoshinori Sarai[3], Yoko Aida[1]
[1]Retrovirus research unit, RIKEN, [2]National Institute of Genetics, [3]RIKEN Tsukuba Institute

The major histocompatibility complex (MHC) polymorphism occurs predominantly at residues involved in peptide binding, and there is compelling evidence that the polymorphism is maintained by some form of balancing selection. The essential role of the MHC molecules for immunological recognition of foreign peptide antigens implies that the cause for this selection is related to the influence of MHC polymorphism on host defense against pathogens. To study the function of bovine MHC (BoLA)-DR molecules, we detected positive and negative selection of BoLA-DRβ1 and human MHC (HLA)-DR & β1 domain and compared these. First, we compared the average of amino acid, nucleotide, nonsynonymous and synonymous substitutions in pairwise of 103 BoLA-DRB3 and 236 HLA-DRB1 alleles. The result shows that the rates of nonsynonymous substitution in BoLA were higher than that of HLA. Next, we detect positive and negative selection at single amino acid sites in BoLA-DRβ or HLA-DRβ domain by a new method of Suzuki and Gojobori. In HLA, 9 positive and 6 negative selection sites were detected and in BoLA, 7 positive and 2 negative selection sites were detected. In both of human and cattle, positive selection sites were mainly existed in antigen recognition site (ARS) site. Whereas, three negative selected sites were detected in

ARS of HLA, but not in ARS of BoLA. These result shows that the function of single amino acid were very close, but some sites have the different function in human and cattle.

(P1-4) Sequences and diversity of 17 new ovine MHC class II DRB1 alleles from three breeds of sheep

Yoko Aida[1], Satoru Konnai[1], Shin-nosuke Takeshima[1], Misao Onuma[2]
[1]Retrovirus research unit, RIKEN, [2]Department of Disease Control, Hokkaido Univ.

To investigate the genetic diversity of the sheep MHC (Ovar) class II *DRB1* locus, we amplified exon 2 of *Ovar-DRB1* alleles by the polymerase chain reaction (PCR) and determined the nucleotide sequences of both resultant strands after cloning. In our study of a total 97 sheep of three individual breeds, namely, Suffolk, Cheviot and Corriedale, we identified 18 previously published alleles and 17 new alleles. These alleles were 83.4% to 94.1% identical at the nucleotide level and 71.4% to 90.9% identical at the amino acid level to *Ovar-DRB1*0101*. We identified six new alleles in Cheviot sheep and eleven new alleles in Suffolk sheep. Furthermore, we identified 15, 6 and 1 alleles in Suffolk, Cheviot and Corriedale sheep, respectively, that have only been found in these breeds to date. Analysis of the frequencies of the various *Ovar-DRB1* alleles in each breed indicated that *Ovar-DRB1*0702* was the most frequent allele in Suffolk sheep (23.9%), Ovar-DRB1*0203 was the most frequent allele in Cheviot sheep (27.5%) and *Ovar-DRB1*0201* was the most frequent allele in Corriedale sheep (25.0%). A comparative analysis of the positions of polymorphic residues in the first extracellular domain of the DRB genes of sheep, man and mouse revealed the extraordinary similarity among positions of polymorphic residues that are associated with the antigen-recognition site (ARS). Moreover, the extent of polymorphism seems to be similar in sheep, human and mouse.

(P1-5) Polymorphism of MHC Class II Alleles associated with Immune Response in Bovine Leukemia Virus Infection

Yoko Aida[1], Satoru Konnai[1], Shin-nosuke Takeshima[1], Shigeru Tajima[1], Ai Shan Yin[2], Misao Onuma[3], Kosuke Okada[2]
[1]Retrovirus research unit, RIKEN, [2]Department of Veterinary Pathology, Iwate Univ., [3]Department of Veterinary Pathology, Hokkaido Univ.

In a previous study, we identified that the alleles of the ovine leukocyte antigen (*OLA*)-*DRB1* gene that encode the Arg-Lys (RK) motif and the Ser-Arg (SR) motif at positions $\beta^{70/71}$ of the OLA-DRβ1 domain are associated with resistance and susceptibility, respectively, to development of bovine leukemia virus (BLV)-induced ovine lymphoma. Here, we investigated the different immune response in sheep that had the RK/RK or SR/SR from early stages of onset of the disease until 30 weeks after infection with BLV. Although the viral load had been maintaining low levels throughout the experimental period, the sheep with the RK/RK genotype could induce expansion of $CD5^-$B-cells and rapid production of neutralizing antibody in the early phase of infection. The level of incorporation of [^{3}H]thymidine by peripheral blood mononuclear cells from the sheep with RK/RK genotype gave a strong response to BLV virion antigen and synthetic antigenic peptides that corresponded to T-helper epitope of the BLV envelope glycoprotein gp51. In contrast, the sheep with SR/SR genotype showed a strong response to BLV virion antigen and synthetic antigenic peptides that corresponded to T-cytotoxic and B-cell epitopes. In such cases, the animals with the RK/RK strongly expressed IFN-γ, the animals with SR/SR genotype strongly expressed IL-2. Moreover, we found that these proliferating cells were MHC-restricted $CD4^+T^-$cells.

(P1-6) Analysis of genomic structure in the swine leukocyte antigen (SLA) class I region by large scale genome sequencing.

Atsuko Shigenari[1], Asako Ando[1], Takashi Shiina[1], Christine Renard[2], Patrick Chardon[2], Hiroshi Yasue[3], HiroshiHidetoshi Inoko[1]
[1]Dept. Mol. Life Sci., Tokai Univ. Sch. Med., [2]Laboratoire mixte INRA-CEA, [3]Nat. Inst. of Agroboilogical Sci.

Genome analysis on the swine leukocyte antigen (SLA) region will give important information from a viewpoint of a possible strong candidate of pig organs as a donor for xenotransplantation. Here, we carried out large scale genome sequencing of the SLA class I region and compared the genomic structure between the pig and human MHCs in order to investigate gene structure of the SLA region, such as accurate number of expressed genes, gene order and genomic diversity.
A contig map of the SLA class I region spanning about 1.1 Mb was constructed by YAC and BAC overlapping clones. Genomic sequences of ten BAC clones carrying the entire SLA class I region were determined by the shotgun method. These clones included a total of 1,162 kb genome segment between the *LTB* gene in the class III region (most centromere-side) and the *UBD* gene (most telomere-side) in the class I region. The genomic sequences thus obtained in swine were compared to those of the corresponding human MHC segments. As a result, the length of the SLA class I region is about 890 kb shorter than the HLA class I region. Contrasting the HLA class I region, 158 kb

and 307 kb segments including the non-classical and classical SLA class I gene clusters, respectively reside separated by a 611kb segment. However, the nucleotide sequence comparison between the human and swine reveal that the gene organization of non-MHC genes except the MHC class I genes is remarkably similar between the two species.

(P1-7) Genetic polymorphism of the swine major histocompatibility complex (*SLA*) class I genes, *SLA-1*, *-2* and *-3*

Asako Ando[1], Hisako Kawata[2], Atsuko Shigenari[1], Tatsuya Anzai[1], Masao Ota[3], Masaharu Sada[4], Shin-nosuke Takeshima[5], Yohko Aida[5], Takahiro Iwanaga[6], Hidetoshi Inoko[1]
[1]Dept. of Molec. Life Sci., Tokai Univ. Sch. Med., [2]Teach. and Res. Supp. Center, Tokai Univ. Sch. Med., [3]Dept. of Legal Med., Shinshu Univ. Sch. Med., [4]Dept. of Reprod. Med., Nat. Cardiovas. Center, [5]Retrovirus Res. Unit, RIKEN, [6]Japan Farm Co., Ltd.

The swine major histocompatibility complex (*SLA*) encodes polymorphic molecules involved in the genetic control of immune response and allo- and xeno-graft rejection. In order to compare with the genetic polymorphisms and allelic variations of the SLA class I genes to those of the *HLA* class I genes, RT-PCR products of the second and third exons of the three SLA classical class I genes, *SLA-1*, *-2* and *-3* were subjected to nucleotide determination. These analyses allowed the identification of 19 alleles including 13 novel alleles in 32 individuals from three different breeds of miniature swine, Götingen, Clawn and Mexican hairless pigs, and one mixed breed. Construction of a phylogenic tree using the nucleotide sequences of those 19 alleles indicated that the *SLA-1* and *-2* genes are more closely related to each other than to *SLA-3*. Selective forces operating at single amino acid sites of the *SLA* class I molecules were analyzed by the Adaptsite Package program. No positive selection site was found at the putative non-antigen recognition sites (ARSs). However, among the 11 positively selected sites observed in the *HLA* classical class I molecules, only three corresponding positions in the *SLA* class I molecules were inferred as positively selected. Further, as many as four amino acids at the putative ARSs were identified as negatively selected in the *SLA* class I molecules, suggesting that several functional sites for antigen and cytotoxic T lymphocyte (CTL) recognition by the *SLA* class I molecules may be different from those of the *HLA* class I molecules.

(P1-8) Information systems in tissue typing: a low cost, customised laboratory management system in use in Sydney, Australia

Zlatibor Velickovic
Australian Red Cross Blood Service

In the present day and age, information systems play a crucial role in laboratory management. Specific needs of tissue typing laboratories are often not envisaged by the large laboratory information systems. With the requirements of clients and staff increasing with time, a low cost laboratory management system was developed for the Sequencing Laboratory in Sydney, to automate and document increasingly complex laboratory procedures. The system consists of several custom made modules utilising low cost hardware and software resulting in a versatile, multifunctional and cross platform solution. The system electronically automates and archives the following procedures: specimen list acquisition, automated test assignment based on HLA type, automated PCR worklist generation, electronic gel documentation, automated sequence worklist generation based on PCR outcome, archiving of worklist, automated statistics online and results status monitor online. These modules and procedures are discussed in more detail in the presentation. In conclusion the system in use in Tissue Typing, Sydney, Australia is a low cost hardware and software solution for complex lab management tasks. It is relatively easy to produce in a customized format making it applicable to a variety of laboratory procedures.

(P1-9) Whole genome amplified samples can be typed for single nucleotide polymorphisms using fluorescence correlation spectroscopy measurement

Makoto Bannai, Kaori Higuchi, Tamao Akesaka, Masako Furukawa, Megumi Yamaoka, Katsushi Tokunaga
Department of Human Genetics, Graduate School of Medicine, University of Tokyo

Whole genome amplification (WGA) methods were adopted for SNP typing to save the amount of genomic DNAs that have to be typed for thousands of different SNPs. By the WGA, the entire genome is randomly amplified using a random or a degenerated primer. Five to 10ng of the genomic DNAs were amplified by a WGA method (I-PEP-PCR or DOP-PCR). Using 1/100 to 1/500 amounts of the WGA products as templates, subsequent PCR analyses were successfully performed. SNPs were genotyped by PCR-sequence specific primer (PCR-SSP) method followed by fluorescence correlation spectroscopy (FCS) measurement (Olympus Optical). Since movements of DNA fragments in a solution depend on their sizes, primers (smaller molecules) move faster than PCR-SSP-amplified fragments (larger molecules) in the PCR product solution. After a narrow laser beam spots DNA fragments at a very small area (1 femtolitter) in the solution, the signals of fluorescence-labeled molecules are detected by a highly sensitive spectrometer, then the numbers and sizes of both primers and amplified

fragments are determined. The typing results were evaluated for four different SNPs on tumor necrosis factor-a receptor 1 or 2 gene (TNFR1 or TNFR2). Genotypes determined by the PCR-SSP-FCS method using WGA products were in 100% concordance with those typed by sequencing using genomic DNAs. We are currently performing 5,000 typings /day in average using WGA samples from patients with several common diseases. WGA methods coupled with the FCS system allow specific and high-throughput genotyping of thousands of small amounts of samples for hundreds of different SNPs.

(P1-10) A Pyrosequencing™ method for typing of HLA-A gene

Asaho Adachi[1], Taeko Naruse[2], Eri Kikkawa[2], Yoriko Watai[3], Ryoko Shimada[3], Hidetoshi Inoko[2]
[1]Biott Corporation, [2]Molecular Life Science, Tokai Univ. Sch. Med., [3]Yokohama laboratory, SC BioScience Corporation

[Aimed and Background] The HLA matching correlates with success rate of marrow and organ transplantation. The HLA typing is more and more significant recently. The SBT (sequencing based typing) has many advantages among HLA genotyping methods which have been developed for high resolution typing. However, the SBT has complicated processes. In addition, there are many ambiguous heterozygous genotype combinations in SBT. Pyrosequencing™ is a novel DNA sequencing technology which detects the DNA polymerase-catalyzed extension in real-time by detection of pyrophosphate release. This system has advantages that it is able to eliminate the ambiguity because of its ability of haplotyping, it does not need gel electrophoresis and DNA fluorescent labeling, and 96 samples are analyzed simultaneously on 96 well microplate. In this study, we have established a high resolution HLA typing system specialized for Japanese population using Pyrosequencing™.
[Methods] DNA samples of which HLA type were already identified as having allele with high frequency in Japanese were extract from B cell lines and blood samples of Japanese. The DNA fragments including SNP (single nucleotide polymorphic) sites in exon2 and exon3 of HLA-A gene were amplified respectively by PCR, and typed 25 SNPs using Pyrosequencing™ with 8 sequencing primers.
[Results] The SNPs types were obtained predictably in the most samples. It was also possible to type heterozygous samples without any ambiguity because of each separated peak. On these results, Pyrosequencing™ method will contribute to improve throughput and accuracy in Japanese specific HLA typing.

(P1-11) Diversity of HLA Class II in New Zealand Maori: the DR, DP and DQ alleles

Mary Clare Tracey, John M. Carter
Wellington School of Medicine

New Zealand Maori are of Polynesian ethnicity, and like many Polynesian people have not been well-studied in terms of HLA allelic variation. We have used sequence-based typing to examine the Class II DR, DP and DQ loci of 50 individuals. We have detailed ancestry information for each individual that allows us to determine the most probable genetic degree of Maori ancestry. This information also allows us to consider the possible ethnic origins of particular alleles not common to Polynesian people. We will present an analysis of all alleles detected in each of the three loci, as well as a comparison to recently published data on four Pacific Island populations. In addition, we will examine theories of Polynesian migration and the recent availability of information from the Taiwanese Donor Registry in order to determine if our data fit within those paradigms. As our primary interest is in donor matching for bone marrow transplantation we will also briefly discuss the New Zealand Bone Marrow Donor Registry, current donor numbers and the percentage chance of a Maori person finding a fully-matched (6/6) or partially-matched (5/6) donor.

(P1-12) Leukaemia incidence in various ethnic groups in New Zealand and criteria for bone marrow transplant.

Mary Clare Tracey, John M. Carter
Wellington School of Medicine

Allogeneic stem cell transplantation is a very expensive treatment and doctors need to make decisions on the best allocation of resources to ensure optimal outcomes. Decisions are made based on a number of criteria, including the age of the patient, the stage of the disease and the possibility of finding a suitable donor.
No study has been done in New Zealand (NZ) to ascertain the level of need for allogeneic stem cell transplant amongst the NZ Maori or other ethnic groups. However Velickovic and Carter (1999) showed that for NZ Maori and NZ Pacific Islanders there was a significantly reduced chance of finding a donor, compared to NZ Caucasians.
To identify ethnicity variables in the incidence and mortality rates of leukaemias in the NZ population, we analyzed 7 years of data from the NZ Cancer Registry, comprising all individuals diagnosed with a transplantable leukaemic condition. We examined age at onset, ethnicity, incidence rates and gender over the period. Our analyses answered the following questions: l) Do NZ Maori, NZ Pacific Islanders

and NZ Asians have the same incidence of leukaemia as NZ Caucasians? 2) Do NZ Maori, NZ Pacific Islanders and NZ Asians have the same mortality rates from leukaemia as NZ Caucasians? 3) Are there differences in age at onset between the ethnic groups?

(P1-13) Distribution of HLA-A and B antigens in the national stem cell donor registry program

Pawinee Kupatawintu[1], Pawinee Kupatawintu[1], Sirilak Peancharoen[1], Araya Tatawatorn[1], Rachanee O-Charoen[1], Oytip Nathalang[2]
[1]National Blood Centre, Thai Red Cross Society, [2]Phramongkutklao College of Medicine

Stem cell transplantation has become the therapy of choice for many hematologic and immunologic disorders. At present, only 25% of patients have suitable HLA identical siblings. Patients who do not have an HLA-matched related donor can sometimes obtain an unrelated donor by searching volunteer registries.
Objective: In 2002, the Thai national stem cell donor registry program was established to facilitate donor search for patients lacking HLA identical siblings. This study illustrates the HLA-A and B antigen frequencies in the Thai population.
Materials and Methods: By the end of April 2003, 1,740 HLA-A and B typed samples from unrelated stem cell volunteer donors at the National Blood Centre, Thai Red Cross Society had been cumulatively registered. Twenty milliliters of venous blood from each donor was collected and typed using the standard microlymphocytotoxicity test and commercial typing trays. The typing results were calculated into gene frequencies.
Results: In this population, 26 HLA-A and 43 HLA-B antigens were found. Similar to other findings in the Thai population, the most common gene frequencies were HLA-A2 (27.59%), A11 (26.63%), A24 (16.97%), B46 (12.31%), B60 (10.75%) and B13 (8.05%). In addition, the less common gene frequencies were HLA-A23 (0.09%), A25 (0.03%), A66 (0.03%), A80 (0.03%), B41 (0.03%), B45 (0.07%), B49 (0.03%), B67 (0.20%) and B70 (0.06%).
Conclusion: We can conclude that increasing the national donor pool will benefit treatment by facilitating more efficient results in finding suitable HLA-matched donors, especially when the patients possess rare HLA antigens.

(P1-14) Identification of an unusual HLA-B*27 variant in a potential solid organ transplant donor

Samantha Fidler, Alison Brown, Maarit Limmer, Carolyn Dyer, Paulette Tasker, Edward Theakston
New Zealand Blood Service

The deficit in the donor to recipient population has led to a move towards living donor renal transplants. In New Zealand, potential donors (both related and unrelated), are typed serologically for HLA Class I and typed by DNA methods for HLA Class II. Infrequently, samples may be HLA Class I DNA typed in order to resolve ambiguities or to define homozygotes.
The donor in this study was HLA-A and B typed serologically using in-house typing plates. Since the results indicated an HLA-B40 homozygote a sample was referred for DNA typing. Initial HLA typing results by PCR-SSOP (InnoLiPa) defined the B locus as HLA-B*2712, *4002/29/35/37/40/41 indicating presence of an allele that was not identified by serological typing. The sample was further tested by PCR-SSP (Dynal) and the B locus confirmed as HLA-B*2712, *4004/29/35/40.
HLA-B*2712 has previously been described in the Caucasoid and Hispanic populations and was assigned by WHO in 1997. It has been shown to lack reactivity with B27 monoclonal antibodies and alloantisera but reacts with some B40/B60 monoclonal antibodies and alloantisera. It is associated with the Bw6 public epitope.
This finding has led to a more in depth scrutiny of samples defined as homozygotes serologically. It also has a clinical significance in transplantation as it is unclear whether B27 should be considered an avoid antigen in future transplants.

(P1-15) Flow cytometric detection of anti-HLA antibodies in renal transplantation

Setsuko Kohara[1], Eiko Nagao[1], Mikiko Mizuno[1], Takaaki Kobayashi[2], Kazuharu Uchida[1]
[1]Nagoya Daini Red Cross Hospital, [2]Nagoya University School of Medicine

INTRODUCTION: Even a small amount of anti-HLA antibodies can cause graft failure due to antibody-mediated rejection in renal transplantation. Flow cytometric procedure has been developed as a highly sensitive method for detection. The purpose of this study was to compare flow cytometric method with complement-dependent cytotoxicity (CDC) test, and to assess its clinical value in renal transplant recipients.
METHODS: CDC-PRA and Flow-PRA were compared in 154 candidates waiting for cadaveric renal transplantation. All candidates were divided into two: possibly sensitized patients with a history of pregnancy (PR), blood transfusion (BT) or transplantation (TX) (Group A,

n = 109) and non-sensitized patients (Group B, n = 45).
RESULTS: 10.1% (14/139) of negative CDC-PRA(T) patients were positive for Flow PRA (Class I). 73.5% (25/34) of positive CDC-PRA(WB) were negative for Flow PRA (Class II). Flow PRA was useful to reduce false-negative rate in CDC-PRA(T) and false-positive rate in CDC-PRA(WB). Flow PRA-positive rates in candidates with a history of PG, BT and TX were 35%, 34% and 64%, respectively. Previous BT and TX were related to production of anti-HLA Class I and Class II/I antibody, respectively. No positive Flow PRA was observed in Group B.
CONCLUSIONS: Flow PRA should be applied not to all candidates on waiting list because of a larger cost, but to selected candidates with immunologically high risk factors. When Flow PRA is negative, direct crossmatch can be omitted immediately before cadaveric transplantation. However, if Flow PRA is positive, direct crossmatch using flow cytometry would be strongly recommended.

(P1-16) Mismatching for HLA-C encoded motifs that interact with a distinct killer inhibitory receptor and acute graft versus host disease.

Gina Melick[1], Jon Moses[1], Ian Nivison-Smith[2], Heather Dunckley[1]
[1]Australian Red Cross Blood Service, [2]ABMTRR, Sydney

Recent interest in HLA-C and transplantation has shown that HLA-C plays a role in modulating natural killer (NK) cell activity. The interaction of self-MHC with receptors on a subset of NK cells is crucial for the protection from NK cell-mediated lysis of target cells. In man, this interaction has been mapped to a dimorphic epitope at residues 77 and 80 on the alpha 1 domain of HLA-C, each epitope interacting with a distinct killer inhibitory receptor (KIR). Alloreactive NK cells can be generated against stimulators expressing the opposite motif to that of the responder. It is thought that this may have implications for unrelated and extended family haematopoietic cell transplantation, as recent reports have suggested that HLA-C mismatches may be detrimental to transplant outcome. To determine whether natural killer cells have a role to play in GVHD in stem cell transplantation, mismatching for the HLA-C encoded motifs that interact with KIRs, thus influencing NK cell allorecognition, was assessed. Molecular based typing was undertaken to determine the level of HLA-C matching in matched unrelated patient/donor pairs as well as extended family donors. Each individual was identified as being positive for the Asn77 and Lys80 (group 1) and/or Ser77 and Asn80 (group2) HLA-C molecules. It was then determined whether the HLA-C mismatched patient/donor pairs were also mismatched for this motif and whether this affected transplant outcome

(P1-17) Correlation between disparity for the novel minor histocompatibility antigen, ACC-1, and clinical outcome after hematopoietic stem cell transplantation from an HLA-identical sibling.

Etsuko Maruya[1], Yoshiki Akatsuka[2], Tatsuo Ichinohe[3], Tetsuya Nishida[4], Yasuo Morishima[5], Toshitada Takahashi[2], Hiroh Saji[1]
[1]HLA Laboratory, NPO, Kyoto, Japan, [2]Division of Immunology, Aich Cancer Center Research Institute, [3]Department of Hematology/Oncology, Kyoto University Hospital, Kyoto, Japan, [4]Department of Molecular Medicine and Clinical Science, Nagoya University Graduate School of Medicine, Nagoya, Japan, [5]Department of Hematology and Cell Therapy, Aichi Cancer Center Hospital, Nagoya, Japan

The novel minor histocompatibility antigen, ACC-1, is restricted by HLA-A*2402 and formed by a single nucleotide polymorphism (G/A) on BCL2A1 gene, which is localized on 15q24.3–25.1 region. We established a simple ACC-1 DNA typing method and investigated the allele frequency in Japanese subjects using DNA from 96 unrelated individuals. We found that the allele frequency of Tyr at codon 19, (ACC-1 positive allele), was 0.516 and that of Cys was 0.489. The frequencies of recipient ACC-1 disparity were estimated as follows; 18% in the unrelated donors, 12% in the parent/offspring donors, 11% in the sibling donors. We next evaluated the association between the compatibility of ACC-1 and GVL/GVH effect after hematopoietic stem cell transplantation (SCT) from an HLA identical sibling. We compared the risk for developing severe acute GVHD (≧ grade III) between ACC-1-incompatible (IC) and compatible (C) groups among HLA-A*2402 (+) recipients (N = 42) who had undergone SCT for hematological malignancies with cyclosporine-based GVHD prophylaxis. One (16.7%) of 6 patients in the group IC and 3 (8.3%) of 36 patients in the group C experienced grades III or IV acute GVHD [Odds ratio for IC vs C: 2.2 (95%CI 0.19–25.5), P = 0.91], suggesting that the incompatibility of ACC-1 was not strongly associated with development of severe acute GVHD. Although the number of patients is still small, currently no relapse has been observed in the group IC. Given hematopoietic cell-specific expression of ACC-1, these preliminary observations strongly suggest that ACC-1 could be a potent GVL target which facilitates an effective adoptive immunotherapy for patients with hematological malignancies without exacerbating GVHD.

(P1-18) HLA-DRB3 allele frequencies and DRB1-DRB3 Haplotypic associations in Koreans

Myoung Hee Park, Eun Young Song, Hyejin Park
Seoul National University Hospital, Dept of Laboratory Medicine

HLA-DRB3 alleles are present in close linkage disequilbrium with particular DRB1 alleles and DRB1-DRB3 haplotypic associations vary among different ethnic groups. We have investigated the frequencies of HLA-DRB3 alleles and DRB1-DRB3 haplotypic associations in 800 Koreans, registered as marrow donors to the Korea Marrow Donor Program. DRB3 genotyping was done on 447 samples carrying DRB3-associated DRB1 alleles (DRB1*03, *11, *12, *13, and *14) using PCR-single strand conformation polymorphism (SSCP) method. DRB1 genotyping was done using PCR-SSO and PCR-SSCP methods. The allele frequencies of DRB3*0101, DRB3*0202 and DRB3*0301 were 7.3%, 13.6%, and 12.0%, respectively, and we found one case of probable new allele (DRB3*01new, 0.1%). DRB1-DRB3 haplotype frequencies (HF) for DRB1 alleles with frequency >0.5% were: DRB1*0301-DRB3*0202 (HF 2.3%), DRB1*1101-DRB3*0202 (3.2%), DRB1*1201-DRB3*0101 (4.2%), DRB1*1202-DRB3*0301 (2.7%), DRB1*1301-DRB3*0101 (2.2%), DRB1*1302-DRB3*0301 (9.5%), DRB1*1401-DRB3*0202 (3.1%), DRB1*1403-DRB3*0101 (0.8%), DRB1*1405-DRB3*0202 (3.2%), and DRB1*1406-DRB3*0202 (0.8%). Strong associations were observed between DRB3*0101 and DRB1*1201, *1301, and *1403; between DRB3*0301 with DRB1*1202 and *1302; between DRB3*0202 and remaining DRB1 alleles. Most of the DRB1 alleles were exclusively associated with particular DRB3 alleles with relative linkage disequilibrium (RLD) values of 1.00, except for DRB1*1201, *1202 and *1301: Rare presence of DRB1*1201-DRB3*0202 (HF 0.4%), DRB1*1202-DRB3*0202 (0.3%), and DRB1*1301-DRB3*0202 (0.1%) was observed. These data were compared with the DRB1-DRB3 haplotypes of Black, Caucasian and other Asian populations (11th IHW data): Koreans and other Asian populations show less polymorphism in the distribution of DRB1-DRB3 haplotypes with very high RLD (0.9–1.0) values. DRB1*0301, *1201 and *1301 alleles show different DRB1-DRB3 haplotypic associations among different populations.

(P1-19) Variation of HLA class II genes in nganasans and kets, two indigenous siberian populations

Tatiana Uinuk-ool[1], Naoko Takezaki[1], Olga Derbeneva[2], Natalia Volodko[2], Rem Sukernik[2]
[1]Max-Planck Institute for Biology Department of Immungenetics, [2]Institute of Cytology and Genetics, Novosibirsk

Allelic frequencies at the three most polymorphic loci of the *HLA* class II region (*DRB1*, *DQA1*, and *DQB1*) were determined in 24 Nganasans and 17 Kets, the remnants of the two most ancient groups of the Lower Yenisey River/Taimyr Peninsula region in northern Siberia. By single-stranded conformational polymorphism typing, verified by sequencing the corresponding segments of genomic DNA, 19 *HLA-DRB1-DQA1-DQB1* haplotypes and 15 *HLA-DRB1*, 7 *DQA1*, and 11 *DQB1* alleles were found. The most frequent alleles were *DRB1*1301* (23.5%), *DQA1*0103* (29.4%), **0501/03/05* (29.4%), and *DQB1*0301/0309* (32.4%) in the Kets, and *DRB1*0901* (25%), *DQA1*0301* (39.6%), and *DQB1*0301/0309* (37.5%) in the Nganasans. The distribution patterns and comprehensive phylogenic analysis based on the haplotype frequencies of 17 Siberian populations suggest that the founders of both Kets and Nganasans came from Paleolithic populations in the Altai-Sayan Upland. The high frequency of the *DRB1*0901* allele in the Uralic-speaking Nganasans may be the result of a relatively recent gene flow from the northwardly-expanding Tungus-speaking Evenki who originated in the Baikal area.

(P1-20) HLA class I (-A, -B, -Cw) and class II (-DRB1, -DQA1, -DQB1) Allele and Haplotype Frequencies in the Present-day Thais.

Dasnayanee Chandanayingyong, Duangporn Srinak, Ruangroj Thongpradit, Monchan Sirikong, Komon Luangtrakool, Ekaraj Rungroung, Sasitorn Bejrachandra
Dept. of Transfusion Medicine, Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol U.

HLA class I (-A, -B, -Cw) and class II (-DRB1, -DQA1, -DQB1) allele and haplotype frequencies were determined for 142 Present-day Thais. Typing was performed by using the PCR-SSOP and SSP methods. Allele frequency of more than 10% were shown:-
HLA Class I: The number of different alleles detected were 15, 22 and 10 for HLA-A, -B and -Cw, respectively.
HLA-A*:- A*02, A*11, A*24, A*33
HLA-B*:- B*15, B*40
HLA-C*:- Cw*01, Cw*03, Cw*04, Cw*07, Cw*08
HLA-A*02 was highly polymorphic with different sub-alleles detected (5) follow by HLA-A*24 (3) and A*11(2). Among HLA-B, the highest diverse allele was HLA-B*15 with 8 sub-alleles were found. HLA-B*40 was also polymorphic but was unable to give definitely defined sub-allele.
HLA Class II: The number of different alleles were:- 13, 6, 5 for HLA-DRB1, HLA-DQA1, HLA-DQB1, respectively. HLA-DRB1*14 was highly polymorphic with 5 sub-alleles follow by 4 sub-alleles for HLA-DRB1*04 and DR2.

For three locus haplotype: the common HLA-A -B -Cw and HLA-DRB1 -DQA1 -DQB1 haplotype (> 5%) were:
HLA-A*33, B*58, Cw*0302
HLA-A*02, B*46, Cw*0102
HLA-DRB1*1202, DQA1*0601, DQB1*0301
HLA-DRB1*0901, DQA1*0302, DQB1*03032
HLA-DRB1*1502, DQA1*0101, DQB1*0501 (There were more than 10 distinct DRB1*02, DQA1, DQB1 haplotypes.)
For five locus association: HLA-A -B -Cw -DRB1 and -DQB1, 14 haplotypes were found more than 1%. The most three common haplotypes were HLA-A*33, B*5801, Cw*0302, DRB1*0301, DQB1*0201; HLA-A*1101, B*1502, Cw*0801, DRB1*1202, DQB1*0301 and HLA-A*0207, B*4601, Cw*0102, DRB1*0901, DQB1*03032. These haplotypes were also found in other Asian population.

(P1-21) Comparative analysis of the HLA DRB1 and DQB1 polymorphism of Vietnamese Kinh and Muong ethnies

An Trieu Vu
Hanoi Medical University. Dept of Immunology

Blood samples from 103 unrelated Kinh and 83 Muong volunteer donors were collected and typed for the DRB1 and DQB1 loci.
The most frequent DRB1 alleles of the Kinh were 1202 (30%), 0901 (14,2%), 1502 (7,8%) DQB1*0301 (37%), 0303 (17%), 0501 (11,5%) and haplotypes 1202/0301 (29.7%), 0901/0303 (14.1%), 1502/0501 (6%); while of the Muong DRB1 alleles were 1602 (19.8%), 1402 (15%), 0301 (12.6%), 1502 (12.6%), DQB1 0502 (48%), 0201 (10.9%), 0501 (10.9%) and the haplotypes 1602/0502 (18.7%), 1402/0502 (14%), 0301/0201 (9,7%)
No deviation from expected Hardy-Weinberg equilibrium proportions
Marked differences were observed between DRB1 and DQB1 allele and haplotypes distributions of the Muong with the Kinh, namely: DRB1*1601 and 1602 (Pc = 10 – 5), 1202 (Pc = 10 – 4), 1401, 1404 and 1405 (Pc = 10 – 3), and DQB1 0301, 0302 and 0303 (Pc = 10 – 10); 1202/0301 (Pc = 10 – 8), 1401/0502 (Pc = 10 – 6), 1602/0502 (Pc = 10 – 8). Some were seen only in each ethny: (0818/0301, 1202/0502 in the Muong and 1201/0301 in the Kinh)
A nonsignificant positive normalized deviate of Homozygosity was observed.These values are suggestive of the weak influence of directional and balancing selection on these loci, they are also consistent with a pattern of neutral evolution.
The genetic distance of Arnold for several South-East Asian populations suggests that the Kinh and the Muong were closer for DQB1 and the Kinh and the Thai closer for DRB1. So the question of the common origin must be dealt with additional detailed investigations.

(P1-22) HLA polymorphism in Baloch ethnic group from Iran and their genetic relationship to Baloch from Pakistan.

Shirin Farjadian[1], Taeko Kagiya Naruse[2], Hisako Kawata[2], Abbas Ali Ghaderi[1], Siamak Bahram[3], Hidetoshi Inoko[2]
[1]Shiraz University of Medical Sciences, Shiraz, Iran., [2]Dept. of Genetic Information, Tokai University, [3]Center of Immunol. & Hematol., Strasbourg, France

The extreme polymorphism in different loci of the HLA system has been used as an invaluable tool for anthropological studies. Determination of HLA allele and haplotype frequencies in different ethnic groups is useful for population genetic analyses and the study of genetic relationships among them.
In the present study, molecular analysis of HLA-A, -B, -C, -DRB1, -DQA1 and -DQB1 has been used for the first time to assign specific HLA allele and haplotype frequencies in the Baloch ethnic group of Iran and compared with the frequencies in Baloch and other ethnic groups of Pakistan.
The results of this study showed that the most frequent HLA class I alleles were A*02011 (18%), B*4006 (9%), and C*04011 (27%). The most common HLA class II alleles were DQA1*0101/2 (42.5%), DQB1*0201 (32%), and DRB1*0301 (29%).
Three-loci haplotype analysis revealed that, A*3303-B*5801-C*0302 with a haplotype frequency of 4% and DQA1*0501-DQB1*02101-DRB1*0301 with a haplotype frequency of 19.6% were the most common HLA-I and -II haplotypes, respectively.
Phylogenic tree based on DA genetic distances for HLA-A, DRB1, and DQB1 loci showed that, Baloch from Iran are very close to Brahui and Baloch of Pakistan. It may reflect an admixture of Brahui and Baloch ethnic groups of Pakistan in Balochestan province of Iran.

(P1-23) Human leukocyte antigens class II (DRB, DQA1 & DQB1) alleles frequencies and haplotype association in Iranian normal population

Nikbin B, Amirzargar A, KHosravi F, Ansari B, Moradi B, Niknam M
Immunogenetic laboratory, Dept of Immunology, school of medicine, Tehran university of medical sciences, Tehran, Iran

Objective: The polymorphism of the HLA class II genes DRB, DQA1 and DQB1 was investigated in 100 unrelated healthy Iranian individuals.
Method: 5 ml of 5% whole blood were collected from the healthy blood donor and the genomic DNA was extracted by salting out method. HLA typing was performed using high resolution PCR-SSP technique to determine allele and haplotype frequencies.
Results: The most common DRB alleles were DRB1*11, DRB1*15 and DRB1*0101 with a frequency of 25%, 14.3% and 11.3% respectively. In contrast the allelic frequency of DRB!*16 and DRB1*09 was very low (1.5% and 0.7% respectively). The most frequent DQB1 alleles were DQB1*03011 (24%) and DQB1*0201 (17.8%). The most frequent DQA1 alleles were DQA1*0505 (21.2%) and DQA1*0103 (14%) and the most common haplotype was DRB1*11-DQB1*0301-DQA1*0505 (25%).
Conclusion: The present study suggest that Iranian Caucasian with some degree of differences share some of the HLA alleles with south and eastern European population and these data with our previous study from Fars region of Iran does not show any significant differences.

(P1-24) HLA in andean aymaras from Peru

Jorge L Cervantes[1], Sonia Guillen[2], Shunro Sonoda[3]
[1]Kagoshima University, Department of Virology, [2]Centro Mallqui, The Bioanthropology Foundation Peru, [3]Dept of Island Medicine, Kagoshima University

Although Amerindian groups represent a large percentage of the total population of Peru, data on the genetic background of Peruvian Andean population is still scarce. No previous HLA study has focused on Peruvian Amerindian ethnic groups, being this the first report of HLA in Peruvian Andean Aymaras.
Using Reverse Line Blot Assay, HLA typing for Class I (HLA-A, HLA-B, HLA-Cw) as well as Class II (HLA-DRB1 and HLA-DQB1) alleles was done on cryopreserved PBL DNA obtained from 31 Aymaras inhabiting two rural localities in the Peruvian Andes.
Major HLA class I alleles found were HLA-A*02, HLA-A*24, HLA-B*3505/17/30, and HLA-Cw*0401/05/08. Major HLA class II alleles found were HLA-DQB1*0303, HLA-DQB1*0302, HLA-DQB1*0402, HLA-DRB1*0404/08, HLA-DRB1*0802/04/07/11, and HLA-DRB1*09012.
All alleles found in our study subjects have been previously found in genetically isolated Amerindian populations of South America , and in Peruvian Mestizos.
Native American populations have a limited diversity of HLA alleles, compared with other ethnic groups which reflects a population bottleneck in the founding of these groups.
As the MHC contribute to the genetic susceptibility to autoimmune, cancer, metabolic and infectious diseases, our findings may help identifying groups at risk for certain medical conditions among Andean populations, as well as regarding the efficacies of modern forms of immunization by means of DNA vaccines.

(P1-25) Diversity of HLA alleles and haplotypes in the Australian population.

Heather Dunckley, Zlatibor M Velickovic
Australian Red Cross Blood Service

Routine tissue typing of bone marrow transplant patients and donors has resulted in the identification of over 55 new HLA alleles so far in this laboratory (including 5 A, 19 B, 5 C, 19 DRB1 and 4 DRB3 alleles). Analysis of DRB1 allelic results from bone marrow transplant patients, unrelated donors and cord blood donor samples revealed a high level of diversity with nearly 25% of all known DRB1 alleles observed. Sixteen DRB1 alleles, including two novel alleles, were present solely in the patient group, showing the difficulty in finding allelic matched donors for some patients. Within an HLA-DR haplotype, the DRB1 gene appears to always be present and depending on its allelic variant it may be associated with either a DRB3, DRB4 or DRB5 gene or it may lack the second functional DRB gene. With an ever growing number of unique HLA alleles these haplotypic associations are becoming more diverse. Over 6000 Australian high resolution DR haplotypes have been analysed by sequencing based typing in the last three years and over 120 different DR haplotypes identified. Six predominant haplotypes accounted for nearly 50% of all observed haplotypes in this Australian population sample. The majority of the remaining haplotypes were observed at low frequencies with several unusual haplotypes identified.

(P1-26) HLA variation in peptide binding domains through sequence based typing

S. Monika, K. Thangraj, A. G. Reddy and L. Singh
Centre for Cellular and Molecular Biology, Uppal Road, Hyderabad 500 030, INDIA

MHC is a large multigene family involved in the humoral and T-cell mediated immune responses of vertebrates and plays an important role in immune recognition. Because of the critical role of MHC in immune recognition and defense, it would be useful to examine polymorphisms at MHC loci in endangered tribal populations of India. A study was undertaken to analyze genetic variation in exon-2 and exon-3 of MHC loci (which code for antigen recognition regions of MHC). Using specific primers designed for these two domains, genomic DNA from tribal and non-tribal samples from India, were amplified and the amplicon from each individual was cloned in a blunt end cloning vector and sequenced. Sequencing revealed abundant polymorphism not only between the clones of different individuals, but also between the clones of the same individual. In addition many new alleles, hitherto unreported, were also observed. In another part of the study, the HLA genes were amplified using primers of different sub-classes of class-I and the amplicons were sequenced using internal primers. This study also revealed hitherto unreported alleles in tribal populations. Since such polymorphisms can provide vital clues about the complexity in the antigen-binding domain of MHC, the DNA sequence data was converted to putative amino acid sequences using Swiss-Prot software and was studied in detail. It was observed that many of the sequence polymorphisms translated in significant changes in the amino acids in the domain involved in Antigen-MHC interaction. The results of this investigation will be discussed in detail.

(P1-27) The role of Toll-like receptor 2 polymorphism (TLR2 Arg677Trp) in lepromatous leprosy

Gue-Tae Chae, Tae-Jin Kang, Jung-Eun Yeom
Institute of Hansen's Disease, The Catholic Univeristy of Korea

TLR2 is critical in the immune response to mycobacterial infections and the mutations in the TLR2 have been shown to confer the susceptibility to severe infection with mycobacteria. To define this, we screened the intracellular domain of TLR2 in 96 leprosy patients. Ten subjects among lepromatous leprosy (LL) patients had a band variant detected by SSCP. DNA sequencing detected a C to T substitution at nucleotide 2029 from the start codon of the TLR2. We also investigated the profiles of cytokine, such as IL-10, IL-12 and TNF-a in response to M.leprae in mononuclear cells from leprosy patients with the TLR2 mutation (TLR2 Arg677Trp). In leprosy patients with TLR2 muatation, production of IL-12, as well as tumor necrosis factor-a (TNF-a), by M.leprae-stimulated monocytes were significantly decreased compared with that in normal healthy with TLR2 wild-typre. There was no significant difference in gamma interferon(IFN-g) production between mutanat and wild-type during early stimulation (18 hr). However, the cells from patients with the TLR2 mutation showed significantly increased production of IL-10 after 18 hr of stimulation.
Our results provide the first genetic evidence that mutation in TLR2 is associated with leprosy and evidence that depressed IL-12 and TNF-a in response to M.leprae is involved in the immunopathogensis of leprosy patients with TLR2 muations (TLR2 Arg677Trp).

(P1-28) Association studies of KIR gene haplotype with the susceptibility to rheumatoid arthritis or pollinosis

Akiko Ishitani[1], Takahiro Yamashita[2], Norikazu Murata[3], Yoko Kameoka[1], Mari Nakanishi[1], Tsuneo Ashida[4], Takeshi Ide[5], Kiyoe Masuo[6], Masaharu Sada[7], Katsuhiko Hatake[1], Daniel Edward Geraghty[8]
[1]Nara Medical University, [2]University of Tokyo, Dep. of Obs. and gyn., [3]Kyowakai Hospital, Center of Rheumatism, [4]Ashida ENT Clinic, [5]Nara Medical University, Dep. of Chemistry, [6]Veritas Corporation, [7]National Cardiovascular Center, [8]Fred Hutchinson Cancer Research Center

Natural killer immunoglobulin-like receptors (KIRs) interact with HLA class I molecules and regulate natural killer cells, thus playing an important role in the non-adaptive immune response. The KIR gene family lies in a tandem array on a genomic subbregion on chromosome 19q13.4, with distinct haplotypes made up from a subset of some 18 distinct KIR genes and pseudogenes. We have developed methods to type KIR genes using sequence specific primers (SSP) and to determine haplotype content based on a gene-profile from several haplotypes analyzed by sequencing or family studies. Using this method we studied the association of the KIR genes profiles or haplotypes with the susceptibility to rheumatoid arthritis (RA) or pollinosis. Blood samples from 94 patients with rheumatoid arthritis, 177 with Japanese cedar pollen allergy and 81 without any symptoms of RA and pollinosis were used. The frequency of the gene profiles and haplotypes of patients and controls were analyzed for association with disease. We failed to find any association of KIR gene with rheumatoid arthritis or pollinosis. However, the data of frequencies of KIR gene profile and haplotypes in Japanese may be useful for other association studies.

(P1-29) Comparative analysis of the NFBD1 gene by genomic sequencing: species-specific structural feature

Sayoko Shimizu[1], Takashi Shiina[1], Tatsuya Anzai[1], Atsuko Shigenari[1], Asako Ando[1], Yoshihiko Katsuyama[2], Masao Ota[3], Hidetoshi Inoko[1]
[1]Basic Medical Science and Molecular Medicine, Tokai University School of Medicine, [2]Department of Pharmacy, Shinshu University, [3]Department of Legal Medicine, Shinshu University

The NFBD1 (a nuclear factor with BRCT domains protein 1)/KIAA0170 gene mapped to the central part of the HLA class I region, encoding a nuclear protein containing an FHA motif at its N-terminus, two BRCT motifs at its C-terminus, and internal repetitions of a 41 amino acid. These motifs were highly conserved in all the examined species. We identified that the NFBD1 gene resides at the orthologous positions of the human, chimpanzee, rhesus macaque, pig, mouse, and rat MHC class I regions by comparative sequencing analysis. The most conspicuous feature in this gene is that the numbers of internal repetitions are variable among species. So far, we have found 13 amino acid repeats in human and pig (although a small deletion was recognized in pig), 15 repeats in chimpanzee and rhesus macaque, and 8 repeats in mouse and rat. However, it must be noted that no genetic polymorphism or no difference in the number of internal repetitions has been recognized in 100 human genome DNA samples and several chimpanzee cell lines, suggesting that the number of internal repetitions was highly conserved in each species. NFBD1 was a mediator of the mammalian DNA damage checkpoint, so participating in DNA damage response at the early stage. Therefore, the differences in the number of internal repetitions in NFBD1 involved in homeostasis is novel, presumably reflecting functional importance of the physical contact or recognition by several NFBD1 interactive molecules with different structures depending on species, which is now under way in our laboratory.

(P1-30) DRB1*04 share epitope alleles and Tumor necrosis factor gene polymorphism (-863) in Thai patients with rheumatoid arthritis

Nattiya Hirankarn, Jeerawat Nakkuntod, Thidathip Wongsurawat, Utis Deesomchok, Preeyachit Charoenwongse
Chulalongkorn University

Rheumatoid arthritis (RA) in Thai population is significantly associated with HLA-DR4 shared epitope (SE) alleles (DRB1*0401 and *0405) similar to many populations. The frequency of DRB1*0401 and *0405 was 38% in RA patients and 16% in the healthy controls (P = 0.005, OR = 3.24, 95% CI = 1.38, 7.74). In addition, TNF-863A alleles was analyzed in this study and found to be significantly increased in RA patients compared to controls (p = 0.033, OR = 2.01, 95% CI = 1.05, 3.87). *In vitro* reporter gene analysis has shown that TNF-863A allele associated with increased TNF production, suggesting the role of this polymorphism in susceptibility to rheumatoid arthritis. With respect to disease severity, the DR4 SE and TNF-863A allele did not distinguish patients with more severe disease, as reflected by disease duration, joint deformities, joint erosion and extra-articular features. However, a highly significant association was found between rheumatoid factor positivity and RA patients with DR4 SE (p = 0.0005, OR = 9.42, 95% CI = 2.26–45.27).

(P1-31) Association of HLA-DRB, DQA1 and DQB1 alleles and haplotypes frequency with pulmonary tuberculosis in Iranian patients.

M. Niknam, A. Amirzargar, A. Yalda, M. Hajabolbaghi, F. Khosravi, H. Jabari, B. Ansari, B. Moradi, B. Nikbin
Dept. of immunology, and dept. of Infectious disease, School of medicine Tehran University of medical sciences, Tehran Iran.

Objective: investigation of HLA-DRB1, DQA1 and DQB1 allelic polymorphism in Iranian pulmonary Tuberculosis and a control group.
Method: Forty sputum positive pulmonary tuberculosis patients and a group of healthy control consisting of 100 individuals were studied for MHC class II allelic polymorphism by PCR-SSP method. The primer were supplied by biotest in the standard kit, DRB low resolution SSP and DQA, DQB intermediate resolution SSP.
Results: comparison of patients and control group showed a significant increase in frequency of HLA-DRB1*07 and DQA1*0101 (OR = 2.7, 95% CI = 1.97–6.135, Pc = 0.025 and OR = 2.66. 95% CI = 1.15–6.44, Pc = 0.04 respectively) in contrast the frequency of DQA1*0301 and DQA1*0501 were significantly decreased (OR = 0.254, 95% CI = 0.075–0.865, Pc = 0.033 and OR = 0.53, 95% CI = 0.04–0.95, Pc = 0,045 respectively). Concerning the haplotypes frequency, DRB1*1501, QDQA1*0103, DQB1*0601 was increased but statistically not significant. In the DQB1 locus, DQB1*0501 was unsignificantly over presented in our study.
Conclusion: these data suggesting that HLA-DRB1*07 and HLA-DQA1*0101 are the predisposing alleles and HLA-DQA1*0301 and 0501 are the protective alleles in our pulmonary Tuberculosis patients.

(P1-32) HLA-DRB1, DQB1 polymorphism and G6PD deficiency of muong ethny in hoa binh - Viet Nam

An Trieu Vu[1], Chinh Thi Tran[1], Khoa Van Pham[1], Huy Quang Ho[1], Ngoc Giao Thi Nguyen[2], Tinh Thi Ta[3]
[1]Hanoi Medical University. Dept of Immunology, [2]Institut of technology and Biology. National Unv, [3]Inst Malaria Hanoi Vietnam

G6PD is known as one of the most common hereditary diseases.A possible link with the HLA complex was put forward as this study subject on the Muong ethny of HoaBinh province where malaria had been endemic with frequent severe form.
Materials and Methods. 91 clinically normal and 26 suspected for G6PD deficiency were PCR typing for HLA-DRB1 and DQB1 by PCR-SSO.The suspected were assayed qualitatively, quantitatively for G6PD deficiency and DNA analysed for variants by MPTP after Shirakawa & al.
Results:
1. The Muong had a high frequency of HLA-DRB1*1602 (20%), *1401 (15%), *0301 (12,6%); HLA-DQB1* 0502 (48%),* 0201 (10,9%), *0501 (10,9%) and haplotypes HLA-DRB1/HLA-DQB1 *1602/0502 (19%), 1401/0502 (14%) quite different with their neighbours Kinh whose G6PD deficiency was also lower (1%)
2. There was no association between these HLA class II antigens and the disease. The risk ratio was only 1,08 for the most frequent allel DQB1*0502
3. They had also a high prevalence of G6PD deficiency (28%) and five G6PD molecular variants were detected of them the Union was predominant (44%) quite different with the Malaysian whose Viangchan and Mediterranean variants were the most frequent .The most interesting constatation was 87,5% of this variant went with HLA-DQB1* 0502 allele
Further investigations were needed

(P1-33) DPB1*0301 and DRB1*0901: independant markers for asprin-intolerant asthma in Koreans

Kyung Wha Lee[1], Jeong-Hee Choi[2], Yu-Jin Suh[2], Heung-Bum Oh[3], Choon-Sik Park[4], Hae-Sim Park[2]
[1]Hallym Institute for Genome Application, Hallym University, [2]Ajou University School of Medicine, Korea, [3]University of Ulsan College of Medicine, Korea, [4]Soonchunhyang University School of Medicine, Korea

A possible involvement of immune mechanisms associated with several HLA genotypes has been suggested in Caucasian patients with aspirin-intolerant asthma (AIA). This study aimed to evaluate HLA associations in aspirin-intolerant asthma compared to aspirin-tolerant asthma and normal controls in the Korean population. Seventy-six aspirin-intolerant asthmatics showing positive results on lysine-aspirin bronchoprovocation test, 73 aspirin-tolerant asthmatics and 91 normal healthy controls were enrolled. HLA-DRB1, DQB1, and DPB1 genotypings were performed by direct DNA sequencing analysis using ABI-3100 automated DNA sequence analyzer. The frequencies of DPBI*0301 and DRB1*0901 in aspirin-intolerant asthma (13.8% and 18.4%) were significantly higher than that of aspirin-tolerant asthma (4.1% and 9.6%) and normal controls (2.2% and 9.4%) ($p = 0.004$ and 0.028). The p values in DPB1*0301 association remained significant when corrected for multiple comparisons. The frequencies of two-locus haplotypes (HLA-DRB1-DQB1) in the AIA group showed DRB1*0901-DQB1*03032 in aspirin-intolerant asthma (16.9%) were significantly higher than that of aspirin-tolerant asthma (6.0%) and normal controls (7.4%). These findings suggest that HLA-DPB1*0301 and DRB1*0901 could be independent markers for the development of aspirin-intolerant asthma in the Korean population.

(P1-34) HLA Class II (DRB1, DQA1 and DQB1) allele and haplotye frequencies among HIV-Infected discordant couples in thais.

Sasitorn Bejrachandra[1], Dwip Kitayaporn[2], Jaranit Kaewkungwal[2], Manee Piya-anant[3], Parichart Permpikul[1], Monchan Sirikong[1], Usanee Sirihoonrit[1], Dasnayanee Chandanayingyong[1]
[1]Dept. of Transfusion Medicine, Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol U., [2]Dept. of Soc. and Env. Med., Fac. Trop. Med., Mahidol U., [3]Dept. of Obst. and Gyna., Siriraj Hosp. Mahidol U.

We investigated the association of HLA-DRB1, DQA1 and DQB1 alleles and haplotypes in 33 Thai women with discordant HIV-1 status (22 wife only infected and 11 husband only infected) and their heterosexual seronegative partners. A significant decrease in the frequency of DRB1*14 was found among the seropositive discordant individuals compared with the HIV-negative controls (3.0% vs 11.3%, $p = 0.048$, respectively). DQA1*0103 were also slightly decreased (0.0% vs 5.6%, $p = 0.042$). The haplotype analysis revealed that DRB1*1602-DQA1*0101-DQB1*0502 (4.6 % vs 0.0%, $p = 0.024$) was significantly increased associated with HIV-1 infection but DRB1*1502-DQA1*0101-DQB1*0501 (1.5% vs 8.1%, $p = 0.049$) decreased. On the other hand, DRB1*1501-DQA1*0102-DQB1*0601 was the most highly associated with HIV-1 uninfected individuals (7.6% vs 0.0%, $p = 0.002$) followed by DRB1*0405-DQA1*0302-

DQB1*0401 and DRB1*1401-DQA1*0104-DQB1*05031 (7.6% vs 1.3%, p = 0.024 and 6.1% vs 0.0%, p = 0.007, respectively).

(P1-35) Characterization of mushroom allergy by facing on two approaches

Kazuhiko Suzuki[1], Hiroshi Tanaka[2], Hiroeki Sahara[3], Yasuaki Tamura[4], Toyohiro Saikai[2], Hideyuki Ikeda[4], Katsuaki Dan[5], Noriyuki Sato[4], Shosaku Abe[2]

[1]Sapporo Medical University, [2]3rd Dept of Int Med, Sapporo Medical Univ, [3]Marine Biomedical Institute, Sappro Medical Un iv, [4]lst Dept of Pathology, Sapporo Medical Univ, [5]Center for Integrated Medical Research, Keio Univ

We previously reported that two-thirds of workers in a mushroom plant cultivating Hypsizigus marumoreus (Bunashimeji) complained of respiratory symptoms, and a half of those revealed a bronchial hyper-responsiveness that was shown the increase in Th2 type T cells, Th2/Th1 ratio and serum IL-13 and the decrease serum IFN-g as compared with healthy controls. Therefore it is suspected that asthma-like illness might be induced by exposure to the mushroom spores. Interestingly, since these symptoms disappeared when they were exposed by other mushrooms spores, such as Pleurotus eringii (Eringi) and Grifola frondosa (Maitake), it seemed to be specific dependent on the mushroom species. To address these immunological backgrounds, we are trying to do with two approaches. One investigates whether there is relationship between mushroom allergy and HLA class II alleles of DPB1, DQB1, and DRB1 by using the PCR-RFLP method. The other is to identify these allergic components of Hypsizigus marmoreus spore. We already have detected some antigens spot on 2D-PAGE that is detectable by patient's serum. In this symposium, we will discuss these points.

(P1-36) Age-related association of HLA-DRB1 *0101 with type 2 diabetic nephropathy in Japanese patients on maintenance hemodialysis

Maho Watanabe, Satoru Ogahara, ZhongFeng Liu, Hidetoshi Kaneoka, Ritsuya Noda, Toshiaki Murata, Yoshiyuki Hasegawa, Isao Michinaga, Toshiki Hiratsuka, Takao Saito, Setsuya Naito

Fourth Department of Internal Medicine, Fukuoka university

Diabetic nephropathy is a serious microvascular complication in patients with type 2 diabetes as well as type 1 diabetes. However, not all patients with long-term diabetes develop nephropathy. Long-term observational studies have shown that at most only 35% of diabetic patients develop nephropathy after 15–18 years of the disease, irrespective of glycemic control. The underlying mechanisms for the susceptibility of some but not all diabetic patients to nephropathy remain unresolved. Several studies have suggested that diabetic patients prone to nephropathy are genetically susceptible to this complication. The aim of this study was to investigate HLA-DRB1-associated susceptibility to type 2 diabetic nephropathy on maintenance hemodialysis. We recruited 75 patients with type 2 diabetic nephropathy who were treated by hemodialysis. HLA-DRB1 alleles were assigned using polymerase chain reaction followed by hybridization with sequence-specific oligonucleotide probe and restriction fragment length polymorphism methods. As control, data of 493 healthy Japanese controls were taken from Eleventh International Histocompatibility Workshop. A significantly higher frequency of HLA-DRB1*0101 allele was found in patients compared to the control (18.7% vs 9.7%, P = 0.02). None of the other allele tested was significantly more or less frequent in patients than in controls. When stratified by age-of-onset, the results showed the frequency of DRB1*0101 was significantly higher in patients with early-onset diabetes than in those with late-onset disease (38.1% vs 11.3%, P = 0.008). Our findings suggest that DRB1*0101 is a genetic marker that is strongly associated with early-onset type 2 diabetic nephropathy in Japanese patients.

(P1-37) The difference of the immunoresponse to varicella zoster virus (VZV) and HLA association

Harumi Shinagawa[1], Tomotaka Mabuchi[1], Emiko Akasaka[1], Norihiro Ikoma[1], Kenichi Iwashita1, Yoshinori Umezawa[1], Yukinori Ohta[1], Mariko Iizuka[1], Takashi Matsuyama[1], Akira Ozawa[1], Eri Kikkawa[2], Tatsuya Anzai[2], Taeko Naruse[2], Hidetoshi Inoko[2], Masako Sato[3,4,5], Yoshihide Ishikawa[3], Kazuo Hanaoka[5], Katsushi Tokunaga[4], Toshio Yabe[3]

Departments of [1]Dermatology and [2]Molecular Life Science, Tokai University School of Medicine, Bohseidai, Isehara, Kanagawa, Japan, [3]Tokyo Metropolitan Red Cross Blood center, Tokyo, Japan, [4]Department of Human Genetics, Graduate School of Medicine, University of Tokyo, Tokyo, Japan, [5]Department of Anesthesiology and Pain Relief Center, University of Tokyo, Japan

Varicella-zoster virus (VZV) causes both varicella and herpes zoster (HZ). Varicella is the primary infection with a viraemic stage, after which the virus persists in nerve ganglion cells. HZ is the result of reactivation of this latent virus. In some HZ patients who have sevear pain persistency more than three months after healing eruptions give a definition as post herpetic neuralgia (PHN). But , HZ is not observed in the patients of varicella and PHN is observed in to all the patients of HZ. This fact is conjectured to be generated according to the difference in an immunoresponse of the individuals to VZV. We have analyzed polymorphisms of HLA genes and 11 sets of microsatelite markers located in the HLA lesion to investigate genes related to PHN and HZ. A total of 214 Japanese patients (102 with PHN, 60 without

PHN and 52 controls) were genotyped by STB method for the class I loci, and PCR-RFLP method for the class II loci. We recognized positive associations of the development of PHN with HLA-A*3303-B*4003-DRB1*1302 haplotype, and negative associations of the development of PHN with HLA-B*4001 and negative associations of the development of HZ with HLA-B*5101. These associations were supported by the results of microsatellite analysis. So, these findings suggest that the genes related to response for VZV might existed in the HLA class I region rather than class II.

(P1-38) Genetics of KIR and HLA molecules and psoriasis

Masahiko Muto, Yu Suzuki, Yumie Ogasawara, Makoto Ichimiya, Yoshiaki Yoshikawa, Yoshiaki Hamamoto
Yamaguchi University School of Medicine

It has been well known that psoriasis vulgaris (PV) is associated with HLA class I antigens, especially HLA-Cw6, and is a chronic inflammatory skin disease via mainly immunocytes. Out of these immunocytes, recently NKT cells and some CD8+ T cells are considered to be more important in PV, and their activities are modified by several HLA-restricted molecules, namely Killer Ig-like Receptors (KIR). In order to investigate genetic relationships between KIR and HLA class I antigens in PV, 96 Japanese PV patients and 50 normal controls were collected. DNA typing of KIR was performed by a method of PCR-SSP.
The data showed that the frequency of activating KIR2DS1 was significantly higher in the PV patient group than in controls (43/96 (44.8%) vs. 14/50 (28.0%), $p < 0.05$), and also there was some absence of inhibitory KIR2DL1 in the PV patient group, but not in controls (7/96 (7.3%) vs. 0/50 (0%), $p > 0.05$, n. s.). Interestingly both of these two types of KIR are the molecules which can recognize HLA-Cw6. The subjects with activating KIR2DS1 are supposed to be susceptible to PV, and this activating KIR may play a key role in the activation of pathogenic NKT cells and some CD8+ T cells. The absence of inhibitory KIR2DL1 may also influence on this activation. The present data may lead to a new insight on the molecular basis concerning the pathogenesis of PV.

(P1-39) Genomic diversity of MHC as a hallmark in HIV vaccination approaches

Gurvinder Kaur, Paras Singh, Chowphie Chen Rapthap, Narinder Mehra
Dept Transplant Immunol & Immunogenet. All India Institute of Medical Sciences

MHC genes have been suggested to influence disease progression following HIV infection. Allelic variants of the HLA molecules can bind and display various HIV derived peptides with differing affinities to CTLs thereby influencing the efficiency of immune protection. Therefore, defining optimal restriction elements and relevant HIV epitopes conserved across global clades is a hallmark necessity of MHC based vaccine design. And this in turn, is limited by the extreme molecular diversity of MHC as well as hypervariability in HIV in different geographical populations. This study compares distribution patterns of molecular subtypes of HLA class I and class II extended haplotypes in India with reference to global distribution. In Caucasian populations, the A1-B8-DR3 haplotype (AH8.1) is at distinct biologic disadvantage as this is associated with fast progression to AIDS and also with a dysfunctional immune response and autoimmunity. In the Asian Indians, however, this haplotype occurs rarely and has been replaced by another independently evolved AH8.2, i.e. HLA-A26, -B8, -DR3. Its role in influencing HIV susceptibility in this population has been investigated. This observation alongwith (i) high preponderance of HLA-B*35Px alleles implicated in inefficient immune response and fast progression, (ii) low occurrence of a non-functional mutant allele of CCR5 (CCR5D32), and others in the Indian gene pool imply an immunogenetic basis for possible predisposition and fast progression of HIV infection in India.

(P1-40) Peptide carrying DQ6 motifs from human papilloma virus type 16 E7 protein with motif for HLA-DQ6 (B*0602) shows good TH2 cytokine response.

Carani B Sanjeevi[1], Valeria Tica[1], Lisen Arnheim[1], Joakim Dillner[2], Rodica Lenkei[1], Hans-Georg Rammensee[3], Stefan Stevanovic[3]
[1]Karolinska Institute, [2]Dept of Medical Microbiology, Lund Univ, Sweden, [3]Dept of Immunology, Univ of Tubingen, Germany

Carcinoma cervix is associated with Human Papilloma Virus (HPV). DQ6 (DQB1*0602) is positively associated with Cervical Intraepithelial Neoplasia (CIN), HPV16 positive CIN and Cervical Cancer in women from Northern Sweden. The aim of the study was to use peptides identified from screening HPV-E7 protein sequence using motifs from DQ6 molecule. These motifs were previously identified by peptide elution from DQ6 and peptide sequencing. Several peptides were identified. Eight of them were used for the T cell studies. Lymphocytes from women with HPV 16 infection who have cleared the infection compared to those who have not cleared the infection at one-year follow-up were studied.
Lymphocytes from two women were incubated (with and without Brefeldin) with peptides in four sets of experiments with 2 peptides pooled in each experiment. Monoclonal antibodies to CD8, CD4, CD69, TNFa and IFNg were used for further incubation. The cells and

the cytokines were subjected to 4-colour FACS analysis. The results showed, 4 of the 8 peptides were giving high IFNg secretion. Of the 4 peptides, one pool containing 2 peptides gave higher IFNg secretion from CD8 positive cells.
In conclusion, some of the peptides carrying DQ6 motifs from HPV-E7 protein produced IFNg secretion from CD8 positive cells when incubated with lymphocytes from women infected with HPV16. These interesting results might be useful for future prediction strategies for CIN and invasive cancer and for subsequent planning for intervention strategies.

(P1-41) Analysis of CD4/CD8 T cells and related cytokines in chronic rejection of kidney allografts.

Fumiya Obata[1], Midori Ohkubo[2], Kazunari Yoshida[3], Yoshinori Taoka[3], Yasuo Takeuchi[4], Nobukata Shinohara[2], Tadao Endo[5], Shiro Baba[3]
[1]Division of Immunology, Kitasato University School of Allied Health Sciences, [2]Div. Immunol. Kitasato Univ. Sch. Med., [3]Div. Urol. Kitasato Univ. Sch. Med., [4]Div. Internal Med. Kitasato Univ. Sch. Med., [5]Saitama Ken-o Hospital

To characterize the T-cells mediating chronic rejection (CR) of human kidney allografts, we performed RT-PCR analysis of mRNA for CD4, CD8, IFN-g, IL-4, and IL-10 in biopsy specimens. The mRNA expression were compared among following pathological groups: chronic allograft nephropathy (CAN: 8 cases), FK506/CyA-associated nephrotoxicity (Ntox: 6 cases), CAN + Ntox: 8 cases, no rejection (NR: 6 cases), and 1 hour biopsy (1h: 16 cases) as the negative control. These groups exhibited the following relation in CD4 expression: (CAN) = (CAN + Ntox) > (Ntox) = (NR) = (1h). The CD8 expression was (CAN) = (CAN + Ntox) = (Ntox) > (NR) >= (1h). In the cytokine analysis, the relation of IFN-g expression was (CAN) = (CAN + Ntox) >= (Ntox) > (1h). IL-4 was detected in one case each of CAN, CAN + Ntox, and CAN + Ntox + AR (acute rejection), whereas IL-10 was detected in two cases of CAN. These results suggested that CD4 T cells and IFN-g (Th1 response) contribute to most of CAN, and IL-4 and IL10 (Th2 response) to some CAN. On the other hand, these immunological factors exhibited the lesser extent of contribution in Ntox formation.

(P1-43) The regulatory role of p53 family members in thymic epithelal cells

Shingo Ichimiya, Tomoki Kikuchi, Yuichiro Hayashi, Nobuhiko Kondo, Noriyuki Sato
Department of Pathology, Sapporo Medcial University School of Medicine

The thymus is the primary lymphoid organ that provides an optimal milieu for the development of a functional T cell repertoire via major histocompatibility complex (MHC)-based selection. This inductive environment is constituted by various stromal cells, including thymic epithelial cells (TECs), which compose largely stationary stromal cells. TECs make the three-dimensional framework within which all other thymic cell types reside, although regulatory mechanisms of TECs are mostly unknown. In this study, we investigated the functional significance of p53 family members such as p63 and p73 in human TECs because they showed epitheliotropism in other tissues. The results demonstrated a particular distribution pattern of p53 family members in thymic epithelium, in which cortical TECs preferentially expressed p63 in their nuclei whereas subcapsular / perivascular and medullay TECs displayed nuclear localization of both p63 and p73. More interestingly, it was found that p63 regulated the expression of intercellular adhesion molecule-1 (ICAM-1) and HLA-DR by in vitro studies using human TEC lines. TEC lines transfected with p73 showed the enhancement of the secretion of various cytokines including GM-CSF and M-CSF. This would probably explain the fact that dendritic cells and other cells are localized mainly around subcapsular / perivascular and medullay TEC in human thymus. These suggest that p63 and p73 of p53-related transcription factors are actively involved in preserving thymic microenvironment in their specified regions.

(P1-44) Identification of SH2D1A mutation in a hypogammaglobulinemic male diagnosed as having common variable immunodeficiency

Asghar Aghamohammadi, Hirokazu Kanegane, Mostafa Moein, Abolhasan Farhoudi, Zahra Pourpak, Masoud Movahedi, Mohammad Gharagozlou, Ali Akbar Amir Zargar, Toshio Miyawaki
Department of Clinical Pediatric Immunology, Children's Medical Center Hospital, Tehran University of Medical Sciences, Tehran, Iran. Department of Pediatrics, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University, Toyama, Japan

Common variable immunodeficiency (CVID) is a highly heterogeneous disease with an unpredictable pattern. CVID appears to have a similar immunological and clinica phenotype to some hereditary humoral immunodeficiency, including X-linked lymphoproliferative disease (XLP). The differential diagnosis between CVID and XLP is clinically importance, since they have markedly different prognoses and treatment. The recent identification of XLP gene, known as SH2D1A, has permitted definitive diagnosis of XLP. In this report, we describe a male patient with XLP, who was initially diagnosed as having CVID and developed a fatal course. Using genetic analysis, he was confirmed to harbor the SH2D1A gene mutation. The results support the notion that the possibilities of SH2D1A gene mutation

should be considered in hypogammaglobulinemic male before diagnosis of CVID is made.

(P2-1) Is the frequency of novel alleles arising as the result of a single nucleotide polymorphism being underestimated?

R S Whidborne, D C Sayer, L Figliomeni, L K Smith, F T Christiansen
Department of Clinical Immunology and Biochemical Genetics, Perth, Western Australia

Our Department has used Sequence Based Typing (SBT) for all routine HLA DRB1 typing since 1998 and for all routine HLA -A, -B and -C typing since 2002. In that time we have identified 11 novel alleles; 2 at HLAA, 3 at HLAB, 3 at HLAC and 3 at HLA-DRB1 within our local population. These novel alleles have all arisen as the result of a single nucleotide polymorphism (SNP) and are not due to the shuffling of sequence motifs. Five of the 11 SNP's are found within normally non-polymorphic regions of the gene, and these have resulted in amino acid changes. The remaining 6 SNP's are in variable regions of the gene. Two of these, B*40XX and DRB1*1509 are unique SNP's to the new allele and have resulted in an amino acid change.
SBT detected all 11 novel alleles identified in our population. A commercially available SSO kit did not detect DRB1*1509, and it is unlikely that either SSO or SSP methods would detect polymorphisms within conserved regions of the gene.
Our data suggests that SNP's are the most common cause of newly identified alleles, and that by using alternate methods such as SSO or SSP, their frequency is being underestimated.

Locus	Allele	Position	AA change	Conserved or Variable region
HLAA	[1]A*03/11	exon3	no	Conserved
	[1]A*01/02	exon2	yes	Conserved
HLAB	[3]B*0717	exon3	yes	Variable
	[2]B*3924	exon3	yes	Conserved
	[1]B*40XX	exon3	no	Variable
HLAC	[1]C*06XX	exon2	yes	Variable
	[1]C*07XX	exon3	yes	Conserved
	[2]C*0310	exon2	yes	Variable
DRB1	[3]DRB1*1509	exon2	yes	Variable
	[3]DRB1*1434	exon2	yes	Variable
	[1]DRB1*04XX	exon2	no	Conserved

[1] further evaluation in progress before submission to WHO Nomenclature Committee.
[2] novel when identified in our laboratory, but submitted by another group to the WHO Nomenclature Committee.
[3] identified and submitted by DCI to WHO Nomenclature Committee.

(P2-2) Identification of a "novel" non-HLA antigen in Oriental populations

Yang[1], KL, Schroeder[2], ML, Yeh[1], CC, Cherng[3], JM and Lin[1,3], PY
[1]Tzu Chi Cord Blood Bank, Tzu Chi Stem Cells Centre, Buddhist Compassion Relief Tzu Chi Foundation, Hualien, Taiwan, [2]University of Manitoba, Manitoba, Canada and 3Tzu Chi Medical Centre, Buddhist Compassion Relief Tzu Chi Foundation, Hualien, Taiwan

In a routine HLA antibody screening cross-match test using the complement-mediated lymphocytotoxicity assay, we discovered an antibody, in a transfused Caucasian woman, recognizing an Oriental restricted antigen that does not appear to be associated with the human leukocyte antigens (HLA) system. The antigen was tentatively named CY (dedicated to the founder of Buddhist Compassion Relief Tzu Chi Foundation, Dharma Master Cheng Yen). CY antigen was found in Chinese, Japanese, Vietnamese and Thai people suggesting that some of these people are closely related. To our knowledge, this is the first confirmed non-HLA antigen restricted to the Oriental ethnicity. The characterization, distribution of this "novel" non-HLA antigen in Taiwanese population and the results of family studies will be presented.

(P2-3) Genome-wide association study of human narcolepsy using 25,000 microsatellite markers with pooled DNAs

M. Kawashima[1], T. Ikuta[2], G. Tamiya[2], H. Hohjoh[1], T. Juji[3], Y. Honda[4], K. Tokunaga[1], H. Inoko[2]
[1]Department of Human Genetics, Graduate School of medicine, University of Tokyo, Tokyo, Japan, [2]Department of Molecular Life Science, Tokai University School of medicine, Kanagawa, Japan, [3]Japanese Red Cross Central Blood Center, Tokyo, Japan, [4]Sleep Disorder Clinic of Seiwa Hospital, Tokyo, Japan

Narcolepsy is one of a sleep disorder and also a multifactorial disorder. A genetic factor associated with the disorder has been found in the human leukocyte antigen (HLA) region: HLA-DRB1*1501-DQB1*0602 haplotype confers strong predisposition to narcolepsy.
We performed the genome-wide association study using about 25,000 microsatellite markers as a tool for searching disease susceptibility regions. The subjects investigated in this study were all Japanese living in the Tokyo area. One hundred and five narcoleptic patients were pooled for the 1st set and the other 110 samples were pooled for the 2nd set. Similarly, 210 unrelated healthy individuals as controls were pooled for the 1st set and the other 210 samples were pooled for the 2nd set. We used the 1st set pooled DNA for the primary screening of microsatellite markers and the 2nd set for the second screening to avoid false positive associations. Allele frequencies were estimated from heights of the peaks detected by an automated sequencer (ABI 3700) with GeneScan software. Then, we performed Fisher's exact test using 2×2 or $2 \times m$ (m; allele number) tables. After the analysis, five markers showed the significant differences in both screenings ($p < 0.001$). These markers still showed strong associations with the disorder in the following analysis using all individual samples. Three candidate regions are now subjected to SNP analysis to further narrow down the susceptibility regions of narcolepsy.

(P2-4) Molecular genetic analyses on human NKG2C (KLRC2) gene deletion

Risa Miyashita*, Naoyuki Tsuchiya1*, Koki Hikami*, Kimiko Kuroki*, Toru Fukazawa†, Marc Bijl‡, Cees G. M. Kallenberg‡, Hiroshi Hashimoto†, Toshio Yabe§, Katsushi Tokunaga*
*Department of Human Genetics, Graduate School of Medicine, The University of To kyo, Tokyo, Japan, †Department of Rheumatology and Internal Medicine, Juntendo University, Tokyo, Japan, ‡University Hospital Groningen, Groningen, The Nether lands, §Tokyo Metropolitan Red Cross Blood Center, Tokyo, Japan.

Human NKG2A, NKG2C and NKG2E genes are located on 12p13 in the natural killer gene complex. We recently identified deletion of NKG2C in a Japanese population. This study was performed to identify the breakpoint and to examine the association of NKG2C deletion with susceptibility to rheumatoid arthritis and systemic lupus erythematosus. By comparing the genomic sequences between NKG2A and NKG2E, the breakpoint was determined to be 1.5–1.8 kb telomeric from the 3′ end of NKG2A. Based on this information, a genotyping system was developed. Frequency of NKG2C deletion haplotype was 20.2% in Japanese and 20.0% in Dutch populations. Frequency of homozygous deletion was 4.1% in Japanese and 3.8% in Dutch. Evidence for an association with rheumatic diseases was not detected. These results indicated that NKG2C deletion is commonly present in Japanese and Dutch, suggesting that NKG2C is not essential for survival and reproduction, and is not associated with rheumatic diseases.

(P2-5) Association of *LIR6* (*LILRA1*) polymorphisms with susceptibility to systemic lupus erythematosus

Kimiko Kuroki[1], Naoyuki Tsuchiya[1], Toru Fukazawa[2], Takeo Juji[3], Hiroshi Hashimoto[2], Katsushi Tokunaga[1]
[1]Univ of Tokyo, Dept of Human Genetics, Tokyo, Japan, [2]Juntendo Univ, Dept of Rheumatology and Intern Med, Tokyo, Japan, [3]Japanese Red Cross Central Blood Center, Tokyo, Japan

LIRs are activating or inhibitory receptors expressed in hematopoietic cells. *LIR6* (*LILRA1*) is an activating receptor expressed on B cells, monocytes/macrophages and dendritic cells and binds to HLA-class I molecules. Although two splicing isoforms exist, functional differences among them are not clear. In this study, we performed a polymorphism screening and also examined for the association with systemic lupus erythematosus (SLE). Direct sequencing of the genomic DNA from 18 Japanese individuals revealed 24 SNPs, including 8 nonsynonymous substitutions, *V5L*, *R12G*, *H164Y*, *S194W*, *L220P*, *R289P*, *Y291H* and *Y301H*. Analysis of 31 Japanese families revealed that these SNPs form two major haplotypes in each of the promoter and extracellular regions, and they showed significant linkage disequilibrium both in the controls and SLE patients (RLD = 0.98 and 1, respectively). Case-control association study was done on 163 SLE patients and 414 controls by direct sequencing or PCR-SSCP, based on the assumption that the haplotypes are conserved in Japanese. Carrier frequencies of one of the promoter haplotypes and one of the extracellular region haplotypes were significantly decreased in SLE (P = 0.01, OR = 0.63 and P = 0.005, OR = 0.59, respectively). Significant linkage disequilibrium was not present between *LIR1* (*ILT2*, *LILRB1*) and *LIR6* haplotypes. These results suggested that the polymorphism of *LIR6* is associated with susceptibility to SLE in Japanese through changes in the expression level and/or the binding activity with HLA-class I.

(P2-6) Association of leukocyte immunoglobulin-like receptor 1 (LIR1, ILT2, LILRB1) polymorphism with susceptibility to rheumatoid arthritis (RA) in Japanese

Kimiko Kuroki[1], Naoyuki Tsuchiya[1], Katsumi Maenaka[2], Linda Rasubala[2], Mitsunori Shiroishi[2], Kunio Matsuta[3], Daisuke Kohda[2], Takeo Juji[4], Katsushi Tokunaga[1]

[1]Univ of Tokyo, Dept of Human Genetics, Tokyo, Japan, [2]Kyushu Univ, Division of Structural Biology, Fukuoka, Japan, [3]Matsuta Clinic, Tokyo, Japan, [4]Japanese Red Cross Central Blood Center, Tokyo, Japan

LIR1 is an inhibitory receptor broadly expressed in hematopoietic cells, and recognizes HLA-class I and cytomegalovirus UL18. In this study, we considered *LIR1* as a candidate susceptibility gene to RA, and performed a polymorphism screening and association analysis. Direct sequencing of the genomic DNA from 18 Japanese individuals revealed 17 SNPs, including 5 nonsynonymous substitutions, *P68L*, *A93T*, *I142T*, *S155I* and *E625K*. Analysis of 31 Japanese families showed 3 major haplotypes of these SNPs in Japanese (*LIR1.01*, *.02* and *.03*). We next performed a case-control study using 559 patients with RA and 449 Japanese healthy controls. The association of *LIR1* with total RA did not reach statistical significance; however, when the association was examined in HLA-DRB1 shared epitope (SE) positive and negative groups separately, *LIR1.01/01* diplotype was significantly increased in RA in the SE negative group (P = 0.037, OR = 1.86). *LIR1* polymorphisms were in linkage disequilibrium with neither *LIR6* nor *LIR5*, closely located on each side of *LIR1*. Since these haplotypes encode amino acid substitutions in the putative ligand binding domains, we examined whether they cause changes in the ligand-binding affinity using BIACORE system. *LIR1.01* product showed lower affinity to HLA-B35 compared with other two haplotype products (Kd; LIR1.01 = 50 μM, .02 = 22 μM, .03 = 26 μM). These results suggested that LIR1 may be associated with susceptibility to RA through insufficient inhibitory signals caused by the lower affinity with HLA-class I.

(P2-7) Association study on abdominal aortic aneurysm using microsatellite markers located in the HLA region

Masao Ota[1)], Masaharu Sada[2)], Tomohiko Sugimoto[3)],Yoshihiko Katsuyama[4)], Rieko Goto[2)], Kazuhiko Yamada[2)], Takashi Miyamoto[3)]

[1)]Dept. of Legal Med., and [4)]Dept of Pharmacy, Shinshu Univ. School of Med., Matsumoto, [2)]Dept of Regenerative Med., National Cardio Vascular Center Research Institute, Suita, and [3)]Dept of Thoracic Surgery, Hyogo Collage of Med, Hyogo, Japan

Abodminal aortic aneurysms (AAA) are common disease of maturity. Autoimmunity has been proposed to play a role in the pathogenetics of AAA. In the spectrum of autoimmune disorders certain HLA alleles are reported to be associated with the development of disease. We previously reported a linkage of the HLA-A2, -B61 and -DR15 antigens to the susceptibility to AAA in Japan. In the present study we performed association analysis with 19 microsatellite markers (D6S439, TAP1, D6S2444, D6S2443, T16, CAT, DQ-CARII, D6S273, TNFd, TNFa, C1-2-A, MICA-TM, MIB, C1-4-1, C1-2-5, C1-3-1, C2-4-4, C3-2-11, D6S276) in the HLA region to refine the susceptible gene involved in the development of AAA. And we also examined the susceptibility of TAP2 gene to AAA. We used genomic DNAs from 49 patients and 248 unrelated Japanese healthy controls for the association study. Positive association to AAA susceptibility was observed in the frequent alleles of each microsatellite marker located in the class I region, although negative association was seen in the class II region. Allele 200 of TAP1 microsatellite located between HLA-DQ and DP loci was significantly negatively associated with AAA (OR = 0.15, P = 0.003). TAP2*0101 frequency in patients group was significantly lower than control group (29% vs. 41 %, P = 0.03). These results suggest that TAP gene seems to control the development of AAA.

(P2-8) A susceptibility gene mapping for developing non-obstructive azoospermia by microsatellite markers located in the HLA region.

Yoshihiko Katsuyama[1)], Masao Ota[2)], Masaharu Sada[3)], Akira Tsujimura[4)], Hidenobu Miura[4)], Kiyomi Matsumiya[4)], Reiko Gotho[3)], Takeshi Nakatani[3)], Akihiko Okuyama[4)], Shiro Takahata[4)].

[1)]Dept. of Pharmacy, and [2)]Dept. of Legal Med., Shinshu Univ. School of Med., Matsumoto, [3)]Dept of Regenerative Med. National Cardio Vascular Center, Suita, [4)]Dept of Urology, Osaka Univ. Graduate School of Medicine, Suita, Japan.

Congenital dysfunction in spermatogenesis, referred to as non-obstructive azoospermia, is presumed a result of genomic abnormalities. We considered the importance of the genetic background of non-obstructive azoospermia and reported that HLA A33-B44-DRB*1302 haplotype is associated with susceptibility to this disease in Japanese men. In present study, to search for more precise region involving in the development of non-obstructive azoospermia, we performed the association analysis with 21 polymorphic microsatellite markes located in the HLA region. We used genomic DNAs from 67 infertile Japanese men with non-obstructive azoospermia and 248 unrelated healthy Japanese donors for association study using microsatellite markers. The results disclosed that microsatellite markers located in the

HLA class I region or the class III region showed no statistically significant association with this disorder, although the HLA A33-B44 alleles showed a significant association. In contrast, some of the microsatellite markers in the HLA class II region and the HLA-DRB1 and -DQB1 loci showed strong associations with non-obstructive azoospermia. These data suggest that the critical region for development of non-obstructive azoospermia is near the HLA-DRB1 and -DQB1 segments in the HLA class II region.

(P2-9) Susceptibility gene mapping for autoimmune pancreatitis in the Japanese population.

Masao Ota[1)], Shigeyuki Kawa[2)], Akinori Kimura[3)], Yoshihiko Katsuyama[4)], Kaname Yoshizawa[2)], Akira Horiuchi[2)], Hideaki Hamano[2)], Hirofumi Fukushima[1)], Kendo Kiyosawa[2)].

[1)]Dept. of Legal Med., [2)]Second Dept of Internal Med., and [4)]Dept of Pharmacy, Shinshu Univ. School of Med., Matsumoto, and [3)]Dept. of Molecular Pathogenesis, Medical Research Institute, Tokyo Medical and Dental University, Tokyo, Japan

Autoimuune pancreatitis (AIP) is associated with hypergammaglobulinemia, histologic evidence of lymphoplasmacytic inflammation, occasional coexistence of other autoimmune diseases, and a favorable response to glucocorticoid treatment. We have previously reported that this disease is entity characterized by high serum immunoglobulin G4 concentrations and associated with the HLA-DRB1*0405-DQB1*0401 haplotype. In the present study, we have performed association analysis to search definite location for susceptibility to AIP and to refine the genetic contribution in AIP development. We examined polymorphisms of 21 micro satellite markers distributed in the HLA region and polymorphisms of 5'-flanking region of the TNFA and IkBLI genes in susceptibility gene mapping. Genomic DNAs from 40 AIP and 210 unrelated Japanese controls are used for analysis. Detection of polymorphisms in the 5'-flanking region of the TNFA and IkBL1 genes were determined by PCR- SBT and PCR-SSCP methods. Statistical studies of associated alleles on each microsatellite locus showed that the susceptibility segments for AIP in the HLA region is localized only around the HLA-DRB1 and -DQB1 loci. No statistically strong association was observed in the class III and class I regions. There were also no significant differences in the frequency of alleles in the promoter regions of TNFA and IkBL1 genes. These results suggest that DRB1 and DQB1 genes seem to control the development of AIP.

(P2-11) A naturally selected dimorphism within the HLA-B44 supertype alters class I structure, peptide repertoire and t cell recognition

W.A. Macdonald[+1], A.W. Purcell[+1], N. Mifsud[1], L.K. Ely[2], D.S. Williams[1], C.S. Clements[2], L. Kjer-Nielsen[1], A.G. Brooks[1], J. Rossjohn[2] and J. McCluskey[1]

[1]Department of Microbiology & Immunology, University of Melbourne, Parkville, Victoria 3010, Australia;[2] The Protein Crystallography Unit, Department of Biochemistry and Molecular Biology, School of Biomedical Sciences, Monash University, Clayton, Victoria 3168, Australia.

HLA-B*4402 and B*4403 are naturally occurring MHC class I alleles that are both found at a high frequency in all human populations and yet they only differ by one residue on the a2 helix (B*4402 Asp156 → B*4403 Leu156). CTL discriminate between HLA-B*4402 and B*4403 and these allotypes stimulate strong mutual allogeneic responses reflecting their known barrier to hemopoeitic stem cell transplantation. While HLA-B*4402 and B*4403 share >95% of their peptide repertoire, B*4403 presents more unique peptides than B*4402, consistent with the stronger T-cell alloreactivity observed towards B*4403 compared with B*4402. Crystal structures of B*4402 and B*4403 show how the polymorphism at position 156 is completely buried and yet alters both the peptide and the heavy chain conformation, relaxing ligand selection by B*4403 compared with B*4402. Thus, the polymorphism between HLA-B*4402 and B*4403 modifies both peptide repertoire and T cell recognition, and is reflected in the paradoxically powerful alloreactivity that occurs across this 'minimal' mismatch. The findings suggest that these closely related class I genes are maintained in diverse human populations through their differential impact on the selection of peptide ligands and the T cell repertoire.

[シリーズ: HLA 研究者の個人史]
私の個人史から見た HLA 研究

吉田 孝人

浜松医科大学・光量子医学研究センター

はじめに

「めぐり合い人生」

私の個人史から研究を振り返ってみると，“全てめぐり合い人生”で，“人生は出会いで始まり出会いで築かれる”と言っても過言でもないように思えてならない。出会いは人との出会いだけではない，大自然との出会いもまたしかりである。そして，新口生物がたどってきた域を抜け出していない。

「チャンスは掴むもの／棚からぼた餅ではない」

それではその人の個性がないように聞こえるが，そうではない。

“めぐり合い”の中から，その人が掴んだ・選んだことが連続的に織り成し，進化(変化)して，全てを引きさげているように思える。それが個人史で，連続して途切れていない。

「感銘は発明の母／感銘は努力の母」

その人の感性は感銘から個性を生み，その個性と能力はその人の置かれた環境の中で豊かに育ち，研ぎ澄まされ，チャンスをつかみ，益々豊かになる。

「全力をつくして天命を待て」

その過程には運，鈍，根が加わり，物事が成し遂げられ，時間が物事の区切りをつける。

「歴史は繰り返される／感動する心を持ち続けよう」

対象になる興味／感銘することは繰り返される。その時には宇宙の神秘，地球上に生かされている素晴らしさ，自然の不思議な連鎖，心の尊さ，自然の愛の深さを知り感動する。それが人間と言うもの，理想であろう。

HLA との出会い

私は 1965 年，愛知県がんセンター・研究所ウイルス部室長として赴任した。Ann Arbor のミシガン大学・微生物学教室 (1959–1962 Research associate) から New York の Sloan-Kettering Cancer Center (1962–63 Visiting research fellow) へ移り，開始した自家腫瘍免疫の存在を明らかにした研究を，帰国後，引き続き東大・伝染病研究所，北里研究所で行い，ウイルス部に就任しても続け，ヒト白血病にも存在する事を IA 法で見出した。更にパピロマウイルス免疫の研究が始まり，軌道に乗った頃，EB ウイルスを中心とした日中共同研究がボスの伊藤洋平先生を班長として 1969 年から台湾で始まった。このプロジェクトに免疫担当として参画，上咽頭癌の患者に 40% もの高率で抗核抗体の出現する事を見つけた。どうしてか？ 癌と自己免疫，60% の抗核抗体陰性の人と遺伝背景は異なるのか，等々知りたかった。そこで，辻公美先生の門を叩く。当時，辻公美先生は Dr. B. Amos (Duke University) のところへ留学，帰国して慶応大病院検査室の一部(地下)に HLA ラボを構えて，血液からリンパ球を分離して，その細胞膜表面に出現している抗原 (HLA) を Amos 法で検出しておられた。

1957 年 (1954–1959)，Dr. J. Dausset によって白血球膜に Mac 抗原が白血球膜に発見されて以来，爆発的に研究が世界に広がっていった。1964 年 (S39)，Dr. Amos によって第 1 回国際 HLA ワークショップ (1st IHWS) が Durham, USA で開かれ，1970 年には 4th IHWS が Dr. P. Terasaki によって Los Angels

筆者連絡先 〒431–3192 静岡県浜松市半田山 1–20–1
浜松医科大学・光量子医学研究センター
吉田 孝人
電 話 053–435–2092
E-mail takato-k@fantasy.plala.or.jp

で，又，汎太平洋 HLA 会議が東京で Dr. Amos — Dr. 石橋によって開催された。辻先生の張り切っておられた顔が思い出される。ここで，Bernard Amos 先生を紹介され，出会う。石橋教授(東大・伝染病研究所・外科教授)とは私が米国留学から帰国後 2 年間，東大・伝染病研究所細菌第二研究部(山本郁夫教授)で自家腫瘍免疫の研究を引き続き行っていたので交流があり，よく存じ上げていた。

この頃より NIH の HLA タイピング法が定着し始めた。それまでは Dr. Dausset の始めた試験管内細胞傷害試験を使用。数年後は複数の抗原が見つかり，タイピングはガラス板(プレート)の上で 20 以上の抗血清と反応させるスカンジナビア法(デンマーク，スエーデン，ノルエー，北ドイツを含む移植グループ)，60 穴テラサキプレートを用いた Terasaki グループの Terasaki 法，Amos グループの Amos 法があった。Terasaki 法が元になって流動パラフィン下で抗血清 one λ，リンパ球 2000 個 / λ，補体・ウサギ生血清 3–5λ を反応させ，リンパ球の生死判定はエオシン Y で行う微量細胞傷害試験 (Microcytotoxicity Test) が NIH 法となって，国際標準化が進んだ。

この方法を手作業で完了するには人手が必要であったり，入れ間違いが発生したり，大量のサンプルをこなす事が不可能で，いろいろ課題が出てきていた。

当時，自動的にリンパ球・抗血清をテラサキプレート(10λX60 穴)に注入する装置の開発(後に，総研バイオ社長の飯田省己さんによってラムダ・ジェット式ドッティングマシンが開発・作製された)や，エオシン Y を入れる小道具(外国よりのジェットピペット)，速やかに判定するシステム(後に，飯田さんによって顕微鏡のステージムーバが開発・作製された)が待ち望まれていた。

「抗血清はダイヤモンド／抗血清は麻薬のようだ」

愛知県がんセンター病院・臨床検査部から大学院マスターコースを終了(植物 DNA 専攻)したばかりの赤座達也さんがトレーニングを目的に研究所ウイルス部免疫室・吉田のところへ，1970 年から預けられ，オーストラリア抗原，α–Fetoprotein の検出を始めた。其の傍ら Amos 先生から HLA タイピング抗血清の恵与を受けて HLA タイピングもスタートした。がん患者のリンパ球は抗がん剤を使っているので，死にやすく，なかなかタイピングが思うようにいかなかったので，私達も日本人・妊産婦から抗血清を戴き，だんだんと軌道に乗せた。赤座さんが努力して産後の胎盤から集めた抗血清を AY シリーズとし，整理した。その中に HLA–B26.1 や B40 サブタイプ(スピリット)の新抗原をタイプする抗血清が見つかった。1974 年から始まった第一回日本 HLA ワークショップにも参画し抗血清の交換も出来るようになった。1977 年夏 7th International Histocompatibility Workshope and Conference (7th IHW&C, DR.W. Bodmer, Oxford) が英国オックスフォード大で開催された。赤座さんを連れて，日本人の新しい抗原として B40 サブタイプのデータを持って，始めて国際ワークショップに参画した。Dr. Kissmeyer-Nielsen (デンマーク)司会のグループに配属され，データを発表したが，前の年 Kissmeyer-Nielsen 先生達がイヌイット(エスキモー)で観察していた抗原と同じ物ではないかと推定された。当時，各国で抗血清を集め，新しい抗原が次から次へと見つかってきた。このワークショップにおいてリンパ球混合培養で反応する抗原 (HLA-D) が抗血清でタイプされ，DR として命名されて認められた。HLA-DR が HLA-A, -B, -C と肩を並べ，移植，特に免疫応答に重要であることが示され注目を浴びた。ヒト MHC の HLA も Dr. J. Klein の提唱したマウス MHC の H-2 に習ってクラス I (A, B, C) とクラス II (DR) に分類することになった。

この時より私は民族の HLA，日本人はどこから来たのか？ 興味を持つようになった。国単位に，国際レベルでワークショップが開催され，新しい抗血清，抗原を認め合うという大きな流れができてきた。HLA をタイピングする抗血清は参加者内でのみ交換が進み，お金では買えない超高価なもの，ダイヤモンド・麻薬のようなものに映った。このような国際レベルのワークショップを開きながらヒト・民族を対象にした HLA 研究は進展をみた。(1)

「グループ／仲間／日米共同研究」

1971 年の夏のこと，第 1 回国際免疫学会がワシントンで開催された。この春 WHO の Traveling Fellowship をもらって，スエーデンの首都ストックホル

ムにあるKarolinska InstituteのProf. George & Eva Kleinの下に共同研究に出かけた。腫瘍細胞を殺す免疫反応抗体依存性細胞傷害（ADCC）のあることを明らかにした。また，T-cellの膜にFc receptorがあることを発見，このデータを持って，スエーデンの帰路，米国のワシントンで開催された第1回国際免疫学会に出席した。このとき，辻先生とよく相談・打ち合わせたことについて，Amos先生と山村雄一先生と何度となく電話で相談した。山村先生はHLAの重要性をよくご理解してくださり，温かいアドバイスにより，日米科学研究に申請することになった。帰国して，早速，辻先生と一緒に稲生綱政教授を伝染病研究所に訪ねて，日本の代表になって頂くことをお願いした。米国側の代表としてはAmos先生になっていただき文部省に申請した結果，成立する運びとなった。日本側: Drs. 稲生，相沢，辻，吉田，野本，板倉，折田，松倉等など，米国側: Drs. Amos, Terasaki, Payne, Yunis, Yokoyama 等などの面々であった（1）。

「Santa Barbaraの誓い／研究会・学会」

そのかいあって，日本の共同セミナー基金で1972年にはSanta Barbara, Californiaで第1回US-Japan HLA共同セミナー（Dr. Amos — Dr. 稲生）が開かれた。欧米より10年遅れをとっていた。我々は追いつけ，追い越せとホテルの一室に集まり対策を練った。

その結果，1973年には第1回日本組織適合性研究会（村上省三会長，相沢幹大会長）が札幌で開催。文部省特定研究「免疫の基礎」（総班長山村雄一）の中でHLAに関連した相沢班も発足した。日本でもヒト免疫遺伝学が本格的にスタートしたのであった（1）。笹月健彦先生はハワイで開かれた第2回日米共同セミナーから参画した。

そこで，HLA関係の研究会・学会の推移に関連して私の以下の略歴の中から2, 3の話題を拾ってみることにする。

日本組織適合性研究会幹事（昭和48年，1973–平成4年度, 1992）（事務局十字猛夫幹事）
日本組織適合性学会理事，評議員（平成4年，1992–現在）（事務局十字猛夫理事，猪子英俊会長）
日本組織適合性学会会長（平成6年，1994，7月–8年，1996，9月19日）
同上監事（平成8年，1996，9月19日–現在）
第10回日本HLAワークショップ代表世話人　平成2年, 1990, 7月，浜松
第11回IHW&C国内運営委員　平成3年, 1991, 11月，横浜
国際難病シンポジュウム「遺伝子発現の特異的制御—難病の解明に向けて—」企画・実行委員長 平成2年11月，東京
第3回日本組織適合性学会総会大会長　平成6年，1994，7月 浜松

研究会（1973年発足，36回目）が学会に衣替えをしたとき（1991），第1回組織適合性学会（柏木登大会長）理事会で学会誌を発刊する話が持ち上がった。会長の相沢先生から編集担当理事の私にその任を託された。そこで，案ができ，理事会を通し（第2回同学会，片桐一大会長），学会誌「*MHC* & IRS」が発刊となった（1994）。どこにおいても目立つようにと，家内と“Yellow and Blue”の二色を選んだ。この色は若者に“希望と夢”を与えてくれるもので，我々が留学していた米国ミシガン大学とスエーデンの色でもあった（2，3）。私が会長を引き継ぐことになり，猪子英俊先生が編集担当理事となり，学会誌は「MHC」として発刊を途切れることなく続けることができた。そして，2003年より徳永勝士編集担当理事へとバトンが引き継がれた。ここで，“Yellow and Blue”の二色の学会誌は10年のお役目を果たし，衣替えをして，落ち着いた学会誌らしい表紙となった。学会員も年齢を重ね，HLAの基本的なDNA配列は読み終わった現在，HLA研究の方向性・内容は個人のDNA配列に向けられ，健康・疾病と結びついて，DNAデータベース作りとその機能解明へと進展し始めた。

「心眼は努力の中から生まれる／繰り返しの中から生まれる心眼」

赤座さんはHLAに興味を持ち，のめりこんで行った。日本人の抗血清を集め，タイピングをしてHLAを心眼で決めるその努力，朝から晩までタイピングプレートに刻まれたリンパ球の生死のパターンをじっと見ながらHLAのタイプを決める。毎晩楽しみにしている晩酌の後もそのパターンを眺めていた

そうである。

当時，我々は東海地区HLA研究会を立ち上げ，皆で勉強をして切磋琢磨した。そのメンバーの中には現在，骨髄幹細胞移植で活躍している森島泰雄先生(愛知県がんセンター病院・血液化学療法部長)や小児白血病—骨髄幹細胞移植とHLA・SNPsで活躍している矢崎信先生(名市大・大学院小児科臨床教授)がいた。矢崎先生は医学部の学生の時，愛知県がんセンター・研究所の我々の研究室へよく出入りしていた。矢崎先生は米国留学前，浜松の聖隷病院へ移り，私達の浜松医大・微生物学教室に研究に通って来ていた。

また，愛知県がんセンター病院の中に外国へ研修に行く奨学制度ができたので，赤座さんを推薦 Dr. Paul I Terasakiのところに留学することになった。アメリカで磨きをかけて帰国した。東海地区の宝になり，1982年に名古屋第二赤十字病院・地方腎移植センター組織適合検査室に移り，HLA室を立ち上げ軌道に乗せた。続いて日赤中央血液センターへ抜擢され，日本の赤座となり，この道一筋に頑張り始めたのである。コンピュータのプログラム・ソフトつくりが得意な赤座さんは，日本のHLA研究になくてはならない人となった。今でも日本骨髄移植に関する事業で活躍している。

愛知県がんセンター時代から集めた抗血清にAYシリーズのナンバーをつけ，A: Akaza / Aichi，Y: Yoshidaは引き継がれ，活躍してきた。今でも時々AYナンバーのついている抗血清に会うことがある。DNAタイピングに切り替わった現在でも細胞膜上のHLA抗原が問題になるとき，抗血清・モノクロナール抗体が必要になる。我々のワークショップコードは国際的にYOS，国内ではFであった(4)。

「私の夢も消えずに燃え続ける／DNAタイピングの時代到来」

私達は1991年秋の11th IHW&C (Tuji / Aizawa / Sasazuki, 横浜)ではハルビン医科大学の干維漢学長，武常利先生達と共に中国東北部シベリアに近い処に住むオロチョン族のHLAを初めて世界に示した。日本人に近い事が分析結果判明し，世界の民族のHLA遺伝子系統樹に加わった。徳永先生のご好意で補体の遺伝子(クラスIII)も調べることができ，ハプロタイプとして解析し発表することが出来た。この国際ワークショップに先駆けて1990年7月20–22日，第10回日本HLAワークショップ(吉田孝人・赤座達也，浜松)を浜松医大において58施設100余名の参加を得て開催した。日本のDNAタイピングデータとBiochemistryのデータを血清学でタイプしたHLAの結果と共に，総合的に話し合う国内最初のワークショップとなった。その結果，日本人に新らたなクラスI抗原を14見出すことができた(1, 5)。そして，翌秋の横浜で開催された11th IHW&C (7)へと自信を持ってなだれ込んだのであった。

私たちの教室では小出幸夫(現浜松医大・微生物学教室教授)と松原享一(当時研究生，現在中外研究所部長)が中心になって，アイソトープを用いないPCR-HPA法 (hybridization protection assay) を開発して，DNAタイピングを可能にした。この方法はDNAタイピングをセミオートメーション化出来る可能性を含んでおり，11th IHW&Cで注目を浴びた。また，海藤敏雄(当時助手，現福井大学助教授)を中心としたグループは血清学グループと共同で血清学的に同定されたspilit抗原，及び新抗原をone dimensional isoelectric focusing (1D-IEF) で明確にした。これらのデータは11th IHW&Cで世界のBiochemistry groupのまとめを担当した我々の教室の基礎となり，10th IHW&CのDr. Soo Young Yangが担当したBiochemistry groupに引き続き足跡を残した(7)。

第3回日本組織適合性学会の大会長として私は推挙され，1994年7月に大会を浜松で開催した。Drs. D. Charron and J. Hansenを招待して12th IHW&Cの準備，Bone Marrow Stem Cell TransplantationとHLA抗原を介したsignalingのシンポジュームが開かれ，大会は成功した(6)。

退官(1996年3月)後，客員教授をしていた昭和大学医学部・微生物学教室においてPCR-HPA法を駆使して，HLAタイピングのセミオートメーション化を試みた。PCRとHPA法を組み合わせた世界最強の方法であった。PCR及び反応を行う機器，発光させて読み取る機械(オートマティクに読み取る)等々を並べて，私1人で1日20検体のクラスII (DR) を決めることができた。しかし，キットを担当したス

ポンサーの力足らずで，Fred Hutchinson Cancer Centerでも試して，認めて頂いたが，残念ながら中止せざるをえなくなった。私はHLAがDNAタイピングされるようになったので，HLAデータの信頼度の上に築かれる人類遺伝学，ヒト免疫学，移植，疾患等々を待ち望んでいたのにと悔やんだ。しかし，当時，世界中でDNAタイピングキット・試薬の開発が進み，自由にキット・試薬が購入できる時代が目の前に到来していた。そして，ヒト抗血清の交換の時代が終焉を迎えていた。

そこで，免疫応答，移植，疾患等々はその民族の遺伝背景の上に成立っていると考えていた私は，2002年に開催される13th IHW&C (Dr. J. Hansen, Seattle)に向けて，①DNAをベースにしたHLA ②癌細胞に発現しているHLAと予後，③サイトカイン及びそのレセプターの遺伝子多型と免疫応答などのグループに入って，活動の火を燃やし続けた。2000年11月にはDr. John Hansenと一緒に北京，上海，東京でHuman Immunogeneticsを推進し，13th IHW&Cを成功させる為の共同研究会議・セミナーを持ち，21世紀に向かっての出発をした。

13th IHW&C (2002, May-June)が無事に終わり，世界のHLAタイピングは血清学の時代に終止符を打ち，前面的にDNAタイピングに突入した。ところがSNPsのあることがわかり，HLA polymorphismはパーソナル型の時代に入った。ヒト免疫学／ヒト免疫遺伝学／人類遺伝学／疾患感受性／自己免疫疾患／感染症／癌／等々が見直される時代になったことを強く感じた。そして，データがDNAデータベースとして保存されたことは，人類にとって大きな意義があったと思う。また，私が参画したCytokine / Receptor polymorphisumのグループが途中から主催者代表のDr. John Hansenによって取り上げられたこともHuman Immunogeneticsにとって大切なことであった。

私はこのグループに参画したので，ヒト免疫学の教科書をHuman Immunogeneticsを基礎にして，少なくも2つか，3つの大きなグループに人類を分けて編集する必要性のあることを痛感した。ワークショップ最後の日の懇親会の夜，人類遺伝学を担当したアメリカのDr. Henry A. Erlichに“ヒト免疫学の教科書は日本人と欧米人と分けて書かないと”と話しかけて見ると驚いた顔つきになった。

一年半が経過して2003年9月17–19日での7th Asia-Oceania Histocompatibility Workshop (AOH)(軽井沢，猪子教授，第1回AOH辻教授開催，第3回AOH相沢教授開催)の時，Dr. H. A. Erlichは私に目映いまなざしを向けていた。Dr. John Hansenに教科書つくりを手伝ってくれと冗談交じりに頼んでみると，にやっと笑って，反応していた。

2003年9月15–16日，第12回日本組織適合性学会(軽井沢，猪子教授)の理事会・評議委員会の時，軽井沢で赤座さんに会った。退職したらどうするの？「血清学をやろうと思ってみている」と恥かしそうに答えた。DNAタイピングでも完璧ではなく，DNAシークエンスをしても機能と直結しないかもしれない現状では，赤座さんの読みは深いのかもしれないと思った。研究者は始めた当時のテーマに帰るとよく言われているが，彼もそのような心境に入っているのかと思いつつ，それはいいね，AYシリーズは生きているものね，と顔を見合わせた。彼も新口生物の域を出られないでいた。

「臓器移植もHLAはDNAタイピングへ移行」

私は平成7年（1995)，退官の半年前より要請があったので，医師として今までの経験を生かして，患者さんに，社会に尽くしたいと思い，研究の傍ら(社)日本腎臓移植ネットワーク(1995年には全国ネットの(社)日本腎移植ネットワークが発足した。1997年にはいよいよ日本でも脳死下の臓器移植がスタート，(社)日本臓器移植ネットワークに改名した)でHLAタイピングのための準備委員会会長としてお手伝いを始めた。現在は(社)日本臓器移植ネットワークの移植検査業務担当としてボランティア活動を続けている。

この数年間を振り返ってみると，全国の移植検査施設(56施設)の協力のもとにレシピエント，ドナーのHLAタイピングは，初めヒトが作る抗血清／マウスが作る単クローン抗体を用いて血清学的タイピングで始まった。途中からHLA-DRのDNAタイピングを先ず軌道に乗せ，次にHLA-A, -Bを含めたDNAタイピングを2002年4月から実地，精度の高いHLAタイピングに移行することができた。

こんな単純な事業でありながら，国，県，団体，の検査施設を一丸として，患者様のために軌道に乗せることの難しさを日々体験してきたのである。

また，私は今，1985年に立てた Theory「Multi-hit attack therapy against cancer／癌に対する多重・波状攻撃療法」に則って癌に挑戦しようとしている。ヒトのウイルス性癌を対象にして光線力学的治療（PDT）と免疫療法／光と抗腫瘍免疫／PDT を中心にしたヒト腫瘍の治療・予防モデルを確立するために，HLA や Cytokine / Receptor polymorphisum の検索も加え，多くの国内外の仲間，教え子達の協力も得つつ，浜松医科大学において総まとめに入ったのである。（現浜松医科大学名誉教授・光量子医学研究センター技術補佐員／〒431–3192 浜松市半田町 1 丁目 20 番 1 号）

最後に HLA，H-2 研究に対し，村上省三先生，山村雄一先生，相沢 幹先生，関口進先生，板倉克明先生，松倉先生，D. B. Amos 先生，F. Kissmeyer-Nielsen 先生，R. Payne 先生，R. Ceppellini 先生，J. G. Bodmer 先生，D. Shreffler 先生，H. Festenstein 先生方を偲び，感謝しながら筆を置きます。

参考資料

1）相沢幹：日本における HLA 研究の歴史，*MHC* & IRS, Vol. 1 (1), 7–10, 1994.
2）柏木登：第 1 回日本組織適合性学会大会とその開催までを回顧して，*MHC* & IRS, Vol. 1 (1), 11–12, 1994.
3）吉田孝人：第 3 回日本組織適合性学会大会にあたって—MHC & IRS の創刊を祝う—，*MHC* & IRS, Vol. 1 (1), 14, 1994.
4）赤座達也：［シリーズ：HLA 研究者の個人史］HLA タイピングをはじめたころ（愛知県がんセンター時代），*MHC*, Vol. 4 (1), 56–60, 1997.
5）吉田孝人・赤座達也編集：日本人の HLA 第 10 回日本 HLA ワークショップ共同報告，今日の移植・別冊特集号 Vol. 4 SUPPL.2, 1991.
6）*MHC* & IRS, Vol. 1 (1)：日本組織適合性学会発行
7）HLA 1991，Vol. 1，2 (Ed. K. Tsuji, M. Aizawa, T. Sasazuki) Oxford Science Publication, 1992.

1964 年 日本移植学会発足。1970 年 日本免疫学会発足。1972 年 日本組織適合性研究会発足

日本組織適合性学会
平成14年度 決算報告書

自 平成14年4月 1日
至 平成15年3月31日

(収入の部)	予 算	決 算	差 異
会員年会費	3,800,000	3,604,700	−195,300
前受け金	0	277,000	277,000
学会誌広告費	1,100,000	1,150,000	50,000
学会誌販売	100,000	154,924	54,924
QCワークショップ	400,000	62,000	−338,000
利息	2,000	59	−1,941
当期収入合計	5,402,000	5,248,683	−153,317
前年度繰越金	4,212,419	4,212,419	0
収入合計	9,614,419	9,461,102	−153,317

(支出の部)	予算	決算	差異
大会援助金	0	0	0
学会誌作成費	3,000,000	3,117,450	−117,450
旅費	200,000	0	200,000
通信費	250,000	207,430	42,570
事務費	50,000	36,877	13,123
会議費	50,000	45,324	4,676
事務委託費	500,000	451,227	48,773
QCワークショップ	400,000	133,779	266,221
当期支出合計	4,450,000	3,992,087	457,913
次期繰越金	5,164,419	5,469,015	−304,596
支出合計	9,614,419	9,461,102	153,317
当期収支差額	952,000	1,256,596	−304,596

繰越金内訳
(内訳 定期: 2,000,000 普通: 1,213,350 事務センター: 2,254,445 現金: 1,220)
平成14年度日本組織適合性学会認定制度会計を監査し，適正であったことを認めます。
平成15年8月 日本組織適合性学会 監事

片桐 一 吉田 孝人

日本組織適合性学会
平成15年度予算案

自　平成15年4月　1日
至　平成16年3月31日

収　入	15年度	14年度(決算)	差　異
前年度繰越金	5,469,015	5,164,419	–304,596
会員年会費	3,600,000	3,604,700	4,700
前受け金	250,000	277,000	27,000
学会誌広告費	1,150,000	1,150,000	0
学会誌販売等	150,000	154,924	4,924
QCワークショップ	0	62,000	62,000
利息	50	59	9
当期収入計	5,150,050	5,248,683	98,633
計	10,619,065	10,413,102	–205,963

支　出	15年度	14年度(決算)	差　異
大会援助金	1,000,000	0	–1,000,000
学会誌作成費	3,150,000	3,117,450	–32,550
旅費	200,000	0	–200,000
通信費	200,000	207,430	7,430
事務費	50,000	36,877	–13,123
会議費	50,000	45,324	–4,676
事務委託費	500,000	451,227	–48,773
QCワークショップ		133,779	133,779
繰越金	5,469,065	5,469,015	–50
当期支出計	5,150,000	3,992,087	–1,157,913
当期収支差額	50	1,256,596	1,256,546
計	10,619,065	10,413,102	–205,963

日本組織適合性学会
平成16年度予算案

自　平成16年4月　1日
至　平成17年3月31日

収　入	16年度	15年度	差　異
前年度繰越金	5,469,065	5,469,015	–50
会員年会費	3,600,000	3,600,000	0
前受け金	250,000	250,000	0
学会誌広告費	1,150,000	1,150,000	0
学会誌販売等	150,000	150,000	0
利息	50	50	0
当期収入計	5,150,050	5,150,050	0
計	10,619,115	10,619,065	–50

支　出	16年度	15年度	差　異
大会援助金	1,000,000	1,000,000	0
学会誌作成費	3,150,000	3,150,000	0
旅費	200,000	200,000	0
通信費	200,000	200,000	0
事務費	50,000	50,000	0
会議費	50,000	50,000	0
事務委託費	500,000	500,000	0
繰越金	5,469,115	5,469,065	–50
当期支出計	5,150,000	5,150,000	0
当期収支差額	50	50	0
計	10,619,115	10,619,065	–50

日本組織適合性学会
平成14年度　認定制度決算報告書

自　平成14年4月　1日
至　平成15年3月31日

(収入の部)	予　算	決　算	差　異
申請料(指導者)	1,850,000	1,900,000	−50,000
申請料(技術者)	1,160,000	1,160,000	0
講習会参加費	236,000	236,000	0
QCワークショップ	0	186,000	−186,000
利　息	10	29	−19
当期収入合計	3,246,010	3,482,029	−236,019
前年度繰越金	100	100	0
収入合計	3,246,110	3,482,129	−236,019

(支出の部)	予　算	決　算	差　異
事業経費	0	204,750	−204,750
実技研修費委託費	290,000	190,000	100,000
会場費	120,000		120,000
講師費	0	0	0
QCワークショップ	0	0	0
会議費	80,000	38,115	41,885
旅費	80,000	185,200	−105,200
通信費	20,000	27,110	−7,110
事務費	250,000	15,441	234,559
当期支出合計	840,000	660,616	179,384
次期繰越金	2,406,110	2,821,513	−415,403
支出合計	3,246,110	3,482,129	−236,019
当期収支差額	2,406,010	2,821,413	−415,403

繰越金内訳
(内訳　普通：2,818,044　現金：3,469)
平成14年度日本組織適合性学会認定制度会計を監査し，適正であったことを認めます。
平成15年8月　　日本組織適合性学会　監事
片桐　一　　吉田　孝人

日本組織適合性学会
認定制度委員会　平成15年度予算(案)

自　平成15年4月　1日
至　平成16年3月31日

(収入の部)	15年度	14年度(決算)	差　異
前年度繰越金	2,821,413	0	–2,821,413
申請料(指導者)	600,000	1,210,000	610,000
申請料(技術者)	240,000	1,850,000	1,610,000
講習会参加費	50,000	236,000	186,000
QCワークショップ	200,000	186,000	–14,000
利息	30	29	–1
当期収入計	1,090,030	3,482,029	2,391,999
合計	3,911,443	3,482,029	–429,414

(支出の部)	15年度	14年度(決算)	差　異
事業経費	200,000	204,750	4,750
実技研修費委託費	100,000	190,000	90,000
会場費	100,000	0	–100,000
講師費	200,000	0	–200,000
QCワークショップ	200,000 0	–200,000	
会議費	40,000	38,115	–1,885
旅費	200,000	185,200	–14,800
通信費	30,000	27,110	–2,890
事務費	20,000	15,441	–4,559
当期支出計	1,090,000	660,616	–429,384
次年度繰越金	2,821,443	2,821,413	–30
合計	3,911,443	3,482,029	–429,414
当期収支差額	30	2,821,413	2,821,383

日本組織適合性学会
認定制度委員会　平成16年度予算(案)

自　平成16年4月　1日
至　平成17年3月31日

(収入の部)	16年度	15年度	差　異
前年度繰越金	2,821,473	2,821,443	30
申請料(指導者)	250,000	600,000	–350,000
申請料(技術者)	200,000	240,000	–40,000
講習会参加費	50,000	50,000	0
QCワークショップ	200,000	200,000	0
利息	30	30	0
当期収入計	700,030	1,090,030	–390,000
合計	3,521,503	3,911,473	–389,970

(支出の部)	16年度	15年度	差　異
事業経費	100,000	200,000	
実技研修費委託費	75,000	100,000	–25,000
会場費	100,000	100,000	0
講師費	200,000	200,000	0
QCワークショップ	200,000	200,000	0
会議費	40,000	40,000	0
旅費	200,000	200,000	0
通信費	30,000	30,000	0
事務費	20,000	20,000	0
当期支出計	965,000	1,090,000	–125,000
次年度繰越金	2,556,503	2,821,473	–264,970
合計	3,521,503	3,911,473	–389,970
当期収支差額	–264,970	30	–265,000

平成 15 年度認定 HLA 検査技術者登録名簿（敬称略）

（認定期間：平成 15 年 9 月 15 日から平成 20 年 9 月 14 日）

認定番号	氏　名	認定番号	氏　名
G03001	細川　美香	G03007	梅津　昭子
G03002	立野　順子	G03008	寺木　佳子
G03003	阿部　操	G03009	野田　岳
G03004	大塚　裕子	G03010	峯元　睦子
G03005	山下　省一	G03011	辻　博昭
G03006	松山　雄一	G03012	高橋めぐみ

平成 15 年度認定組織適合性指導者登録名簿（敬称略）

（認定期間：平成 15 年 9 月 15 日から平成 20 年 9 月 14 日）

認定番号	氏　名	認定番号	氏　名
S03001	渡辺　真穂	S03008	野村　昌作
S03002	斉藤　敏	S03009	重成　敦子
S03003	小幡　文弥	S03010	福西　孝信
S03004	荒木　延夫	S03011	田中　秀則
S03005	勝山　善彦	S03012	兼重　俊彦
S03006	関本　達也	S03013	西村　泰治
S03007	吉川　枝里		

日本組織適合性学会誌 MHC の投稿規定

1. 投稿規定

1.1. 原稿様式

提出原稿がそのまま電算写植で印刷できるように，原稿は全て，コンピューターのフロッピーディスクとA4サイズでプリントアウトしたものの両者を提出する。ソフトはMSWordとする。字体，サイズ，行の字数，行間，などの体裁は自由とする。また，図表については，写植でそのまま掲載できるものを提出するが，挿入箇所を本文に指定する。図については天地を明示する。印刷の際に，縮小または拡大する場合があるので，考慮すること。また，図表の題や説明はワードで，本文とは別頁に添付する。なお，掲載された論文等の著作権は，日本組織適合性学会に属し，インターネットを通じて電子配信されることがあります。

1.2. 原著論文

会員からの投稿を原則とするが，編集委員会が依頼することもありうる。日本語，英語を問わない。最初の一頁はタイトルページとし，タイトル，著者名，所属，脚注として代表者とその連絡先(電話，FAX，E-mail，郵便番号，住所)を記す。タイトル，著者名，所属は次の様式にしたがう。

Nucleotide sequence for a Cw8 subtype, Cw8N, and its association with HLA-B alleles. Fumiaki Nakajima[1], Yoshihide Ishikawa[2], Junko Nakamura[1], Toshio Okano[1], Chieko Mori[1], Toshikazu Yokota[1], Ling Lin[2)3)], Katsushi Tokunaga[1] and Takeo Juji[1]

1) Kanagawa Red Cross Blood Center, Kanagawa, Japan
2) Department of Research, Japan Red Cross Central Blood Center, Tokyo, Japan
3) Department of Transfusion and Immunohematology, University of Tokyo, Tokyo, Japan

HLA-Cw8 のサブタイプ“Cw8N”の塩基配列および HLA-B 座との関連分析

中島 文明[1]，石川 善英[2]，中村 淳子[1]，岡野 俊生[1]，森 知恵子[1]，横田 敏和[1]，林 玲[2)3)]，徳永 勝士[2]，十字 猛夫[2]

1) 神奈川県赤十字センター，検査課，
2) 日本赤十字中央血液センター，研究一課，
3) 東京大学医学部附属病院，輸血部，

内容は二頁目よりはじめ，要約(Summary)，はじめに(Introduction)，材料と方法(Materials and Methods)，結果(Results)，考察(Discussion)，参考文献(References)の順に記載する。また，要約の末尾に日本語で5語以内のキーワードを加える(英文の場合には英語の Key words を加える)。脚注は適宜，設けてもよい。日本語で投稿の場合には，末尾に英語のタイトル，著者名，所属(様式は上述に従う)，英語の要約と英語で5語以内の Key words をつける。枚数に特に指定はないが，速報的な短報(全体で，2,000～3,000字，出来上りA4版で2～4枚程度)を中心とする。もちろん，full article も歓迎する。また，新対立遺伝子，日本人に認められた希な対立遺伝子に関する報告も受け付ける。なお，参考文献(References)の記載については，下記1.5を参照すること，オリジナル1部にコピー3部を添えて，編集長宛(下記3参照)に送付する。

1.3. 総説，シリーズその他

編集委員会からの依頼を原則とするが，会員からの投稿も大いに歓迎する。日本語を原則とする。タイトル，著者名，所属は上記1.2.の通りにしたがい，要約と要約の末尾に日本語で5語以内のキーワードを添える。その他の体裁は自由とするが，構成がいくつかの章，節などから成る場合には，次の番号に従い，適当な見出しを添える。

1. 2. 3. 4. ……
1.1. 1.2. 1.3. ……
1.1.1. 1.1.2. 1.1.3. ……

脚注は適宜，設けてもよい。なお，参考文献（References）の記載については，下記 1.2.を参照すること。

1.4. 校　正

校正は編集委員が行い，特別な場合を除き，執筆者は校正を行わない。

1.5. 参考文献

参考文献は，本文中に数字で，例えば(3)，の様に表示し，末尾にまとめて，次のようなスタイルで記載する。ただし，著者名，または編集者名は，筆頭3名まで記載し，以下は省略する。

1. Komatsu-Wakui M, Tokunaga K, Ishikawa Y, *et al.*: Wide distribution of the MICA-MICB null haplotype in East Asian. *Tissue Antigens* **57** (1): 1–8, 2001.
2. Tokunaga K, Imanishi T, Takahashi K, *et al.*: On the origin and dispersal of East Asian populations as viewed from HLA haplotypes. *Prehistoric Mongoloid Dispersals* (eds. Akazawa T, Szathmary EJ), Oxford University Press, p. 187–197, 1996.
3. 徳永勝士，尾本恵市，藤井康彦ら：HLA に連鎖した遺伝標識に関するハプロタイプ調査，移植，**18**: 179–189, 1983.
4. 徳永勝士，大橋 順：疾患遺伝子の探索．わかる実験医学シリーズ「ゲノム医科学がわかる」（菅野純夫編），羊土社，p. 48–55, 2001.

2. 別　刷

原著論文については，別刷は有料とする。その費用は部数，頁数による。

3. 原稿送付先

〒113–0033　東京都文京区本郷 7–3–1
東京大学大学院医学系研究科
人類遺伝学分野
日本組織適合性学会誌 MHC
編集長　徳永　勝士
TEL: 03–5841–3692
FAX: 03–5802–2907
E-mail: tokunaga@m.u-tokyo.ac.jp

編集後記

9月に軽井沢で行いました第7回アジアオセアニア組織適合性会議と第12回日本組織適合性学会を，皆様の暖かいお力添えによりまして，無事終了することができました。特にアジアオセアニア組織適合性会議については，1998年インドのデリーでの前回大会より，大会長の指名を受けてから5年もの長きの間(最初の予定では2002年に行なう予定でしたが，シアトルの第13回国際組織適合性会議が一年間延期されたので，それに呼応してアオセアニア組織適合性会議も一年間延期して2003年開催になりました)，心に残っていた難題に満ちた宿題から，解放された気分です。しかしながら，一年間延期したお陰で，2003年4月のヒトゲノム全塩基配列の決定を受けて，アオセアニア組織適合性会議ではゲノム多様性を前面にうちだすことができ，HLA領域での新しいが学問の局面を会議で提示しえたことは，良かったと思います。すなわち，個々人のゲノム配列上の多型を突きつめることにより，疾患，移植，進化，連鎖，ハプロタイプなど重要な生物現象を分子レベルで，遺伝学的に捉えることができる基盤をHLA領域上でしめせたことです。これらの試みは，2005年にメルボルンで開催される14回国際組織適合性会議に引き継がれることになっています。会長のJames McCluskeyの手腕に期待しましょう。

猪子　英俊

MHCバックナンバー

一冊¥2,000にて購入可能です。学会事務局までお問い合わせ下さい。発行より2年を経過したものは，在庫が少数になっている場合もありますのでご了承ください。

入会・変更

新入会，住所変更は学会事務センターまでお問い合わせください。また，日本組織適合性学会ホームページの入会申込書もご利用下さい。

(社)学会事務センター
〒113–8622
東京都文京区本駒込5–16–9　学会センターC21
TEL: 03–5814–5810
FAX: 03–5814–5825

日本組織適合性学会ホームページ

学会活動に関する情報やHLA遺伝子の塩基配列情報が利用できます。

http://square.umin.ac.jp/JSHI/mhc.html
http://jshi.umin.ac.jp/mhc.html

MHC
Major Histocompatibility Complex
Official Journal of Japanese Society for Histocompatibility and Immunogenetics
2004年1月31日発行　10巻3号，2004
定価　2,000円
発行　日本組織適合性学会(会長　猪子　英俊)
編集　日本組織適合性学会編集委員会(編集担当理事　徳永　勝士)
平成8年7月24日　学術刊行物認可

日本組織適合性学会事務局(事務担当理事　十字　猛夫)
〒259–1193　神奈川県伊勢原市望星台　東海大学医学部分子生命科学系遺伝情報部門内
印刷・研究社印刷株式会社
〒352–0011　埼玉県新座市野火止7–14–8